

3172

西洋風俗記

027344-000-8

特26-848

西洋風俗記

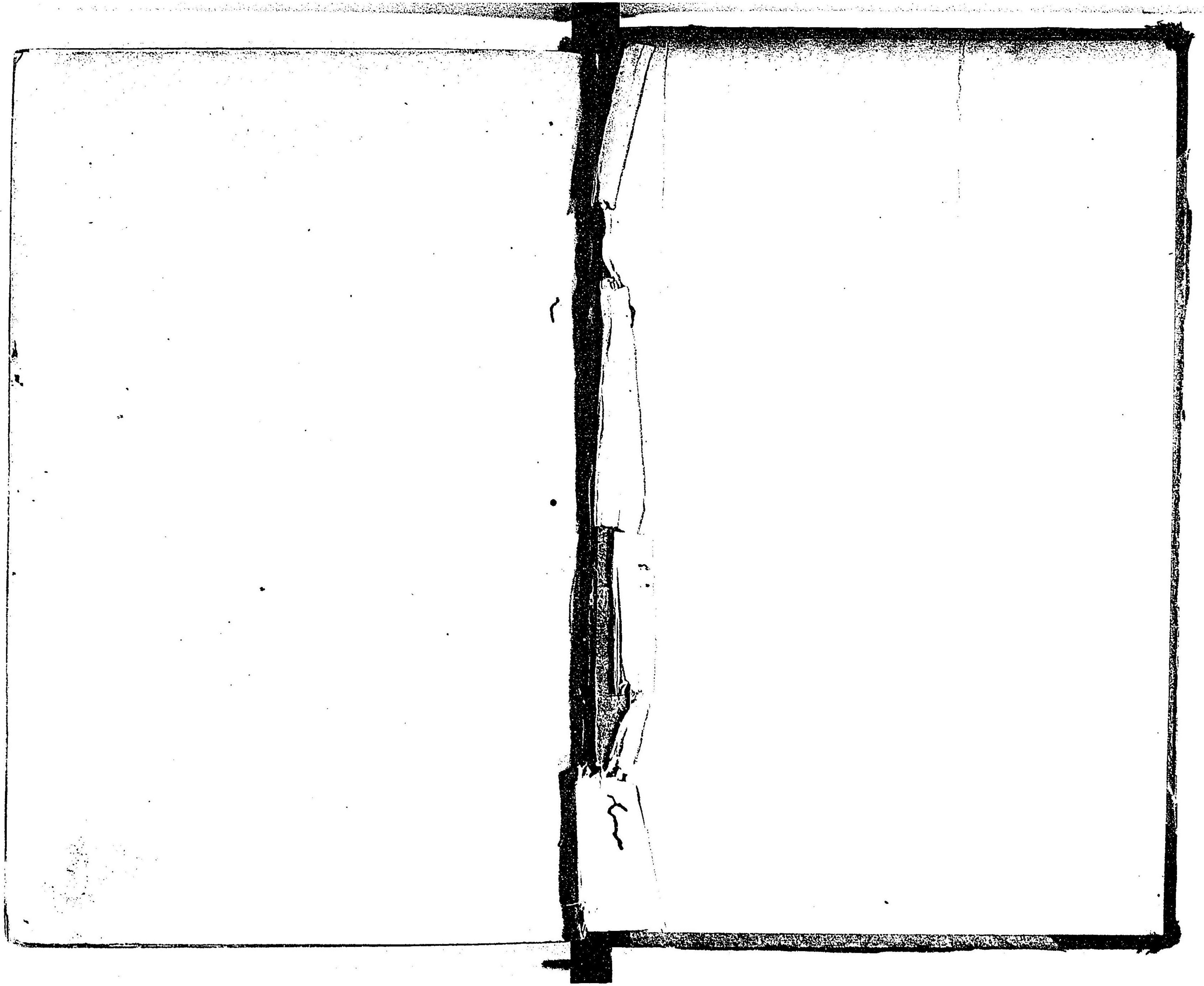
西澣生/著

M20

ADJ-0099









明治二十年五月十七日內務省交付

特26  
848  
代  
會



實地  
遊覽

# 西洋風俗記全

米國學士ニキルスタウー氏校閱  
日本 廣瀨茂一君編輯

報知新聞社負西遊君答案  
吉田熹六君紀事





實地遊覽 西洋風俗記叙

我邦の外國と交通を昉えし。其例遠く往昔よりと雖も。當時は彼我共々開化の度低かりしを以て。互々長短を交換するの道を知らざりき。中世唐と交通するに及びて。制度文物皆彼が長を取て以て我が短を補ふに至りぬ。是れ稍々進歩の端緒を開けらるゝ似たり。降て徳川氏に至て。外交漸く滋を致し。嘉永癸丑米艦の渡來より。轉々頻繁錯雜を加へ。安政己未終に五國の條約を頒ち。横濱港を開くに及びて。風俗の變遷最も著きを見たり。而して明治維新の大政を布かれ。更々歐米の交通を盛にせ



られてより以來。日進月化長短相補ひ。上の政事より下の人俗に至るまで。殆ど前日の面目を存せざと謂ふも。敢て過言よハあらざるべし然り而して開明の度。日々に益々進み。交通の道。月々に愈々廣りて。日ならざ將よ内地雜居の大觀を見むとす。此時よ當て苟も智ある者は。一日も早之其準備をなすに勉むる所なとむば非ざるあり。然らば則ち之が準備をなすの道如何。是れ其事一ならずと雖と。先づ彼の風俗人情を知りて。我が陋慣弊習を去り。歐人よ伍し米客よ隣りするも。敢て其嘲笑を蒙らざ。相俱よ文明の美菓を啖ひ。開化の醇醪

を喫し。以て永く友邦と和睦親交する事を講ざるに在りとす。而して我邦同胞兄弟の多き三千七百余萬ありて。其中よ未だ時態の如何世界の如何を知らざる者往々ありてあり。是を以て先達の士後進の輩を誘導して。開明の樂みを知らしむることとを務まばあるべからず。是れ廣瀨生の此著ある所以なり。此書専ら西洋諸國の風俗文物の千種萬體なるを輯録したれば。一度び之を讀むときは。以て彼の國情よ通ぜべく。以て彼我交際の道を知るべく。其雜居の準備よ裨益ある。蓋し尠少ならざるべし。嗚呼。我邦外國と交通するの跡。往昔ハ姑く舍



き。之を嘉永癸丑より今日に至るまでの世變に察せば。其開進や誠と驚くも堪へたる者あり稿成て叙を乞はる。因て一言を書ずると斯くの如し

明治二十年四月

洗竹居主人 識

目次

- 西洋よて衣服、帽子、靴杯の様子の事
- 日耳曼の英佛と異りたる趣きの事
- 食事の工合の事
- 西洋常用の茶の事
- 英國人杯の行儀一般の事
- 吉事凶事の時の衣服の様子の事
- 西洋にて下女の有様の事
- 彼岸の團子玄猪萩餅の事
- 正月の祝の事
- クリストマスの前後に芝居を致す事
- 西洋人の相貌骨格の事
- 日曜日の有様の事

- 西洋諸國にて鴉眼を貴ぶの事
- 西洋婦人の毛髪モウヘの事
- 公園の有様の事
- 伊太利の古蹟の事
- 瀛車馬車の振合の事
- 西洋諸國の男女の髪カミの流行の事
- 男子の口髭クチヒゲの摸様の事
- 鐵道馬車乗合馬車の趣きの事
- 寄席の事 附 落話 手品 輕業の事
- 辻馬車の趣の事
- 音樂場の建物の事
- 劇場等にて演エンせる躍所作の事



目錄二

- 西洋家屋の有様の事
- 道路の有様の事
- 他人の宅を訪問する時の事 △
- 居酒屋の事 附 手代の事 △
- 倫敦にて賣る魚類の事
- 野菜類の事
- 倫敦のホテルの体裁の事
- アルプス山の景色の事 △
- 倫敦の氣候の事
- 春花の景色の事
- 人家に近き鳥類の事
- 倫敦の雪景色の事
- 自轉車の有様の事

- モルモン宗徒の事
- ソート、ローキ、シテーの有様の事
- 一夫多妻の有様の事
- 歳暮年始の儀式の事
- クリスマスの景況の事
- 英國にて品物を贈答する事
- 倫敦邊にて氣候の異りたるより推及せる色々の風俗の事
- 新聞紙の事
- 新聞社が會議の筆記を取る事
- 湯屋の模様
- パノラマ展覧の事
- 競馬の有様の事

- 伊太利と英國との風俗等の相違の事
- 伊太利の衣服家屋の事
- 鳥の種類
- 鳥類の風味の事
- 羅馬府の有様の事
- 羅馬名所の事
- 八百屋杯の來る事
- 西洋諸國新聞紙の体裁の事
- 衣服の外套の事
- 英國にて議員大改選の節改進黨の兩黨が選挙に勝敗を争ふ事
- チヤムペルライン氏の演説の事
- 選挙人投票の手續の事

- 大改選總休の有様の事
- メスメリズムの事
- 西洋の芝居の事
- 狂言の事
- 日本の俄と申す様なるもの、事
- 雌方及び床淨瑠璃の事
- 幕の工合の事
- 東京の芝居と比較の事
- 棧敷の事
- 平土問の事
- 燈火の工合の事
- 舞臺の飾付の事
- 芝居よみて慘酷の所作を避る事

目錄三



● 役者舞臺等の有様の事

● 芝居の馬杯の事

● 芝居筋書の事

● 記事の部

● 歴的瀾洋を航る事

● 日本人と西班牙人に見違へたる事

● 紐育に到着する前船中にて訣別會を催す事

● 米陸に到着の事

● 下宿屋の事

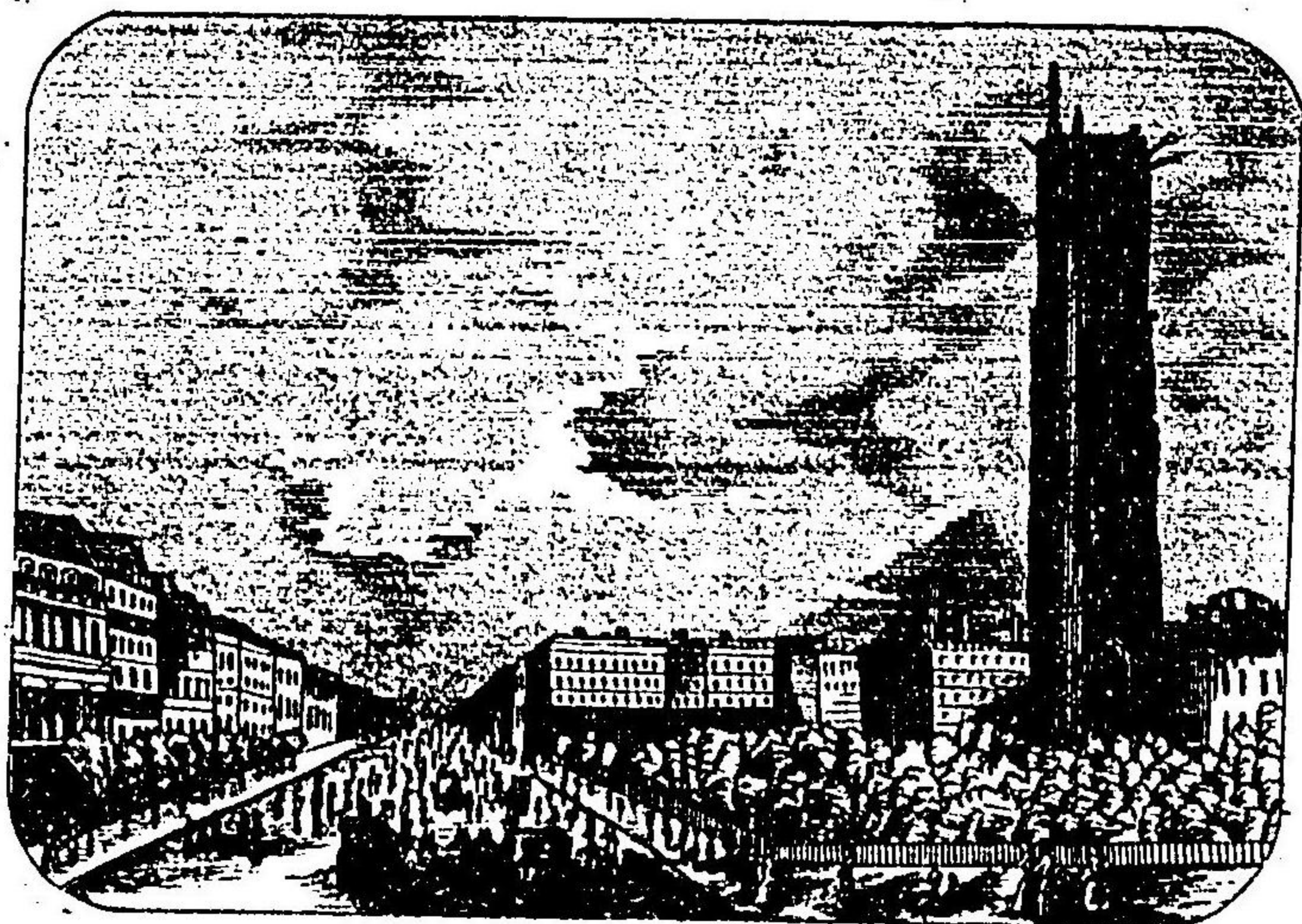
● グラント將軍墳墓の事

目次終





米 國 二 一 ヨ ー ク 之 圖



佛 國 帕 里 斯 之 圖



英 國 羅 士 頓 之 圖

*Paris*

*London*



實地 遊覽 西洋 風俗 記

郵便報知新聞社員

西 澁 生

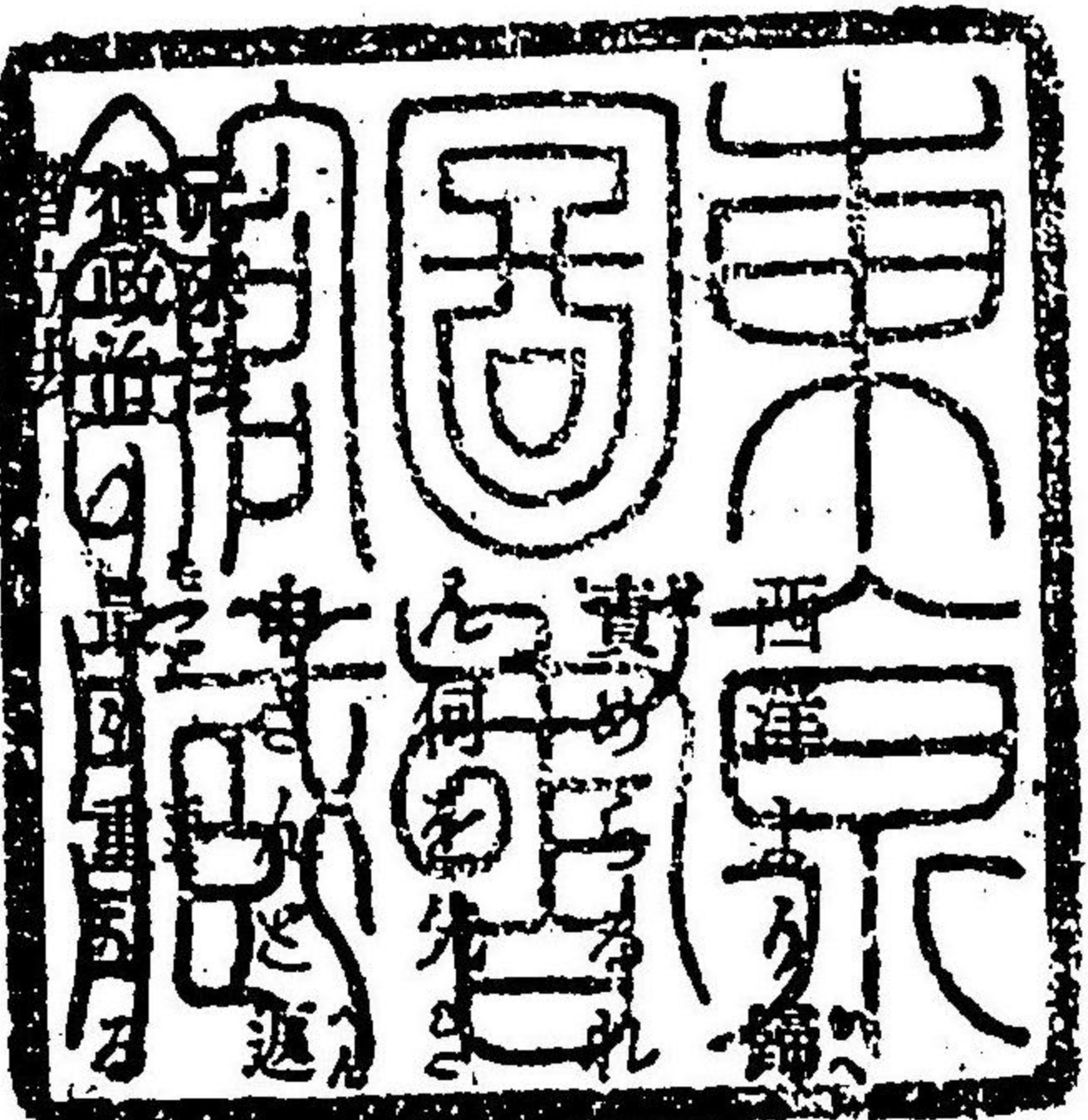
答案

吉田 熹 六

紀事

廣瀬 茂 一

編輯



者以其國習慣  
規定之者也  
則謂之原素固  
當矣

西洋の風俗記たる當分の違ふ人も見る人も皆な西洋の土産話せよと嘆  
責められたる政治法律杯の事柄と違ひ際限なき浮世話の何より始め  
と何れ先きにせんと云ふ次第も立ちかぬれば先づ御尋ねに任せて御話  
申さずと返答するを常にせり今日の日本人に就て西洋の事物は味らさ  
るものにて在らざして却て風儀習俗の細事に在るなり而して其風儀習俗  
の細事の取りも直さざ政治なり法律なりの由りて生る所の原素とな  
るものなれば苟も國の眞との根を看んとするに細事を見ゆる風儀習  
俗こそ却て大切なる意味あるものなるなれば朋友故舊問一時の朋



答も或の今日の開點を補ふて西洋風俗の一端を知らしむる便りになる  
事もやと續々之を掲るととあせり

○問 西洋にて衣服帽子靴杯の様子如何に候や其着様格好如何に候や

○答 私共が始めて巴里に到着し亦た倫敦に参りたる時第一に目立ちて

買へたるの町中往來の人の帽子に候凡そ中以上と見ゆる人々の皆な日本

にて禮帽と稱なへ居る高き絹の帽子を冠り辻々に屯せる馬車夫までも派

出を貴ぶ連中の皆な同様又の之に價せたる塗物の高帽を戴けり日本にて

尋常冠り候低き羅紗の丸帽子の牛乳配八百屋荷車曳等より下の乞食まで

都て先づ手足を働かそ中以下の人の冠物に候尤も旅行杯致そ時に遠路

の處職然と高帽を聳かし詰めに参るも窮屈なれば輕便なる右の羅紗帽子

を着るを多しとす左れと凡べて應對向杯に高帽と云へる者紳士の常装

なり居る事なれば大抵身元ある人の旅行するにも別に之を箱に入れて携

帶せる習なり日本より初て参りたる者が郷に入ての郷に従へと心穩やか

我紳士  
多被羅  
紗帽是  
傲彼蔬  
賣脚夫  
者乎

見裝飾  
斷餘卑  
東西相  
同

あらぬ面色し乍ら餘儀なく彼の高帽を冠り買物に出掛けたる又前日の「

」とか「イ、エ」とか答へ放しなりし煙草屋の亭主が今日の急に「一旦那」

、エ旦那」と忽ち旦那の尊号を加へし杯の笑話の甚だ多きとなり倫敦杯に

て中以下の家の息子様<sup>おにこさま</sup>に在りての早く算筆に達して商館の手代にでも住

込み絹の高帽を冠り見度との一事年少中第一の大望に候

衣服の先づ倫敦を以て申さば通例半マントル(モーニングコート)を着ると

に候中にのフロックコートを着るもあれど甚だ少し尤も上衣直衣をば黒

地にしズボンに何か縞物を用ること尋常の取合せとする事のマントル

もコートも同様なり上下共に眞黒なる出立ちなるも全くなきにのあらぬ

と極て希れなり附け襟の今日日本に流行居る立襟にて襟飾の「又」の字

形の懸飾を多しとす黒色蝶形の結飾の老人用にて少壯の人の着けぬ方

り尤も「又」の字形の懸飾の必ず留針を挿すべき規則なり日本よて針無し

よ之を懸け歩く向も折々見受くる様あるが失休なるべし西洋に在りて



本仕立の洋服の際立ちて變体に覺るの第一上衣直衣とも異常に丈長き  
 第二全体にフックとして身に合はざる様見ゆる事第三ズボンの下口上  
 部と一様に甚だ廣く水夫のマン袋に似たる事第四肩行短くして白襦袢の  
 袖口露れ過ぎる事等なり其他胸の明け方の大小襟の折返へしの廣狹等  
 の時々流行によりて始終移變りもある由なれば強て言はざるべし唯だ  
 何分にも丈の高く双の肩の頸の付け根より両手にかけて「へ」の字形に削  
 り落したる如き優形をなせる柔和魁偉の身体に寸分のズリヒズミなくシ  
 ックリと適なふたる衣服を着けさせたる事なれば其格好誠に都雅に立上  
 りて見ゆる事なり偶々其中に日本人が丈の低く肩の四角張りたる上にフ  
 ッ／＼としたるものを着て立交るときは何か無下に見劣りして我れ乍ら  
 慚づかしき心地するなり三四年前或る英人が日本に遊びたる時の紀行に  
 日本の官員の皆な借着したる様なる衣服にて云々と再三記しゆけたるを  
 見、不平に堪へざりしが成程西洋人の目にて遠慮なく悪口云へり左もあ  
 裁縫之  
 抽精屬  
 可以極  
 巧以至  
 身小無  
 矮如何  
 亦呼可  
 嗚哉

らん歎と嘆息致したる次第に候

○問 日耳曼の英佛杯より些と趣の異なりたる所も多かるべく存候如何

○答 御承知の如く日耳曼の元と許多の國々を併合して今の帝國となり  
 居るものなれば其舊どの國々の分ちによりて一々に吟味せば千差萬別な  
 る候へ共先づ私共伯林近傍を旅行致したる通りかよりの目を以て申せ  
 バ伯林邊の巴里倫敦に異なる物事都て質素に田舎びて見ゆる事に候衣服  
 の半マントルよりもフロックコートを着たる方多き位に候へ共巴里杯の如  
 く綺麗にのなく殊に其帽子の高帽の極て希れよして丸帽の方十の八九な  
 り甚しき麥藁帽子を冠りたる者さへ少からを立交りて相見へ候尤も伊  
 太利杯にても丸帽随分多けれども日耳曼程よいなし唯だ日耳曼もて綺麗  
 に派出やかに見受けたる事軍人の裝束あり流石の武を以て國を建つる  
 處丈に軍人の裝束の水際立ちて花々しく帽子杯の兜形の黒地に白磨きの  
 銀銃うち頂きの中央に獨鈷形の立物したる有様四下眩燁ばかりなり此



人種混同  
因手

邊の如何なる譯にや人の丈様々にて軍人こそ皆な一樣に揃ひ居れ其他往來の人を見わたせば高さの余等より乳以上も高さあれば低さの余等の目下なるもあり参差不同實に甚しく候是の南北人雜りし故斯く不揃あるとにや日耳曼中にては普西亞に限り斯く人の長短参差なる由縁のあり候事よや其邊の未得調べす候へ共兎に角目にの立つ事に候

○問 西洋にて食事の工合の如何に候や日本にて食べる通りの西洋料理を毎日三度く繰返すのみの事に候や

我國農家亦有  
爲夜食者

○答 西洋の朝の起き方通例餘より早からむ故に朝飯(ブレッツファースト)の大抵九時前後に候夫より一時二時の間に晝飯(ランチョン)七時八時の間に夕飯(ディナー)が通例に候此外に夜食(サッパ)と申を十時頃に用る事もあり又近來佛國より始まり來りたる風なりとて「五時の茶と」申す事大分に流行し今の中等の家までの多く之れを用ひ候是の晝飯と夕飯との間五時に茶を飲むとにて腹加減にの恰好の處なり但是の茶を用る時

の少々心して夕飯を延ばすの臺所の作畧にあり世帯持ちの婦人同士にありての是の五時の茶の折を指して相訪問れ共に茶を飲み乍ら四方山の話なす杯の工合尤も妙なり扱て其食事の厭立の朝食が先づ盥漬の豚を煎りつけたるにウデ玉子、麵包、バター、茶若くはカフヒ一等なり或は豚の代りに乾魚を用る事どもあり又た胃の工合によりては茶と焼麵包、ウデ玉子位にて肉食せざる事もあり晝飯の大抵昨日の夕飯に残りたるローズビーフ(焼牛肉)の冷たさに馬鈴薯のウデたる位を添るを常とし然らざれば何か魚の天麩羅(フライド、フィッシュ)でも用るかなり此外の例の麵包にバターよて是處茶なし飲めば先づ水なり或は時としてハ橙皮を砂糖煮にしたる者又ハチャムと稱しハチャ杯の類を砂糖にて煮詰めてドロクにしたる者又ハゼリと稱し右のチャムを一層精製して滑らかにしたる者恰もチャムハ日本の粒餡よてゼリーの澆餡なり等を添へ置くことどもあり是等の皆なバター同様各自隨意に麵包に塗りて食べるものなり五時の茶ハ茶請として



飲食悉  
滋養消  
非我比

麵包を薄く切りたるにバターを塗りたるををしらふ位にて左したるものな  
し或の之にビスケットを加へチヤム又のゼリー杯を添るとも否とも其の  
臺處の所存次第なり夕飯の一日中第一の馳走にて羹汁、ビーフステーキ、羊  
の切身、焼牛肉、焼鳥杯の類を二三品と馬鈴薯、胡蘿蔔、蕪菁、葱、其他其時々の野  
菜を二三品宛添て之にをしらふ事なり麵包、バターの申すまでも、おし是等を  
食べ了りたる處にて何か一二品甘い物を出す例へば王子を碎きたるに  
牛乳砂糖を交せて煮たる者、林檎の身を小さく切りたるを砂糖に混じ其上  
に小麦の粉の衣をかけたるを蒸焼にしたる者、小麦の粉を日本のホウロク  
焼機に焼き之にレモンの酢をかけ砂糖をふりて食べる者等是の類色々あ  
り左り乍ら是の夕飯中にありて常ねに第一位を占むる焼牛肉(ロースト、  
ビーフ)とウデ蒸なり焼牛肉の大塊の牛肉を遠火にて炙ふりたるものに  
て必しも其時に食へ盡すにのあらむ前に云へる如く残り仕舞置きて翌  
日の晝飯に用るとなり日本にて申せば冷飯の儲をなし置くと同様にて不

大食之  
癖何其  
甚哉

意に食事振れ舞ふべき來人杯ありて料理の用意も十分手廻りかぬる時の  
懇意の間柄に、是の冷牛肉を出しても目前の間合ふとなり即ちお茶漬  
と申す場合なり又馬鈴薯のウデ方の英國自慢の鹽梅のあるものゝ中にて  
晝も夕も善く膳の上と現れ出るなり純粹英人のハエスキと云ふは是の  
焼牛肉とウデ蒸とを兎も角に夥しく食べる事なり英人の大食の歐羅巴の  
名取にて佛國杯に参りても英人なりと申せし何の扱置き一番に焼牛肉と  
ウデ蒸とを山の如くに持て来るを常とすとい英人が自身に語りて打笑ふ  
所なり是の男子のみならず婦人にても随分の大食にて彼の世界の美人の  
標準に支那の足、伊太利の髪、佛國の愛嬌、英國の唇と並らば稱さる程  
唇薄く口で愛らしく生れつさ乍ら其愛らしき口元にて食べるハ、大  
抵の日本男子の迎も叶ひ染めぬ程に候夜食の通例茶と麵包、バターのみにて  
済ませ候或の全く之を用ひざる者も少からず候是の寝しな事故成るへ  
く胃に物の溜らざる様致すよりの事なり尤も以上の唯だ中等人の健を申



したる者にて貧富に應じて其模様色々相變るものなる事を御合點あり  
度候又日曜日の大抵皆な寺院に参詣の都合もあれは是の日丈の夕飯の馳  
走を晝に繰上げ午後茶を飲みある計りにて寺院に参詣し夜分歸宅した  
る處にて尋常飯の料理を食べると申すが多く候

○問 近來の日本の茶追々輸出の途相開たるやに承候西洋にて日本茶御  
見かけの事あり候や西洋常用の茶の如何なる工合のものに候や

○答 日本茶の少々宛も輸出あるは米國へ向ての事にて西洋にあらま  
米國にての宿屋杯にて日本茶を出したる處も少から候へ共西洋にての

於大風 好事奇癖の人の知らま常人比處にての日本茶の顔さへ見かやるとなし西  
洋常用の茶の謂ゆる紅茶にて之に牛乳と砂糖とを混せて飲む事なり故  
に茶とさへ申せば必ず牛乳砂糖を調合せぬのならぬものと心得、余等が

偶々日本茶を入れると杯あれは下女の毎つも牛乳の如何、砂糖の如何と  
尋ねると常例にて牛乳も砂糖も不要と云への何か不審氣な面色に候茶の

與散灰 於大風 一般何 手遠歐 洲各國

平均したる處英國が一番上等の物を用る様相見候佛國の名代のカフヒー  
飲みにてカフヒーの佳しきの佛國、第一なるべく英國より参りたる余等  
に向ての佛人の毎も「英國での迎も斯るカフヒーの召上られまじ」と自慢  
する位又た眞に英國の及ばぬなり左り乍ら斯くカフヒーの方を重もに用  
ゆる丈に茶の頗る疎まるゝ方にて物体に上等の物を用ひぬ様あり又た  
茶世界にて下々と申すは日耳曼なり日耳曼の間もは麥酒の名所よて例の  
甘口にして軟らかなる一種の麥酒を醸出す處なり斯く甘口に軟らかにし  
て酔ふは鮮きか上ま其の價も他國の例にすれの異常に賤く日本の巨安を  
以て一寸概算したる處先つ一合一錢内外が通例なり故に血氣の少壯男子  
の勿論年寄も子供も又た婦女兒も悉く皆な麥酒を嗜み飲み水の代りにも  
麥酒、茶の代りにも麥酒と一切の飲料の麥酒の一手に持切られたる有  
様なり故に家内杯にて茶を用ると云ふとの極少きと見へ偶まに用るを見  
れば誠に言語同斷の惡茶なり余等の宿まりたる宿屋の毎つも大抵其地に

是非酒 價之廉 而因嗜 之者多 造之者 亦多遂 至于此 也



て二どの下らぬ家なりし故茶杯の皆な相應のものを出したりしが伯林逗留中、中ごろより下宿を致したりしに茶の悪き事く形容にも話にもあらざれば二口三口飲みたるのみにて置きたり然るに悪酒の一杯と雖も立どころは効験を頭痛に顯へすが如く僅かに二口三口の悪茶直ち其効験を顯へして當夜の余等兩人共夜半を過る比まで睡ると能はざりき翌日早々に町に往き自から茶を求め來たりしが第一茶を賣る店を見出そとすら餘程苦勞なりしなり漸くにして其店を見出し求め來りし店にて最上飛切と申せる分にありしが矢張余等の口には上げそに堪ざりし又伯林第一のカフヒー店と云へるに往きて茶を試みたりしが是も先づ飲むところ出來たれ中々に倫敦常用の茶に及ぶべくもあらざりし尤も廣き國中の事なれの日耳曼とて我々の未だ得味ぬぬ程の上茶を用ひ居る人も之れ無しとも申されぬと兎に角概したる所にては日耳曼の茶を用ひぬ國と申て宜しかるべく候

○問 日本より西洋に御出の上にて第一に目を駭るか程に目立ち候の何等の事柄に候や

○答 先づ人事に就て申さる英國杯の世間の行儀一般に能行届き萬端の事一切に規則にて律りた程に作法整なひたるとに候右の日本杯と較ぶれば實に際つきて目立ち候程の相違之あり例へば他人に不沙汰見舞をなすが如きも自づから一定の時間ありて至急の用意にあらざれば通例の午後二時半より四時半迄の間に限るとに候左れば故なきは早朝或の夜分或の食事頃に人を訪問して先方を煩らひす如きとの決して之れなく候又婦人杯の前にては又た別して遠慮強く少しにても醜なき事穢さき事に涉たる詞杯の士君子の決して用ひざるとは候假へば「裸體」と申す詞を出だそも最早既に不作法者の如く見へ口に出すを憚かる事又候是の一事にて其他の推して知るべし又少し醜なき話に及ばんとすれは其座にある婦人の聴かぬ眞似し又其話を外事に轉そるか如き程のことに候又殊に感心なるもの

我國不  
敢或時  
限者以  
病中反  
招病者  
之嫌忌  
者注々  
有焉宜  
以鑑矣



食事の節杯臂と臂と相接する位に並び居るも隣席の人に飲食せる唇の音の聞へぬ様に眞しむの一事是れなり始めて日本より赴ひく者の是の事に氣つかせ多くハビヤ〜ムシヤ〜と大なる聲を立て甚だ卑陋野蠻に見ゆるとなり是の一事の最も著るしきとにて日本に歸る後他に招かれ或の同席にて食する内ふても人に因りて二三間隔りても聞ゆべき程にツロ〜と大なる音をさせ乍ら汗を潑り其他の物を食べるに同じくビヤ〜ムシヤ〜と犬猫の食ふ如き大なる音を出すも稀ならずが如く相見候是等の飲食の中に著るしき野卑の相を現はすものなり左れの外國人杯と共に會食する時に是の一事の少しく注意せねば臂に彼等に不行儀不作法を見下げらるゝの恐れあるべし内地雜居も最早遠からざるとにて外國人との交際も必らせ廣く始まるべきとなれぬ些末のとながら言の序に御話レ致し置く事に候

又日本人に極めて多くして西洋にての餘り見受けさる一事の頻りに懷中

是自誇  
人者無  
禮亦甚  
矣

より時計を出して見ると是れなり凡る他人に招かれ饗宴に赴くときの主  
人に對して其待遇の手厚きため心面白く思ひ長坐を爲すと云ふやうに  
そるが禮儀に適ふ譯なり然るに何か忙し氣に懷中より時計を出して眺  
むるの甚だ失禮千萬の譯は候はずや定まれる宴會の席にて人の前を  
からせ時計を出して公然と眺める者杯の殆ど見掛けざるに候然るに日  
本にての上等の士君子の地位を有ちながら斯ることを爲すものも稀に  
受るが如し是の時計を所持する風俗の日本に來りし猶は淺きが故に自  
然是に付ての行儀も定まらぬとに考へらる其他英國杯にてハ士君子の間  
の談話に下掛りたる醜なき話と云ふもの殆んど其口頭より洩す者なき  
位に候尤も斯る下掛りたる話をなさねばならぬ餘義なき場合あるときハ  
兎に角及ぶ限りの皆な慎み之を避るとに候然るに日本にてハ士君子  
の間にも不遠慮に故さら下掛りたる醜なき話を衆人廣坐の中に喋々  
と聲高く述へ立て愧る色のなき向も往々之れあるやう見受け候是等も



甚九目立ち候やうに覺へらる當時の悪疫流行の際なれり別て其邊の話多  
きやの知らされども話さず濟むべきとなれり話さぬ方宜し又話すにも話  
し様のあるべきと存候

常路者  
宜注意

又其内行のいざ知らせ外面儀式の上より云へば西洋にては士君子婦人の  
間に於ては娼妓杯と申す一切之を口頭に出す者なく之を語るさへ耻  
辱なりとする程にてある世の中なる日本は大に是と違ひ偶々雜箱杯する  
者の中にも輸出品の内にて華魁とか唱ふる者の姿杯を縫ひ出し或は描き  
出し之を美術中の一つの飾品様になし置く者ありて西洋の婦人より之の  
如何なる種類に婦人なるやとの問を受け之を娼妓と答へば國の耻辱にて  
娼妓の如き者を斯く品物に送描付け或は縫付けするならば其風俗の紊れ儀  
式の崩れ居る國なりと見下けらるるもの愧かしさに遂に之を娼妓なりと  
答ゆると出来せして是れ日本古代の然るべき婦人なりと胡麻化したる人  
もある程の時に候

即智即  
妙

右の中等一と通りの行儀を云ふものにて夫れそらも猶ほ斯くの如し上等  
社會の人に至りては尙更らるとに候唯だ其下等社會のものに隨分不行  
儀不作法をなす者も少くなからざると乍ら夫れすらも日本に比較する時  
の異常に割合の少くあきとにて如何なる下賤の者と雖も其仲間の婦人に  
向ひ下掛りたる話杯をなすもの殆んどなき程に憚り居候尤も西洋逆も  
其行儀の上には緩急の差別ありて其都びたるを云ひて佛國の萬事英國  
に立ちこへ英國の方の甚だ鄙びて見ゆる時に候左り乍ら又事に因ては佛  
國の方の甚だ鄙びなるともあり婦人杯の行儀に至りては上等の其模範を  
佛國に取るとながら中等以下の行儀に至りては却て英國の方嚴重なりと  
の評判に候又日耳曼に至れり其行儀も少し緩かにて婦人の前にて遠慮す  
るとも英國に比すれり稍や輕き方なりと見ゆ然るも其行儀よきとの中々

余欲印  
刷此一  
問答以

に日本の比にあらざ例への男子に向ふては或は帽を脱がせして禮をなす  
場合もあれども婦人に向ふて禮をなすに一切必せ其帽を脱ぐが如き類



願我國に候

人矯正 舊來之 惡弊不 知有與 余全憾 者否

英國の他國に比して一層行儀の六ヶ敷慮柄にて嘗て或人乃話にも英國にての下女に向てさへ先方が女なるが故に便所の所在を問ひかねる心地を聞きたれ其當初の内にも夫れ程のとのあるまじと思ひ居しに少しく土地馴るるに従ひ實に其言の慮なきを知る候如何にも英國の模様にての下女に向てさへ下掛りたる場所の所在を問ひ難く又下女が餘義あく之に返答する場合に其顔を赧らめて窃やかに知らせ呉れる程の有様に候左れば其他の事も亦御推量なさるべく候

○問 甚だ卑陋なる事をお尋致を様なれど便所を問ふとの下女にさへも遠慮致さぬべなふぬ様にての場合によりての随分御困却の事も多かるべく候

○答 故に先づ大抵は自分の機轉にて何處かと探がし出す事に候家の内なれば問取建方何れも凡そ相似居るがゆゑ大抵見當相付候又た芝居小屋

杯にての凡そ見當の邊を獨りにて彷徨ひ居れり番附賣りの女杯が先方より氣を利かし黙して指ざし教へ呉候又たステーションとか宿屋とかにての左様に長らく彷徨居る暇もなき事多く候ゆゑ其處に居る鐵道の役人又の部屋附の小使杯の耳の處に行き内所にて殿達セントルメンの何處なりやと問ふとに候是の男子の便所に皆な殿達との一語を記したる標札掲げある故に候尤も斯く申して問ひたれのとて其問題が既に卑陋なる事柄なるが故到底行儀宜しき方にの之れなく候へ其先づ旅行中の事急卒中の事として相互に其不法法を恕する丈の事に候

○問 西洋にて吉事凶事の時の衣服の様子を伺度候

○答 吉事の婚儀を以て大禮と致候へ先づ婚儀の裝束より御話致すべく候男子の方の皆な通例の燕尾服なり女子の方も亦た尋常の禮服なれども是の皆な白き色の絹と用ゆ是の點はよく日本に似たりとも申すべし且つ婚儀の時の女子は必ず被を頭より蒙ふり首の周邊に長く寛くシホ

雖衣服 異至其



裝飾殆  
如同

く垂るゝなり是の被も矢張白き色の極薄き絹にて紗の如き類のものなり打かつぎたる所にて顔の透とほりて見ゆる工合甚だ品の宜しきものなり是も亦た善く日本の花嫁乃絹帽子と相似たるものと云ふへし又た花嫁にの必ず侍女(ブライドメイド)と申すが一名或の數名相添て其式に參かる事なるが是の皆な成る可く其親族中の娘の年頃十三四より五六の間なるを擇びて之に仕立つるが定りなり是も亦た支那諸侯の婚儀に同姓の國の姪姉を以て花嫁の腰とすると申すに相似たる趣なり婚儀の時に限りて花嫁の被を蒙りたるのみにて帽子を冠らば但だ橙の花と葉とを綺麗に取合したるを髪に挿み置く事に候尤も是の花葉の何れも剪綴ものに候又凶事の時の衣服の先づ都べて黒き色と申すは悲哀の心を表はすと相見候男子なれば通例の燕尾服なれども襟飾に黒き色を用る事なり元來燕尾服の時の白き色の結飾を着けるが一般の定りなるに凶事の時に亦た必き之を黒色に致すは定りなり又た女子なれば同じく黒色の禮服を着る

となり其喪を服する間の男子なれば常に彼の絹帽子の胴を黒色の切地に幅廣く纏ひ置くなり又絹帽子を冠る程のものにあらせして羅紗帽子を着る方の社會なれば左右何れか片手の袖の二の腕の處に一寸五分乃至二寸許の黒色比切地を縫ひ付け置くなり是等の切地の矢張紗の様なものにて特に喪の時の用のために出來居るものなり女子に至りては喪を服する間黒色の外決して他の色易りの裝束を着けるとなし黒色の衣服の平日も善く着るとにて喪の間にあらざれば黒色の衣服の着られずとの定めあらざれども黒色の衣服にあらざれば喪の間に着られども亦た定りたる作法なり又た其夫を喪あへる婦人の必ず髪の後後に黒色の薄き紗の如き切地を懸け流がせり髻の處にて一寸袋褶をとりて狭ばめ下に一寸許も垂れ居るあり是の舊とウエイル(蒙面)とでも譯そへき歟彼の女子の面に蒙ふる薄絹なりにて顔を蔽ふ様に前に垂れ居たる譯のものなりしに世の推移と共に其制も變じ今の斯く意氣なる姿のも乃になりしなりと云ふ



婦に限りては必ず其帽子に色花の飾を着け何か黒色の切地にては結むすひ置く歟或の飾めきたるものを一も挿さまぬ歟なり若し夫ある婦人の年長けて老境に入りたる後までも猶ほ帽子に色花の飾を着ける事に候

又喪の事に付西洋の風俗のおかしき其衣服の色杯いろさきの右の如くに嚴重にてあり乍ら其喪服を着たる者が無遠慮に芝居寄席杯游あそび歡の場處ばしょに立入るとなり日本なれの喪に居るの衣服杯こそ確かとしたる定りなければ喪の間凡べて謹慎を旨とし成る可く戸外に出つるをも遠慮するが一般の習なりなるに西洋にて芝居寄席杯に至り見れの男子女子とも喪服を着たる儘平氣にて棧敷杯せきしき坐まわり居るが稀まれれならざるの甚た奇異に覺おぼへらるる事に候

○問 西洋よて下女の有様の如何に候や

○答 倫敦杯ロンドンに居ゐるに從したがひ人情の何處も同じきに思當おもひあたる事甚た多し下女の事杯も即ち其一に候倫敦にて世帯持の婦人杯おんなの話はなすを聞け

東京下  
婢多相  
模女大  
阪下婢  
多小豆  
島女喜  
其質朴  
之風万  
里天涯  
相同可  
謂奇哉

倫敦の者の何分に使つかひにくしとて態々近在きんざいのものを召寄せて使ふとなり又た年若かき下女が蔭かげにて囁ささやくを聴けり内の女主人おんなのしゅじんの毎まいつもお前の年が行かぬから氣が付かぬくと叱しかれど云々、又た年長けたる下女と年若かき下女と兩人同居ふたりどうきよせる處にては其年若き方の常に年長けたる方のために凌しのぎ壓おさへらるるゝとて不平絶へせ双方の口論くちろんの末に年若き方が泣く事も屢々しばしばあるなり或の座敷を掃除そうじに來たりたる序ついでに棚の上の菓子を一寸撮つまみ食ふ杯申す者も問々之れある次第に候

下女の仕度しどの甚だ簡單かんたんにて尋常じんじょうの衣服なれども眞まま上と下と揃そろふたりと云ふまでなり肌はだに只ただた襦袢じゆばん一枚まいを着け其上そのうへに更紗さら様の筒袖袴つとせこはらを被かたるのみなるが多し冬分ふゆぶん杯さきの寒さむさも頗さかる殿とんしきに唯ただ是れのみにて能くも堪へたる者なりと想おもふ程に候其立衾たちかきの間まの胸むねより膝ひざの邊へんにかけ白きレースの腹掛はらかけと膝掛ひざかけとを繋つなぎ合あはしたる様なる一種いっしゆの蔽かきを當あて居れり即ち日本の前垂まえたれと云ふ處なり其使杯つかいに出行いってゆく折おりの前垂まえたれを脱はづして白きレースを巻



是所以  
不及倫  
敦巴里

き付けたる小さき帽子を一寸冠ふるなり佛國にての下女が細長きレースを以て背鉢巻の形にし其結ひ餘りの尾をバ一尺許りもヒラ〜と下げ居る様些細の事乍ら至て派出やかに見ゆるなり日耳曼旅行中も屢々下女の是の仕度をなせるを見たり日耳曼に近來佛國の流行風次第々に浸潤こむ由なれば是等も其一つなるべし唯だ伯林にて目立ちて見苦しく覺へたるの露頭の婦人の折々町中を往來し居る一事なり一寸眺めたる所下女ども見へぬバ亦た身分高き婦人ども見へき只其邊の中等以下の家の細君が近處歩行したる者どの見ゆれど何分にも倫敦杯にての見受けんと欲するも見受ると出來ざる不行儀なる事共なり倫敦杯にての下女に至るまでも必ず帽子を冠らざれば決して戸外にの出行かき殊に日曜日に女主人よ連れられて寺院に參詣する時杯の衣服も晴着に改ため帽子も平日のレース巻付の分にのあらせして通例のボンチットを冠る等大に觀を更たむる事に候之を繰るに通例下女の仕度の家内立働の時が更紗襟の衣服に例

の前垂なり是の上は冠ふれの彼の白のレース帽子なり此外黒色の衣服一ト製是の臺處にて被居る時めあれど大抵の外出の分なり唯だ下女にて仕度の仰山なるの伊太利及及々なからん伊太利にての身元ある家の夫婦が其幼孩兒を連れて外出するときに其兒も別段異常の華美をも装ひしむると能いざるが故其代りに是兒を抱きたる守女を飾り立て綾織の絹衣裳に胸のあたりには何か金線杯を閃めかしたる杯花々しき出立をなさしめたるが多く候隨分一種の風俗と存候

○問 彼岸の團子亥猪萩餅杯と申す様の事西洋にも之れあり候や

○答 之れあり候十二月廿五日の教祖耶穌の誕生日にてクリストマスと稱し一年中の大祝ひ日なり是日に例としてクリストマスの盛物フッディンクと申すを家々にて拵らゆる事に候是の盛物の製法中々に喧しく先づ試に其大畧を申さば第一に乾葡萄一磅半を切り碎き之を覆盆子半磅を加へ又た凝脂一磅麵包を碎きたる粉一磅橙及ひレモンの皮一磅麵粉一磅其他



玉子砂糖、ブランデー等を調合し之を善く混せて長らくの間煮つめるなり  
 之を混せるに又た縁義のある事まで手づから之れを混せたるもの一  
 不知西年中仕合宜ろしとて家内中が皆な寄りて集かりて銘々一度宛の之を掻き  
 餅生果 廻のそ事も候余等も下女の勤めに遭て一度宛の之をクルく掻き廻の  
 否 したる仲間なり扱て之を煮つめたる上にて平なる皿の上に圓く頂尖がり  
 たる富士の山形に盛り立て其周邊にブランデーを注ぎかけ之れに火を點  
 けて卓子の中央に持来る是時卓子を圍みて坐わり居る者共の皆なホラー  
 くと叫びて之を喝采するなりブランデーのバチくと燃へる音皆なの  
 喝采の聲相交りて聞こゆる其響きの裏に於て卓子上席せる主人の一々  
 之を分かち盛りて同席の人々に頼かつ主人の直ぐの隣に坐わり居るもの  
 杯の尙だ青き炎のチヨロくと立ち昇り居るを匙にてすくひ食べるなり  
 左れども酒精火なれば火傷杯するとの決して之なし是の盛物は本名アラ  
 ムプディングなれどもクリストマスに附物として拵らゆる故にクリスト

不  
一  
見  
其  
社  
説

マスプディングと通稱し候是の英國が別して得意と見へ子供杯の是の盛物  
 と樂み持設けるを恰も日本の正月餅と同様なり風味の一寸備中矢掛の袖  
 餅子に似たる所あり英人の例の大食と申し又た殊に是の盛物を嗜む方な  
 れバ昨年のクロストマス杯には倫敦にて或る大家の娘が之を食べ過ぎた  
 るがために頓死せる話あり氣樂なる某新聞の此話を切論して一日の社説  
 を填めたる事之れあり候

○問 正月をも盛に祝ひ候や

○答 英國にての正月の至て淋しく候右のクリストマスが日本の正月と  
 申そ程の賑やかさにて是の祝日に座敷臺所等所々の壁又の天井よ青葉  
 を吊し懸くると猶ほ日本のメ飾りと云ふが如し平日の各自渡世の業に忙  
 のしくして親子兄弟皆な離れぐに住まへる者も是日にの一家に打寄り  
 て共々に一ツ卓子に坐りて夕飯を喫べ或のピアノを弄そび或の歌ふ等甚  
 だ打解て陸み遊ぶ事なり又親しき問柄にのクリストマスの贈物として種々

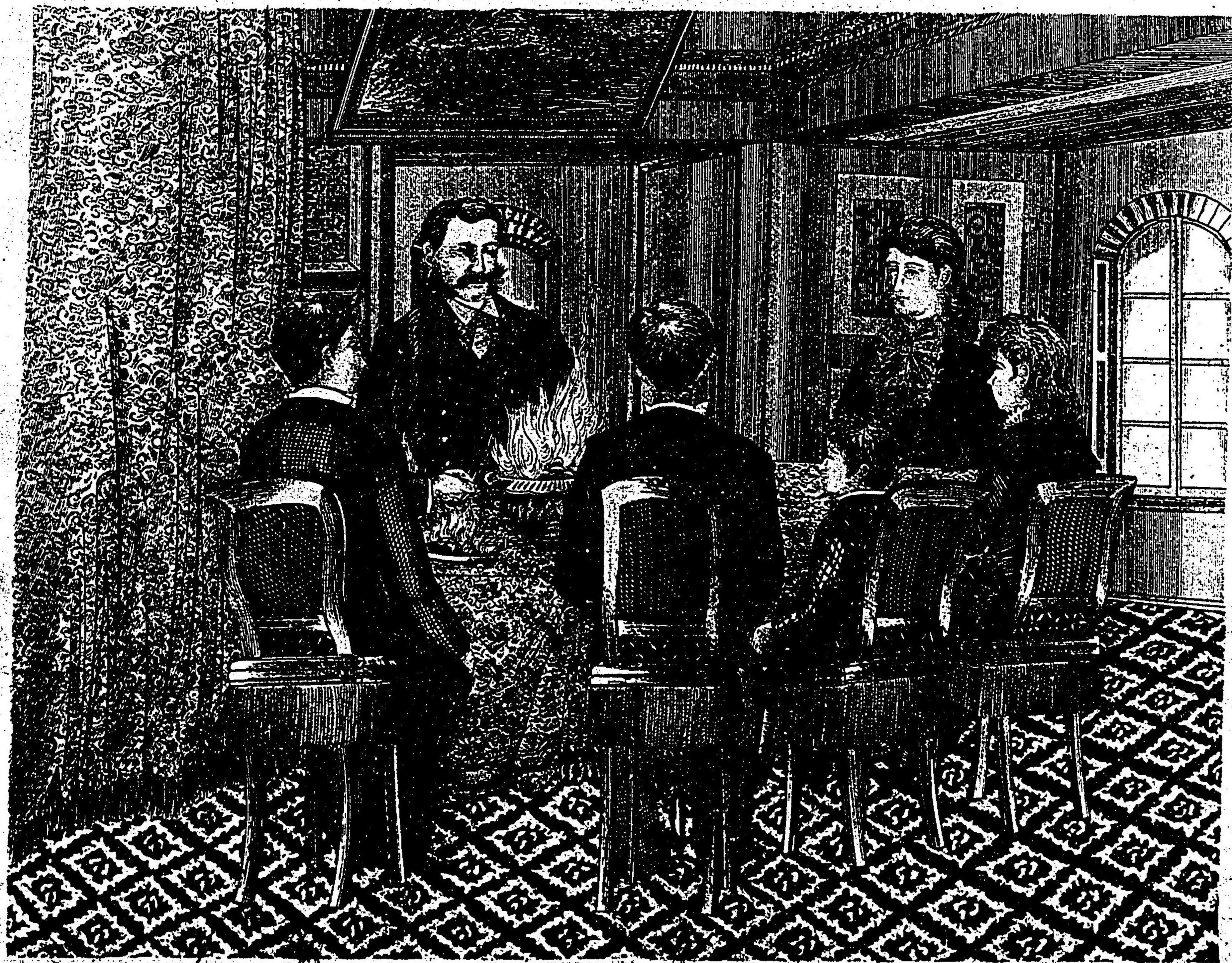


耶蘇教  
之隆盛  
足想像

の品を遣り取りすると日本の歳暮歳玉も等しクリスマスより正月に  
 けての引續きたる休日にて皆な平日に異なりたる日と致しあり殊に一月  
 一日は別に「新年の日」と稱して取りわけ大切に致すことなれども前のク  
 リストマスの方主となりて一日の左して賑はふ程のことなきが通例なり  
 クリストマスの日及び新年の日に知人の間同士にてカルタを贈答する  
 禮あり是のカルタに種々綺麗ある繪を書がき又た金字銀字等にて色々  
 の詩歌又の經文中の語又の名言杯を記しありて是のクリスマスの前よ  
 り各小間物店にて賣捌き居れり之に「樂しきクリスマスを祝申候」とか  
 「愛たき新年を賀申候」とか書するが通例なるが或は是れも繪と共に板にて  
 摺りあるもあり其中に「樂しきクリスマスを祝し併せて愛たき新年を  
 賀申候」とて双方を一所にしてクリスマスの日に贈答するも少なからず  
 是等も新年の餘り珍重されぬ一證と申すべく候

○問 クリストマスの前後に何か別段の芝居を致す由承候如何に候や





品之卓食スマトスリク



○答 其のパントマイムの事と存せられ候パントマイムの本と仕方身振の謂にて元來の無言の筈の義の語なり左れどもシリスタマスの頃より倫敦にて常例として多く相催はすパントマイム(仕方芝居)の語義にハ違がふて皆な喋り立つる事に候是ハ唯た年若き娘又ハ子供の喜び觀るものよて唯た扮装を華美にし滑稽を旨とし目先きを悦ばすのみの芝居なり左れハ外國も毎年々々大抵定まり居てハ化物語(フニリーテール)亞刺比夜話(アラビヤナイト)等子供の常に斷そふ桃太郎(ウメノタラシ)山(ヤマ)の如き類の中より又た尤も普通なる話を選びて之を演ずるあり左れの筋ハ最早人の飽きる程承知せる事なれば別に其邊にセリフを細やかにするにも及ハぬ只たハ華美に賑やかよして面白かしく致すのみの事に候例とヘバ亞刺比夜話の中の「不思議ランプ」の話を演せば彼のランプに属せる魔王(マギック)の神通力(トウキョウリキ)を以て古來よりの美人を見せると申すに托して歴史上に有名ある美人を集め女役者一人宛を其美人に打扮せ其時代ハ流行に従ひたる種々の飾



り方造り方の馬又の車又の乗物等も乗せ又之に其時代の風俗に従がひ色々の仕度の侍女衛士等を附け一組宛次第に舞臺に練り出し皆な揃ふたる處にて又た百有餘の踊り子出で、大舞踏始まる等金銀錦繡祭爛て目を奪ふ計り花々しき處が是の芝居の精采に候

○問 西洋人の相貌骨格は如何に候や各國に就て夫々特有の個條も之れあるへく存候如何

○答 先づ英國より申さば私共が倫敦に到着の第一に快からせ感じたるの自分等の身材の矮くさ事に候

東洋人  
種身小  
之矮小  
實遺憾  
之極當  
時論者  
噴々計  
之改長  
果何其  
能見其  
成功

町中にて行き違ふ人も皆な己れより二三寸乃至四五寸高きにあらざるのなく向ふより小きなる子供上がり若者が來居れは是こそ我より低るべしとすれ違ひさまに肩を較べ見れは矢張先方の乳までしかなし見わたしたる處先方の人々の物体に打揃ふて丈け高きか故一寸眺めたるのみにては左して高き様にも思はず自分と較べ視るに及びて始

て其異常に(余等より云へば)長大なることを悟るなり余等の日本にて割合それの寧ろ高き部分に属する方なれども倫敦杯にての中人よりも平均二寸許低く覺候又其次は如何にも残念なるの先方の人々の血色の實に際立て壯健に氣に亦た綺麗なるとなり飽まで白き底に紅味を持ちて一種の桃色をなせるを通例とし其紅味の勝ちたる方は而より首筋にかけ恰も緒を塗れるか如く襟元よりの湯氣にても立ちのせせやと疑はる、計り丈夫相に見ゆるあれば又た白勝ちの方の眞に玉子の蛋白の如くに玲瓏れり余等平日打寄りては學問技藝の及ばざる事の勉強して之を學んで到底追付かれぬと云ふ道理のなし唯だ勉強にも能ぬのぬの身材等の事なりせめての身材だけにては彼等の上にあり度ものならせや相互に對坐して話をなすに彼等の常に俯し語り已等の常に仰ぎ聴くの休勢をなさねばならぬの残念ある次第のものなり或る西洋歸りの人に御旅行中何が一番御愉快に候好話柄ひしやと尋ねたるに私より身材の低きものに出逢ふたる時が一番嬉しく



候と答へたる由の話を開き居しが成程尤もなる事に覺へらると且つ笑ひ且つ嘆じたる事屢々に候

東洋人  
瞳孔純  
黒亦爲  
彼所賤  
手

英人の顔立ちの豐潤にしてノンペリと濃厚しき方なり髪の色は黄又のユゲ茶が通例なり眸子の色は碧を貴びて黒をば賤むと申す傾きなり或る統計家の説に英國にては碧眼の方次第に割合増加し黒眼の方次第に割合減少するの實迹あり是れ男女とも碧眼の者を愛して黒眼の者を蹴んぞるより其愛せられ悦ばるゝ者の常に増加すると云ふ進化の大法に因て斯の差異を生ずるもの也と云へり同し英國中にては蘇蘭の人の身材一層長大く又た髪の色も赤チヤケテ殆ど棕櫚の毛の如きをなせる者少からむ又た瓦爾斯の稍や白勝ちの血色のもの多き方なり之を要するに英人の特有の點の身材スラリと高く双の肩の有るか無きか迄に撫でたるしになり居るの處にあり候

一葦帶水を隔てたる中なれども佛國に參れば相貌骨格共に又た宛然別物

西許先  
生亦修  
相人學  
手阿々

に相成候佛國にては平均したる處身材左して高かたむ日本を少し長大にしたる位の者あり或は扱んで、高さも之れあり候へ共其工合スラリと高きには異なり何れかと申さのボンズヲ短き格の躰の長さ者と申す方なり顔立ちの英人よりも少しキツと引べまりたる處ありて云ひ、氣の利きある方なり英人の顔立ちの其末流れてイカツキシカめる險惡の相に赴くの愛あり先づ佛人の顔立ちの其末流れてイカツキシカめる險惡の相に赴くの愛あり先づ是の二國人杯の善く其國柄人柄を其顔に顯したる者と云ふへし一方の鈍く濃厚なしくして其内に鷹揚なる處あり又一方の鋭く賢くして一寸氣の利たる工合杯其顔の即ち恰好其國柄人柄の寫眞なり佛國にハ髪の色稍や黒き者随分あり又伊太利にハ更に黒色の髪多き様に見受たり伊太利の人の身材杯の先づ佛國と似たり寄たりなり顔立ちの佛國よりも少し濃厚なしき方と覺ゆ日耳曼の通り掛りに見わたせる所にては顔立身材共に參差不同にて茲ぞ日耳曼人の特有の點なりと申す處ハ一寸捉らへ難かりし但



た肩の何れも角立ちて張出たり左れども南部の方の大抵人の身材揃ひ居りて英佛の間に立つ位のもので覺しく北部の方の高きを看上くる計り抵さの看下を様なるもの打混じ居るの差異ある様なり之を要するに日耳曼人の物体に相親武骨にて英佛の如くに品よき處稍や乏しき方なるかに疑候

婦人の平均したる所にての英國が一番不同なく揃ひ居る様なり佛國の婦人の物体に甚た愛嬌よしとの公論なれども其顔立の上より云へば甚た不同多くして英國の如くに揃て器量よからむ躰の態度杯に至りての概して適かに英國に譲る様なり尤も二國絶頂の美人同士を比らへなれば佛國の方婀娜の致を以て勝さるとの評もあれど其の既に人々の嗜癖に涉れば別論なり又伊太利に婦人に大理石様の白き(マーブルホワイト)とて一種特有の色あり英國杯の如くに底に紅味を帯びざる純粹の白色なり其末の寧ろ稍や青味を帯びる向に流る、方なり日耳曼の婦人も種々にて一定の事を

品し難し然れども通例の稍や鄙びて見ゆる様にも思候  
人種の異なりたる程争ひぬものなく候歐洲にて企も一番上手に溜めれば世にも一番擯斥さる、彼猶太人の若きは一見して其特有の處相分り候其特有の處の他にあらす鼻なり猶太人の物体に鼻甚た太とく又大抵の「乙」の字形の鈎鼻なり左れば西洋にて草艸紙の敵役と同様の鼻にて且つ甚た太とさものを見れり皆なこれを猶太人と思ふても宜敷程なり是の尤も明白なる個處と見へ猶太人の祖なるモセスを畫きたる繪を看れりモセスをバ毎つも是非太とさ鈎鼻に畫きあるが通例の定りに候  
○問 日曜日休業日の事なれり町の有様も常に異なりたる所之れあるへく存候如何

○答 倫敦にて旅人のために日曜日程シヨサイのなき日なきなり又た西洋諸國にて倫敦程日曜日を嚴重に致せ處のなきなり倫敦にて日曜日に有りとし有らゆる品物仕事一切死に果てる事に候先づ雨日風日の



別なく人事に最も大切なる人の往來なり其往來に最も必要なる市中の瀟車あり其瀟車も日曜日には午前の通行を相休み午後に至りて徐々之を開くなり通行を開きたる上にて平日よりの發着の數度を少くし候又た何時を限りとなく人事に飲難きの吉凶存問其他贈答の通信なり其通信に第一肝腎あるの電報郵便なり其電報郵便も重立ちたる或る個處を除外したる外日曜日に各々局を切りて取扱を相休み郵便局の投書函丈の開きあれども之に手紙を投し置きたればとて其日の配達をあさるるが故唯た其明朝一番の配達に間に合ふを樂むのみの事に候瀟車電報郵便杯一瞬一刻を争ふ緊要のものすら斯る次第なれば以て其有様を推量すへし町の家と申す家店と申す店悉皆戸を卸し錠を止め表の唯た錠前と木戸の外何も見る所なし昔し福衡が座人を罵りて皆な行く屍走しる肉也と申したるの一時の狂語ながら倫敦の日曜日の町の都べて生息のなき空房計りなりとも形容致そへき歟是の日の有らゆる賣物一切休みと

足証耶  
蘇教之  
隆盛

相成候が故世帯持の婦人組の皆な其前夕即ち土曜日の晩に臺處物万端の仕入に出づる習にて少し賣物店の多き通り筋の土曜日の晩の賑やかさの平日に倍して雑沓するなり麵包屋肉屋八百屋荒物屋小間物屋等日用品物と鬻ぎ候店々に平日の大抵午後九時限りに店を仕舞ふが常なるに土曜日の晩の十一二時の頃までも瓦斯電氣ランプ等の燈火を眼花までに燃やし立て景氣よく取引をなし其前をの夫々相應に身なりを取繕らふたる婦人又の之に随伴へる娘子供亭主或の只た是の景氣につれて散歩さする若者共思ひく隊を成し伍をなし三々五々打連れ立ちて引きも切らま往來する杯一寸田舎の夜祭東京の縁日と云へる様の氣味あり左るに是れより僅か五六時間を隔て、翌朝と相成かれの町の蕭然として往來さへ少くなく時々戸外に開こゆるの行歌して錢を乞ふ貧丐手練にて鳴る樂器を鳴らして物貰らひする盲人なり左れの日曜日に博物館繪畫館植物苑動物苑等平日見物遊覽に供ゆる場所くも皆な閉ちて人を納れそ滞留の旅

熱鬧之  
街一夕  
忽變而  
為寂寥  
之鄉奇  
哉



人の往くへき所も観るへき所もなくして徒らに無聊を嘆するのみ余等の  
發足の少し前に上院にて博物館繪畫館等は日曜日にては相開く様致さん  
との議可決せるを聞き未だ實施にの至らざりしかども日本人仲間皆な  
打喜ひたる程の事なりしなり是にて其他を推量すべく候

○問 新聞紙も無論休刊致すべく候如何

○答 シリストマスの日にも一月一日にも其他如何なる祝日祭日にも一

つも休刊なき新聞紙なれ共日曜日には昔な休刊致候

○問 彼地の人の如何にして日曜日を暮らし候や

○答 家に黙坐致そ歎朋輩を尋ぬる歎其他の寺院に參詣致す歎の事に候  
へ共日曜日に一番繁昌致すの公園なり平日の朝起さると火點す頃まで市  
區(シティー)にある商館商店に通ひ務めするに間なき手代伴頭杯は是日の一  
週中の骨休めに各々衣紋を飾るふて例の絹帽子を舞やかし細き箆子を扱  
さみシャツくと公園を往きつ來りつ歩るさ居れの下女守女杯の又た主家

實家之  
子弟亦  
加斯

の子供に附添ふて衣服の垢の引立つにも構はず洗ひたての眞白き附襟を  
押し立て、アチラコチラと逍遙し實家の娘と見へて母の靴を借り來りし  
と覺しき足にも適はぬ大靴を引掛けて飛び廻り戯れ居るあれの同しく兄  
弟にや朋輩にや十三四の子供が古びたれども只た破れ裂けぬを珍重し父  
のマントルを袖長裾長に着下しブクくし乍ら走り行く杯其他日履稼の  
職人仕事師又の婦人皆な最寄りの公園に出で、遊ぶ事に候尤も是の重  
もに中等以下の社會の者共が多く候

○問 日曜日に終日一軒め店を開く處ある候や

○答 只た一軒あるの煙草屋なり是の平日通り商ひ居候又た居酒屋は午  
後に至りて皆な相開き候料理屋の店々によりて早晩の差のあれども午後  
より夕方の間には皆な相開き候是の寺院に參詣する人々は晝飯に煖かな  
る食事をなして隨の火を消し參詣に出行くが大抵の習なる故參詣の歸り  
に是から内で冷飯を食べるも旨くなしとの心持より料理屋に寄りて夕飯



致す者も稀れならざれば之れを當込都合もありての事に候

○問 他國にて日曜日の有様は如何に候や

○答 巴里にてハ重立ちたる大家大店の倫敦同様に商ひを相休めども其外の中等以下の店に至りてハ營業致し居るもの甚た多し又た日耳曼にてハ私共の見たる所にてハ朝の間は店を開き午後より相休様相見へ候左り乍ら何れも倫敦町中一休思ひ揃ふて嚴重に休業せる處のなき様覺へ候伯林にて英人と同寓せる人の話に日曜日にハ休業日の事なれハ皆々打辭りて骨牌遊びをなせども英人のみの決して之に交じらす此方より骨牌を弄そばせやと云へば必ず今日ハ否と答ふ何故と問へハ又必き日曜日なりと返事する由物語りて笑居れり如何にも英人は自國にて日曜日の骨牌遊びをなさへなさぬが習なれば例の自から留んと自から敬する性質よりの外國に至りても猶ほ獨り其習を守りて之を易へぬと思ひれたり米國に渡りし時紐育にて日曜日に邂逅しが店の矢張大抵悉皆閉ぢ居たる様見受けし

が倫敦の如くに木戸を卸し切らせ賣物の矢張飾り付並べ立てたる儘に置きてガラス障子より見へ透く様をし居たるが多かりし故に同しく一休に休業せる乍らに店の有様丈の平日に異ならせ従て町も倫敦程俄かに淋しくなりて見ゆると申す事なかりし様覺へ候尤も人の往來の均しく平日より減して相見候

○問 西洋諸國にてハ碧眼を貴ぶとのを承りしか果して立派に見ゆる者に候や

容貌雖醜慕而見其人必美是猶怪則不寒而慄也  
○答 如何にも日本にて碧眼の西洋人を見れハ左程立派とも思われぬ様に見ゆれども彼地にて見る時の其方に團扇を揚る心地致すに候東洋人は面色少し黒みたるが故に毛髪も黒く眼晴も黒く茶色なる方自から世間の好みに適するとなるべきが洋人の白く赤らげたる面色なるが故に之に貴金色の茶の毛を添へ輕淡なる相貌に一双の碧眼を點せる時の實に稱すべき色の取合せとなるにて最初余輩の目にハ左程よも思ひざりしが少



しく土地馴る、に従ひ成程斯る顔色と斯る毛髪の色との間に、斯る色の  
 眼睛こそ色の取合せ佳きものと氣付き候程の時に候右、専ら英國を申す  
 とにて歐洲全軀の上より申せば随分國々にて少々の好みにも異同あるべ  
 く又同し洋人の内にては人々に因て好む所の同しからざるものなり例せし  
 婦人の相を記載するにも青黒の毛髪大理石様の白の顔色、漆の如き眼睛、  
 た痛く賞讃せるものもあり又薔薇の如き淡白輕紅の顔色に黃碧の二色を  
 合したる眼睛を取合ひするを賞讃する者もあり然れ、人々に因て其好み  
 も一樣の勿論行かぬながら先づ英國杯にては碧眼にして淡紅薔薇の顔  
 色を賞すると普通之に之あり候先づ大軀の處より云へ、小説及び芝居杯に  
 ては黒色の毛髪漆眼の婦人の通例其性活潑にして其弊の猛惡なる者の様  
 人に人相を描く多し又柔和にして情け深き婦人の相を描くに、多く濃茶色  
 の毛髪と灰碧の眼睛とを用ふると通例なり又芝居にて男子の惡人は動も  
 すれば黒髪の者多く輕茶色の者少し是等の東洋人なる余等の常に甚た不

好引証  
不堪抱腹

平に思ひて打笑ひたるの一事なりき又輕茶色の人種の世界にては黒髪の  
 者出る時の何か性質活潑猛烈なるが如き様に見ゆるは是も亦一奇と云ふ  
 べし晋しの諺にも一ツ眼の人種のみ棲める島ありとて其人種を捕へ來り  
 見世物にあさんとて日本人が其嶋に出掛けしに一ツ眼の人種等は大に怪  
 みて世に二眼の人もある者かな我等見世物にして呉れんと之を捕へて  
 興行したりと云へり如何にも顔色毛髪眼睛の様々の色の中にて孰れが好  
 しとか悪しとか云ふも多數と少數との相違もあるべし東洋人の中に一二  
 の西洋人を交ゆれば甚だ異様見へ又西洋人の中に一二の東洋人を交ゆれば  
 變態に見ゆるも同様のとなるべきか是れ等の東西の異同、左して是非  
 する所なけれども唯た男女に限らば日本人の身材が常に西洋人に劣るの  
 如何にも残念なることに候

軀幹之  
短小幾  
嘆息

○問 西洋の婦人の毛髪巻き縮れ居る者多き様に見ゆ右の自然のものに  
 や



○啓 英國を以て申さの婦人の毛髪を決して天然に甚たしく巻き縮れ居る者多しとの見へさるなり尤も東洋人に比すれば彼地の人の毛髪は細く縞やかにして多く生へ東洋人の毛髪は同し面積に數少うして太き毛髪生るるか故に彼地の人の毛髪は長くなるに従て少しく浪の如く糾れ縮れる傾きの之あるとなり右の大体を申すものにて間に甚たしく巻き縮れたるものもあり西洋人の目には程かに大形に巻き縮れたるの一種の飾りとして之を賞美するとなり其證の希臘羅馬の古蹟に傳れるものより今日に至るまでの彫刻の諸像を見るべし男女共に大佛の如くナリくと小さく渦まきて巻き縮みたるを好むにあらで皆な大形に巻き縮れたるを好むとなり英國の女子も通例年若き人の日本の束髪そくぼうの形の如く其前髪を切り下る者なるが額際を飾らんとて是の切り下げたる前髪を大形に巻き縮らしめてフサくと垂らし置くなり左れど天然の儘にては通例斯く巻き縮れ居る者なきが故に態々ど之を巻き縮ましむるに尽力するとなり之を爲

そに二様の仕方あり其一の鐵の著の鉄の如き張り居る物を火にて炙り此温鐵を以て好む程に毛髪をクルくと巻き縮め暫くする後の毛の其儘に縮め居るとなり是の最も簡易なる法にて髪屋の店頭にて必ず必らず此道具を賣り居るを以て其用ひの廣さを知るべし去り乍ら温鐵を用ふれば毛を傷むるとして他の一種の仕方を用ふるとなり亦以て東西共に婦人の其毛髪を大切に知るを知るに足るべし他の仕方と同一種の紙を用ふるにて此紙に毛を添へもちて一と撮つ、糾をかけ數時間縛り置くとなり然る後之を解き紙を捨去れり髪は其儘縮れ居るとなり中等以上の婦人の多く之を用ふる由に候

左りながら右兩様共に一度巻き縮むればとて五日も十日も永く保つべきに非らむ大抵の隔日或は二三日其髪の質の剛柔次第にて各々適宜に之をなすことなり左れば天然の儘にて格好能く縮み居るもの、先づ少き方と云て可なるに候



○問 公園の有様は如何に候や倫敦にの公園の敷甚た多き由に承候が如何

○答 御尋の如く倫敦に到着の始めにの至る所として公園を見ざるのなき様覺へ甚た珍らしく感ぜる事に候彼の名高き「ハイドパーク」を首めとし「グリーンパーク」「シントゼームスパーク」「リセントパーク」「フェスベリパーク」等「某パーク」「某パーク」と申を者甚た多し「パーク」の即ち公園の謂なり其他「某ソルカス」「某キャヴェンディッシュ」等廣小路隙地杯の名を以て一二丁乃至四五丁四方を囲ひ其中に樹木を藝へ腰掛を排べ一寸人の休息所となる様なしある者亦た極めて夥しく候「ハイドパーク」「南ケンシントン苑」と相續き唯た間に一つの湖水あるのみにして別に仕切もなき事なれば名の二つになり居れども實の一も同様なり故に是は周囲幾里と申す程廣く候廣さにて其次に位する「リセントパーク」にても外邊を一通りせば凡そ二里許之れあり日本より参りたる目にの如何にしての故郷自

比較物  
大他物  
必見小  
是自然  
之理

慢の心持勝ちて容易に彼地の山川の優處の見へぬがちなるの自分乍ら可笑しき程の事多し現に先般歸朝の時までのテムス河にせよライン河にせよ處によりて廣狭のあれど概したる所我が隅田川淀川位の者なりと固く信じ我れも思へば人にも語り居しが歸朝の上始て兩國橋を渡りし時に實に其狭さに案外しモソトの廣さ等なりしが自から感ふたる計りなりし是の二つにの彼地の家屋橋梁杯の都べて大形なるが故物同士の比較より廣き河も割合に狭く見ゆる事なるべきが又た一つにの心底に日本貴しと思込居るが其原因あるべし左れば余が始て「ハイドパーク」に往きし時生憎霧深き日に十分眼光の達かぬとも達かぬなりしが是の日比谷の練兵場を二つ合せたる位もあらんと云て同伴せる日本人に絶倒されたるをあり尤も斯る類の負けぬ氣の何國の人にも有り内と見へ倫敦の寓處にて一日夕飯の時主婦が此間巴里より歸りしと云ふ英人に向ひ「如何です巴里の賑綺麗にもあり廣くもあるでせう」と話しかけたるに彼の英人は澄まし



たる顔色にて「左様、丁度、リゼントパーク位あるでせう」と挨拶したるに、  
 の同じ卓子に坐わり居たる余等の殆ど噴飯さんとしたりし是れ英人が常  
 に倫敦の大なるを託こり巴里の華美なれども小なりと申し居る平生の  
 口癖に過ぎざれ共亦た以て「リゼントパーク」の廣さを併せ知る可く候  
 倫敦にて市区内と稱する中央の町筋にての往來せる人の皆な跡を斜めに  
 し頭の足より二三寸先きに行き居るが如き姿にて早く云の趨りに走り  
 居ると申すも可ならん其中にの茫然とイみて店の品物を眺め居る者又の  
 左も要事無氣にブラクと致し居る者等も無論少からぬ事なるが兎に角  
 に車輪の響蹄の音人足の蹇然たると相混じて絶ゆる間もなく喧しき中な  
 れの實の要事もなくして是の間を彷彿ての居られぬなり故に身に定れる  
 仕事なき人、仕事の閑を得たる人、又の子供、子供の守る者等の爲に何  
 か往來の繁からぬ少し油断すれの直ちに人に衝當る杯の心配なき逍遙處  
 休息所の必ず欲しき者なり右の「パーク」「ソルカス」「キャザンデシニ」等

恨我國  
 未多有  
 公園之  
 設

このために出來たる者なり又た常に塵埃のために撲たる、眼の時々緑  
 色のものを見て其疲を展ぶる所なれば叶のぬが理窟にもあり人情にも  
 あれば折々公園なり隙地なりに往きて陣を放ち樹木の鬱蒼たるを眺むる  
 事の眼の方より云ふも自然必要なり左れの公園類の設けの町筋の極て疎  
 々しく緑色のもの連の幾と希れなる倫敦の如き處にて益々其必要あるも  
 のなり日本にありての上野に往くも増上寺に往くも幾分か快く感ぜる事  
 の感ぜる乍ら左程打て變りて快よしと迄の思のす之を倫敦にて偶々公  
 園に這入りたる時の心持に比すれの甚たしき相違あるを覺ふなり公園に  
 は貴賤男女打混して這入るか故彼の邊にの輕車肥馬に駕して坦路を驅り  
 居る者あれば此の邊にの手空きの日雇男が樹下に臥して晝寝せるもあり  
 或の小船に乗りて手づから櫂を敲乍ら湖水に泛べる年若き男女あれは或  
 の球を投げ合て叢を走しる子供あり其趣色々様々なり例のシーズン(期節)  
 と稱し夫々の身分に應じ各種の交際交游の會を催して相往來し歡娛む一



年中一番陽氣の期節なる春夏の頃に「ハイムパーク」の馬車道の午後四時比より身分身元の高き婦人の馬車にて打續くなり各自思ひくに着飾りて皆な茲に來り園内を馳騁りて遊ぶとなり尤も園内への抱への馬車の外辻馬車の入ることを許さすとの制なれば苟めにも公園の内を驅り居る者なれば男女を問ひを相應の身分あることを知るべし故に倫敦の社會にありての先づ公園の内を馬車にて乘廻はす以上に達らねば餘り面白からぬものと存せられ候

○問 伊太利にて闘獸場及び古共和政治の時の宮殿の遺物等の外に尙は古蹟の面白きもの之れあるや

○答 先づ重なるの嘗て述たる如きものながら尙は其他にも之れあり今其一二を記さんに最も奇異なるは地底の住居是れなり是は羅馬帝政の時耶穌教が嚴禁を蒙りしに當り其信徒が酷刑を逃れて茲に隠れ栖みたる跡なりとも云ひ又耶穌教徒が唯た自宗の儀式を以て死者を葬むるが爲めに

羅馬實  
古來之  
都府遺  
蹟之奇  
異固不  
足深驚

茲に來りて其の葬式を執行し居りし迹なりとも云へり孰れが信なるやの知ざれども兎に角奇異なる古蹟なり右の今の羅馬府を離れて二十町計りの近郊に在り先づ地面より打見たる處にての勿論何事もなく唯だ小さな入口あるのみにて此れより穴道を地中に這入り往く時の石炭坑の如く無數の部屋ありて其部屋くの相連りたる廣さの十町乃至十五町四方もあるへしとの事なり穴の入口にの案内者ありて見物人の之れと共に各々手に日本にて紙燭と稱ふる如き細く長さ一種の蠟燭に火を點じ之を携て案内者と俱に地底に降るなり地底の道の幅は三尺乃至一尺許りの所多く僅く人の往來の出來る迄にて又其部屋くの高さも僅かに六七尺に過ぎまると覺へたり而して其部屋くの唯た土を切抜きたる迄にて實に日本の穴居の如き有様なり又處々に柵の如きものあり是れ則ち死骸を葬むりたる所の由なり又アチヲコチヲに不器用なる畫風にて魚の形を畫きあり如何なる譯のものにや案内者の詞にの古代に在りての耶穌教徒の魚を以



て其符牒と爲せし者なりとの事なりしが果して然るや否やを知らず扱て我々の一階より二階に梯子の如く刻みたる所を降り又は上に登り頻りに其邊を彷徨たりしが何分暗黒なる穴の中にて空氣の通ひも十分ならぬ甚はだ不快なる心地せり

嚮導者  
猶且然  
況於旅  
客手

右の彼の古へに有りしと云ふ迷室も同様にて若し此の地中に案内者を失ひたる時の十五町四方の廣さの三階に成り居る地底に迷ひ迷ふて出るの道を失ひ餓死するの外なかるべしと云ふ既に先年一人の旅客が道を失して此中に入りし儘出で來らざりしと云へり又案内を商賣となし居る其の肝臂の案内者さへも未だ十分に其路を窮め居らざる由にて通例旅客を案内するに唯た一通りの定まれる場所を觀せで然る後地の上に現れ出ることなり

嘗て佛人が百五十年前に著しし小説を讀みしに其中に西班牙の南部の事を記し耶蘇教徒が回教徒に罰せらるゝを恐れて人知れず穴居したる

旨を述べたりしが其折の唯た小説のソラ事とのみ思ひ居たりしに今ま此

羅馬の古蹟を見るに及びて始て其全く架空の言ならざるを覺えたり

又右の穴居の近處に耶蘇教の未だ流布せざる以前の古代の墓處あり此の

時代にの皆み火葬を行ひたる趣にて四五寸許りなる小さな壺に遺骨を

納め之を夥しく一室に積み累ねあり其の摸樣を記さし先づ一棟の家あり

て其四方の壁に段々の柵を設けて(尤も煉瓦の柵なり)其柵の壁に彼の壺

を一個宛納むる様になせし蒲鋒形の窪み無數にあり

○問 乗物の重みに瀛車馬車の二種なる趣の承知致居候日本にて一寸人

力車も出掛ると申す場合に如何なる振合に致候や

○答 御承知の如く倫敦にての市中の瀛車の仕組善く行届き大抵の處の

是にて便宜相足るなり先づ地上を走る尋常の仕組の鐵道と又た其及ばざ

る所を補なふための地下鐵道との二ツあり是等の鐵道の圓より市中の往

來のために出來居るものなれば概ね毎十丁内外の處にステーションあり

全世界  
第一之  
都府固  
可如此



て上り下り自在なり尤も是の市中鐵道の始て出来掛けたるの今より幾かに四十年許前の事にて夫より次第に支分れ長延び遂に目下の如くに盛なるものとなりし者の由殊に地下鐵道の方へ別して新らしく其預圖の計畫丈の線路を布き了りたるの只た昨春頃の話なり市中鐵道の始て出来掛りし時の乗客も尙だ不馴れの事なれり善く間違失錯多かりし趣にて余等の知れる或る老婦人の物語に是の老婦人が花嫁の頃が恰も市中鐵道の出来初めなりしが或る時夕飯會を催さんとして前以て友達に案内狀杯出し置き扱て其日の午後に至り一寸膳後の菓物を整へ來らんとて新夫婦打つれて菓物市まで出掛けたり往復其瀛車の事なれば手間取らじとの積にて左して時の餘裕も見計らはず立いでしが如何にしけん返りよ線路を乗りちかへ途方もなき向に走せ去りたり必付て其邊のステーションに下り又た後戻りして更に乗替る杯家に歸りし時の既二時間もかくれ座敷に這入りければ客人の皆々顔を並べて只た欠びせぬ計の色なしりと今日は仕組車西

我國勞力價尤廉也是以有人車  
固其價也貴矣是所以有瀛車馬車乎

萬端十分整頓して便宜此上なく且つ車室も上中下の別ありて左して身分賤しき者共と同坐せねばあらぬ氣遣もなければ大抵の人迄の多く之に乗るなり尤も「銀行休みの日」杯と申す祝ひ日に下等社會の者共が公園等に遊びよ往きたる復りがけに落ちつとどふ時杯の多勢の群衆の事なれば下等中等共に彌が上に押詰まり其溢れたる者共が發車のマギツに突然ドカ〜と上等室へ推込來ることあり鐵道役人の制統も届かばこそ其儘にステーション一二個處をば通り過る事も多し故に斯る類の日に少し身分を構ふものの中人にては先づ用心して乗らぬなり兎も角に上下推なべて多く乗るは市中瀛車なるべく存せられ候此より上に參れの辻馬車此より下に參れの鐵道馬車乗合馬車と存候是等の諸馬車の振合の更ためて詳細を相述申すべく候

○問 當節西洋諸國の男女の髪の流れの如何に候や

○答 中以下一般の風を申せば先づ五分刈七分刈位の所に候右の英國の



みならず日耳曼亞米利加杯も通り掛りに見たる所にては同様に相見へ候  
唯佛國にては左様に甚たしく短くあらざりし様に相見へ候洋人の其頭  
願大なるが故に斯く短く頭髪を刈るも甚だ格好よけれども後頭の小さな  
人種の東洋人が之に倣ふて短く刈る時の其頭髪に小さく見へ甚た不格好  
のこと多く候

一節 鬚髪是

又頭髪を巻き縮ましむることの獨り婦人のみならず男子にても佛國杯  
の随分を致すもの多し故に巴里杯にて大抵の髪床に至り之を注文すれ  
ば必らず丁寧に巻き縮まし呉る、ことなり物の試めしなればとて余等も  
一兩度試したることありしが如何にも善く巻き縮まりて出来るなり唯た  
茲に必要な用心の髪を洗ひざる一事なり若し巻き縮ませて歸りたる後迂  
潤と水にて洗ふこと杯ある時の直ちに故の如く具直になりて仕舞ふ若し  
之を試みんと欲する人の之を洗ひざれば兩三日間の保つなり英國の髪床  
にても相應の家ならんに之を注文すれば直ちに需めに應じて巻き縮ま

せ呉る、れども大抵は其手際甚だ悪しき様に思はれたり右の實驗の説に  
て間違之なきことと候

○問 男子の口髭の工合の如何様なるもの多く之あり候や

○答 是も英國と佛國にては少しの違ひ之あり當時佛國にて年若き人の  
中に鼻下の髭を左右に「八」の字に分け下唇の際よりばつりと「▽」形に残  
して其狀恰も「八」の字の下に點を加へたるが如くし他の願總體の髭を削  
り居る者多し右の定めて同國が本家なることなるべし英國にては此風餘  
り行われ唯だ時として之をなし居る者を見ることなり總選舉其他有名  
の人の集會演説等に至り見れば然るべき身元の人に斯の如き風を爲し  
居る者の幾んど之なきなり又中以下の輩の群聚する繁華の場所にて注意  
するも此風の人甚だ少く候英國にては年若き人の通例鼻の下を「八」字  
髭にするのみにて頬鬚の毛剃り居るを通例とす老人に至れば頬鬚の毛  
をも併せて穩なしく一躰に延し「八」字髭のみよなきこと通例なり去

我所謂  
是法英  
國少年  
者乎



り乍ら是も佛國に至れば相違ありて老人の中にも「八」字髭のみの人多く候

又佛國にての一種の髻付を用ひて髻髭を行儀よく堅め髭丸をバビんと反ね居らしむる者も鮮なから迄英國の髻床にても時としての余等の髭に髻付を付けんと欲せし者あり左れば英國にても之を用ふる者もあると見えたり唯全跡の處英國の髻の形の「八」字髭にても稍や穩なしき方と云ふべく候

又英國にての男女共に顔より刀剃を當てざることも、見へたり一但し男子の「八」字髭のある者頰鬚を剃るのの格別其の以上の部分をば少しも剃らざること、見ゆ一故に近寄て顔を眺むれば濃かなる生毛様のもので一面に生へたり男子の格別なれども女子杯にの少し不相應しからぬ様と思はる去り乍ら彼地の者の此を以て一種の飾りとなし居るやも知れず唯困却するの余等の如き東洋人の願より頰へかけ黒き毛所々に生へ頰際眉毛の間に

の見苦しき生毛の長ゆることなるが英佛孰れの髻床に赴くも之を剃り呉れたることなし又他の日本人杯も同様と見へ出會ふて其頭を眺むれば生毛の蒙茸と長へ居るが通例にて時としては話し合ひ笑ふことも度々に候斯く生毛を飾り居せと想へば甚だ異様しく聞ゆれども何とも云へぬ譯なり其仔細は兩三年前佛國よりの流行にて英國の婦人杯も髻を上に乗ねて結び上ること流行し居りしに同し髻を束ね上ることなれば襟際より額際に掛けてはつれ毛おくれ毛なき迄に搔き上げて之を束ねる方サツパリとして東洋人の目にの跡よく見ゆることなるに彼地の人の故さらに襟及び耳の邊の毛を一線通り束ね殘し顔及首筋と頭との界にの短かさばをつとしたるはつれ毛おくれ毛を澤山置て縁を取ることなり是の一切の毛を悉皆束ね上る時の坊主襟の如く髪と他の肉面との間餘り見盡さき故に斯く態々短かく毛を切りて顔及首筋と髪との界に短かくふやりとしたる毛を置き縁を取らしむることなり是等の日本杯にての決して飾りとの思ひざ



るべく却て見苦しき躰なるが彼地にては則ち飾りとなるの趣あり是も亦我風俗を以て彼の風俗を是非し難き一事なり兎にも角にも顔の上部の生毛をバ一切其儘にして少しも剃らむ毛深き人に至りては双の眉相連なりて幾ど弦なき弓幹を仰け横たへたるが如くに相成居る杯に實に不思議な候

○問 鐵道馬車乗合馬車の趣の如何に候や

○答 鐵道馬車は現に我邦に行われ居るものと其振合左して異なりたる所も之なく候佛國よては車中の腰掛一人宛に仕切ありて定りたる人員の外に腰掛る事相成らざるものもあれども英國の方の通例一人宛の仕切なき故乗客の多き時の随分蹙み合て詰込まる、事も少からず又た英國にては乗車の切符を呉る、とさ例の小さき圓き穴を斷り抜く缺に仕掛ありて一ツ斷る毎にチーンと云ふ音するなりかねて鐵道馬車會社の規則として乗客の此のチーンの音を聽きたる上ならでは其切符を受取り吳間敷と

我二階馬車不設軌道是所以其招禍今布鉄軌以設之其便更幾倍

の事なり則ち車掌が一枚の切符を再用する弊を防きたる一法と見ゆ斯くして斷り抜きたる穴の部分に當る小さき圓き切符の紙片ハポツリと抜けたる儘缺の中に殘る様仕掛あり跡にて此の紙片をさへ勘定すれば切符幾枚を賣りたりとの事の明白に相分る仕組なり是も亦た切符の賣高を偽はることを得られぬ様にしたる者なるべし乗合馬車は鐵道馬車より幾分か品格を遜づるやの氣味もあれど我邦にて二者の間に逕庭ある程にあらぬ様なり(我邦にて圓太郎馬車と稱する種類の彼地になさぬ無論は候)乗合馬車の第一に我邦に異なるは皆て天井の上にて又一層の腰掛ありて此にも客と乗する事なり明治七八年頃と覺ゆ銀座より淺草の間を往來する二階馬車あるものありしが其動もすれバ怪我失錯の多きにより出來る間もなく差止められし事ありき即ち此の二階馬車こそ西洋諸國にて多く見受る乗合馬車の典型を摸たる者なりしからめ乗合馬車の皆夫々白青黃赤茶藕等の色分けありて白の車の何處の間を往復する者青の車の何處の向に



去來する者等線路に従て色を殊にせり左れば乗客の近寄りて何處く行  
 どの標札を看るに先きだちて先づ其色を遠見して大体を識別る便宜あり  
 又其賃錢の受取方の様々にて鐵道馬車の如く何處行どの區域を誌したる  
 切符を渡すもあれど此の切符も鐵道の分の如く堅紙質のものにあらざ  
 して薄きセロ／＼したる一葉紙なり缺にて穴を斷り抜く造作もなければ  
 只だ幾千枚とかく長く續けるを巻物の様に卷きある内より一枚分宛裂き  
 取りて賃錢引替に渡す丈なり又其中に切符をば一切渡さぬ仕組の車も  
 あり此の仕組によれば客が乗込むとき何處迄どの行先を話せば車掌の其  
 區域に従ひ二錢分一人とか四錢分一人とか覺書おぼへがきの紙に記し置き其客の下  
 りる時定め賃錢を受取るなり此の仕組の賃錢の受取り渡しに證據物な  
 き故其手違を避るため乗客の必き下車の時あらで賃錢を拂呉れ間敷と  
 の會社の口上車中に掲げあり又た車によりて只だ繁華の場處若干の間  
 のみを往來せるものあり是れの一寸乗るも端から端に行くも都て賃錢の

簡便

一片なり左れば此の車に別賃錢受取方の人を置かざれば只だ車中の一方  
 に一個の錢箱を備付け箱の上に小さき寶あほうを穿けあり客の乗込みたる時之  
 に一片宛抛り込む事なり左すれば此箱の一方の御者に面せる邊のガラス  
 張りとなり居るが故御者の目にて今ま幾人乗込たり幾片抛り込たりとの  
 事相分る仕掛に候

鐵道馬車乗合馬車ともに物体の大きき我邦の分に比すれば適かに大きき  
 亦其綺麗なる事も適に綺麗に候左れば馬車に就て一番目立つ其馬の異  
 常へん魁偉なる事に候亞刺比馬アスピヒマと申す分は大ききあるの大きなる乍ら品よく  
 優形なる方に銘々乗の馬車を駕す時の飾り馬に多く之を用れども鐵  
 道馬車乗合馬車又の荷車等に使ふの又た別に一種の大馬おほひまある事に候丈の  
 高さ事の例の亞刺比馬アスピヒマに過るとも及みざることなかるべし其背の一番低  
 き處にても通例余等の腦蓋と相齊しく蹄杯ひづら宛然まろく盆おぼんを覆せたるが如し左  
 れば其力も從て強健くして我邦の馬車を倍にせる重量おもひのあるべく想はる

有此馬  
而有此  
馬車



馬亦讓  
於彼乎  
嗟不堪  
嘆息

、を只た二匹立にて牽き居れり且つ同じく牽く乍らも我邦の馬の如く動  
 むすれば踰跟しつ、首低れもて喘ぎながら行くに遠ひ馬の勇さみたるを  
 形容せる彼の「躍る」とか「怒る」とか云へる語に適し昂然としてドン／＼と  
 行く様なり概したる所日本馬の西洋にて稱する駒位の大ききしかなき様  
 見よ」と云ふことあり西洋人杯が日本に來りて始めて日本馬を見れば果て如  
 何の感を興すべき乎残念なる次第なり去乍ら是は種の選び方蓄養法一つ  
 によるものにて歐洲の馬とて昔より斯く魁偉強健ものにはあらざりしが  
 中世の頃武邊盛に行はれて戦争とか決闘とかさへ云へば武士の皆を自身  
 にて歩行のならぬ程の重き甲冑を着用し之に應したる重き械仗を提げ  
 て馬に跨がることなれば尋常の／＼馬の皆を乗潰ふされて物の用は  
 爲せ従て一世の人悉く魁偉なる馬ト強健き馬トを求むるより種も選べば  
 蓄養法も工夫し此時より歐洲の馬世界に一紀元を成して進化の道を開き

不遭遇  
事變偉  
業不成  
嘆哉

たる由に聞及候左れば日本の馬とて現時の小弱なる唯だ嘆息して已むべ  
 きものに之れなくと存候

○問 日本の寄席の類の類の之なく候や

○答 英國にて音樂場(ミュージック・ホール)と申すが日本の寄席も善く似  
 たるものと存せられ候音樂場の大なるものあり小なるものあり極めて華麗な  
 るものあり又左程に參らぬものありて一様に、行かざれども其演ずる所の躍  
 所作事茶番手品輕業等にて何を一色に演ずると云ふ事はなく先づ程々の  
 藝を入り代り立ち代りて一ト切り宛務める事に候其藝人も常々次さ／＼  
 に廻りて務むるものと見へ甲の寄席にて曾て見たりし藝人を復た乙の寄  
 席にて見る杯の事の屢々に候

○問 落し話と申す類も出て候や

○答 純粹の日本の落し話の如きものの之なき様に候へ共時々妙を滑稽  
 演説をなすものの現はれ出候是の滑稽演説者の顔をば眞黒に塗り其他の



様子もすべて黒人に擬ねて打扮たるが多く候

○問 手品輕業等は別に異なりし所も之れなく候や

○答 先づ似たり寄たりと申すべきもの候へども手際の鮮やかなることの彼地の方廻かに打ち優りたるやに覺ふ試みに其一例を申せば一寸したる前藝に手品遣の右の手に一尺立方位の小鳥の籠を持ちてシツと舞臺の前に出て一ト通りの口上を述へて又た舞臺より下り見物の中央邊に進み茲にて己れの身軀をあらため籠を調ふる事杯ありたる末彼の小鳥籠を左の手に載せ右の手にて籠の上を提げたる儘見物のマツメの中に屹として忽ちヤット叫ぶと思へば如何にしけん彼の籠の今まで上下飛翔居たる小鳥を籠めたるまゝ、雲ともつかせ煙ともつかせ何處に逝さしか影だに留めせ是時手品遣の前後左右の悉く見物にして頭上より照れるの赫灼たる電氣燈瓦斯燈のみ又た今ま一例を申さの舞臺の中央に一枚の新聞紙を展べ布き其上に一脚の椅子を置き此の椅子に年頃十六七歳の娘を腰掛け

一叫高  
聲彼我  
同轍是  
則法之  
所在

させ娘の頭より紫緞子の大襟を蒙ふせて全身覆るくまなく蔽ひ了るなり斯く蔽ひ了りたる處にて一寸口上を述べ彼の椅子の傍に近づくと是時紫の襦の娘の全身を其形儘に罩み居れの娘が少し小ゆるぎするまで襦の波だつ工合にて明白に分かる斯くて手品遣の其傍に近づきて其左肩の處に立ち姑く呼吸を計りて彼の娘の頭に手をかけつ、ヤット叫ぶや電光石火襦も娘も消へ亡せて殘るの例の新聞紙を踏みてぞめる一脚の椅子のみ也是等は眞に有り觸たる手品にて奇にもあらねば妙にもなけれど同じ事ながら之を日本の細板杯に比すれば品よく手綺麗に覺ゆる事に候尤も其中に鳩杯の小鳥を使ふて車を曳かせ字を讀ます等日本の山雀使ひと其拙を同ふするもあれど兎に角に器械仕掛の巧みなる丈の手品に色々の巧も出来ること、存せられ候又た輕業も其身体のコナシ熟練の日本と左して甲乙もあらぬやに相見へ候其其道具立ての宜さがため自然見優りする心地あるを免かれ尤も身体の動きに就て申すも日本の輕業師の何となく自分



に不安心氣なる面色危み苦勞する氣なる態度をなすと多く見物をして動  
もそれバ一種の快からぬ感を作さしむること少からざるに彼地の輕業師  
は常に顔を怡らげ坦然として左も平氣そうなる風をなし居るの大に看よ  
さ心地致候

○問 辻馬車の趣の如何な候や

○答 英國辻馬車の立派なるの初游の余等にい甚だ目に留りて覺へたる  
事に候辻馬車又の二様あり一の四輪附の者にて我邦の勅任官杯の多く用  
る箱馬車と同様なり前後相對それバ四人の坐ること出来る様なり居る  
もあれば又た通例の正面に一人か又の二人双坐と申すを常とし二人以上  
とあるとき其以上の人が馬と背合のせに坐るべき方の腰掛の常にの上  
に疊みわけてあり入用の時あらでは其棚を卸さる、様せるもあり第二  
の二輪附の者にてハンソムと稱する一種異体の形あり是にい御者の座が  
尋常の馬車の如く前面駕馬の後邊にいあらせして人の乘坐する箱の背邊

にあり箱の背邊の上部に癪に似たる小さき四角なる棹つき居り御者の茲  
に車の天井と己れの臍と平行せるくらゐの位置をもて腰掛居る也左れば  
手綱の馬の轡より御者の手まで恰も乗客の頭上を越して通し居れり箱の  
入口も尋常の如く横側につき居らせして前面に開き戸あり其開き戸の  
乗客の膝頭より少し高き位の半扉にて乗客の乳以上は開けばなしなり故  
に坐わり乍らにして前面を見いらそこと出来るなり左も四輪附の方なり  
とて前面に當る處の上部をガラス窓になしあるが故必しも眸を放つこと  
のならぬにいあらねども一段高くなりたる御者の座杯の蔭ありて随分  
陶しと云へバ鬱陶し故に此點丈を申さばハンソムの方大に騁目の快あり  
とすべし要するにいハンソム形の一寸輕便の輕便ながらに零式に屬する  
方にて辻待の分の外抱への馬車杯にい見受けることなき様あり元來此の  
形の昔し英國のハンソムと云へる男創めて之を工夫し出したるより即ち  
其人名を冒せて斯くの呼ぶ位にて英國が本家なり左れば倫敦まで尤も多



く此の形を見る事に候  
 巴里の流石に華奢の都だけありて辻馬車までも夏冬によりて其差あり冬  
 分の箱馬車を用る處を夏時にの重みに母衣馬車に易ゆるなり母衣馬車の  
 御承知の如く後邊より母衣立ちかゝり居り前半の打開き其狀恰も扉なき  
 籠の如きなり之に年若き婦人杯流行を競ひし盛裝をこらしめて端坐し彼の  
 シヤンゼリーゼの廣き大通りを馳騁すさまの一段の觀物なり巴里にては公  
 園の規則倫敦と異がひ辻馬車をも勝手に其内へ乗入る、こと出来るが故  
 空暖かさ氣節となれば夕方よりの抱馬車辻馬車相混じて老少男女を打載  
 せつ、彼のポアドブローンの公園に趨むくものシヤンゼリーゼの大通り  
 り路釋きて引も絶らざる有名なる凱旋門の恰も此の道筋の衢に當りて巍か  
 く立ち居るが故試に凱旋門上に攀登りて（門の高さの直立一百五十二英  
 尺零は我が三十間許りなり）屹と向を見わたせば幾百となき許多の馬車  
 凱旋門の相駢びて四行五行となり各行又た首尾相接して陸續と公園の入口を指

短筒記  
得妙

して進み行く有様の恰も糖塊を臭ぎて聚まり來る蟻の群を視るが如きな  
 り他處よての餘り看難き景色と存候  
 伯林にて一寸異様に覺へたるの母衣馬車に上下の二々通りありて下の方  
 の物体に武骨にて綺麗ならせ又た其品位を分つ爲や前面の窓ガラス（前  
 後の母衣を合はせたるとき窓となり遷みたるとき御者と客座との界板  
 となる）上等の方の色無し下等の方の色付となり居りし事に候  
 日耳曼旅行中フランクフホート（南部日耳曼中第一繁昌の商賣地）の近在  
 にての牛に荷車を牽かせる者を段々見受けたり其牛の使ひ方の日本の如  
 く鼻孔に「ハナグリ」を貫せる所の法にの異なりて單に双角の根を約ぱり  
 其綱を執りて操縦をなそなり大抵の二頭立ちにせるが多かりしが一本の  
 棒を横たへて之より二頭の角の根を結び付け以て接控の事をなせり又た此  
 の邊の田舎に這入りしに或る處にて犬を車を牽かせるを見受たり是の往  
 々ある事の由にて後ち伯林の町中にても幾度か之を目撃たり犬の事なれ

犬狗之  
於車我  
園所未  
嘗聞



ハ固より大きな車を得牽く筈もなし只だ小さき車に小さき物を載せて牽き行く其傍らにの必き又た一人附添ふて行くなり日本にて云はゞ丁稚小僧が袱包を之に牽せて用達しに出掛るど申す位の處なり何分に馬の勿論牛にせよ犬にせよ身体魁偉にして強健能く色々働きに堪へることの出来るの羨むべき事と存候

○問 御話しのお音楽場の建物の如何に候や

○答 早く云のハ劇場を小さく致したるが如く仍復正面に舞臺ありて其両端より半月形に輪づくりて見物の席あり劇場と異ひ候ハ劇場の如くに棧敷幾段もく重なり居らむ尤も其場の大小よりて色々不同もある事ながら先づ棧敷の二三層しかなきが通例に候劇場の壯麗なるハ申すまでもなき事なれ共是の寄席なる音楽場も少し場處柄に至れば其華奢なる事初游の者の目を聳すことなり一寸致したる事ながら場中の廊下に致せ階級に致せ一切厚さフシくしたる敷物を布きありて如何に下品なる

使舊弊頑固之老爺到此處必此靴而後登

靴を穿きて這入る者も決して歩行くにつれキウ／＼ギシ／＼と音の發する心配なし物事不案内なる時の妙なる間違も起り勝ちなるものにて明治の初年洋服の流行のじめし頃には如何に誤りけん靴の歩行くにつれて音の發するを善しと致し鳴草杯と稱し態々一種の草を底に保めて迄も音を發さんと勉めたるものなり現時の固より斯る事もなければ誠に顛倒したる話よて彼地の作法にてハ靴の音の致すハ甚だ好まぬ所なり佛人の物語と覺ふ一嘗て日本に遊ひしに最初本船よりハシカヌ移りて陸に近きたる時日本なる國を始て目撃る共に第一に奇異不思議に感じたるハ岸上を往來致し居る男女が都べて歩行くにつれ其の脚底にて一種の音楽を奏しながら徘徊せる一事なりきとの話あり成程靴にてさへ其音が發つハ上品の禮とせざる風俗の中より來りて彼の立派なる婦人士君子の遠慮もなく駒下駄足駄の類をカラ／＼コロ／＼と曳き鳴らし往來するを見れば驚きたるも無理からぬ事と存候



音樂場の類の何れの國にも之れあることなれども右の重めに英國を申し  
 たるものなり又倫敦に水族館（アクウオリヤム）と云ひ聞こへたる人寄せ  
 場あり是の元と字面の通り水族を養ひ貯へて公衆に觀する所にて水族館  
 と稱するの他の博物展畫等の諸館同様各國の都會に之を回より多く之  
 れある事なるが倫敦の分り獨り其趣を異にし其建物も至て廣大なれば其  
 振合も宛然別にて肝腎の水族の唯た斯の廣大なる建物の内邊の一方の壁  
 際に一ト通り陳べあるのみにて其中央の豁然と打開きたる大廣庭なり其  
 正面の中央に一舞臺を構へて仍復音樂場同様種々の藝を演し居れり是の  
 藝と水族館の附物としありて別段に機數を取るにあらざるより外立ち見  
 の人々の勝手なり其他時に隨ひ是の庭内を借りて色々様々の觀世物を興  
 行するものあり恰も舊の淺草奥山と云へる趣に似たり之に加るに種々の  
 賣物店茶店酒店料理店其中に羅列し夜分の賑かさの言はん方なし水族館  
 にて毎夜點す瓦斯の火口無慮一十萬筋と云へり左もあるべし館内の一面

水族館  
 是一興  
 行會

盛籠の如く耀きわたれり然れども是の水族館の斯く人寄せ場となり居る  
 に従て身元宜しからぬ賤業の婦人杯も多く此に入込み立寄り居るが故少  
 しく体面を構ふ士君子にありては水族館に繁く出入する杯との事の餘り  
 申そを喜ばぬ方に候

○問 音樂場に限らば都べて劇場等にて演する躍所作事の類の如何なる  
 模様にて候や

○答 凡べて躍の手振の一寸見物したる所にての簡易にて變化の少者や  
 に存候日本の流義より云ひ躍の手の唱歌の意味を代表するものにて眠  
 ると申す歌意の時は腕を曲げ數ると申す歌意の時の指を儂なふる杯都て  
 歌意に應じて一切の態度を定むることなるに西洋の躍の更に斯様なるこ  
 となし兩三年前日本に遊びて頗る好遇を受けたりと云ふ英人某が其著の  
 せる紀行に種々日本の風俗を嘲り記せる中新富座にて頁の芝居を見物し  
 無唱歌 彼の古市の躍の處に至り其の躍の手の異様にて變化なき旨を説き居たれ  
 之踊舞 不能無



取蜘蛛  
網於空  
屋之觀  
手

と日本人の目に西洋の躍も随分異様よて變化なく見ゆるなり左れと斯  
 る議論の置き西洋の躍の日本と異なるの躍の地と稱すへさ歌を唱ふこと  
 なきと従て其手に意味を代表することなき是なり先づ一寸尋常の振合を  
 擧て茲に云はゞ多勢の躍子が五人十人乃至二十人三十人宛各々對の衣裳  
 を着け幾組となく一組數人數の多少の其掛りの大小によりて勿論其差  
 り一続きに現はれ出で一組宛手を揃へて躍り後又二組三組と諸組  
 打混じて躍る其間くを計りて他の躍子共をバ周邊に片寄せ首魅とも云  
 ふべき一人が例の腰舞の如き輕羅の裳を着け獨り舞臺の中央に出て、躍  
 る是の一人躍と組躍とか入れ違ひくに躍りたる末舞臺總躍となりて終  
 るあり扱て其躍の手の單に手を廻し腰を捻り足を振りて走り回る  
 に過ぎせして何の意味もなし唯た其賞玩すへき點の身体輕捷にて手足活  
 潑毫も重もた氣なる所なく一人躍りの巧なるに至ての身体飄忽として空  
 を歩するかと想のる、計りなり組躍の方別して簡易にて唯だ其多勢が

齊しく揃ひの手にて躍ると申す處に文章の存することなり凡そ何でもな  
 き手振にても多勢齊しく揃ふて之を演ずるとき其間に自然の風致を生  
 するの人類眼世界天然の規則に候

又今一つの異處を申さば日本の如く彼の多錢善買長袖善舞の諺の如く衣  
 裳のヒラ／＼アロ／＼したるに因て其態度を取ども西洋の方の衣裳の其  
 彩色をなすのみにて態度の重もに眞の四肢のコナシに因て其趣を取る様  
 なり左れば西洋の躍子の手の手足の足と其形儘と露のす衣裳を重めに用  
 て緩裾潤袖の着けぬ事に候

○問 西洋の家屋の有様如何

○答 家屋の建築法の實に種々の制あるか上其國々に因り又種々の區別  
 あり去り乍ら先づ其物質丈の何處も同様にて第一の石室なり第二の煉瓦  
 室なり然る處石のみを以て築きたる家屋のナカ／＼稀なるものにて先づ  
 古代より傳られる城壁か或の有名なる王公貴人の舊來よりの住居か杯の

我國家  
屋多木



柱泥壁  
一震忽  
毀宜則  
洋風

外にの通例の家々には思ひも寄らぬことなり是の其物質の堅牢なること  
の無論貴ぶことながら實に其入用に堪へき寧ろ人造の煉瓦にて積み上げ  
る方其費輕きが故なり左れば純粹の石のみにて建てたる家の寺院か城廓  
か古代の遺物なる公共の建築物か此外にの見へざることなり尤も英佛曼  
等の重なる場處に聳へ立てる建物の中にの總て石を以て積みたるが如  
きものあれども多くの唯其前面のみを化粧したる迄にて左右後面及び家  
の中心迄悉く石を用ひたるにの決して之なし先づ通例の皆を煉瓦にて積  
上げ所々に石を以て化粧をなすに過ぎせと云て可なり又煉瓦にも二様あり  
其形ちの總て日本の煉瓦と大同小異乍ら鑲座杯に用ひたる如き赤色の  
ものあり又黄なる土色をなし居るものあり此二種の内一方の火に強く一  
方の水に強しとこのことを聞さしが左様なる區別もあることにやと覺ゆ黄  
色なる方の赤き方よりの全跡に堅き様に見受けたり此等の煉瓦を用ひて  
其間にのセメントを塗り詰め家屋を組み立てることなるが田舎の村落の家

々の中にの家根組み及び二階の椽桷杯にの都て木を用ひ居たるもの多し  
然れども都府にて重なる商店の家杯を建築するを立寄て見るに椽桷杯  
の皆な鐵を用ひ大抵の木を用ふる場所にの鐵にて之を辨し居れり又亞米  
利加にても相應なる場所の普請を立寄て見たりしに是も椽桷其他にの成  
るべく皆な鐵を用ひて木を用ふるもの少かりき然れば歐洲の家屋の後來  
の運命の土石鐵三者より成立ち木材の僅かに之を助けるだけのものと成  
行くなるべし

又建築法の論の始く置き尋常住居家の勝手向の有様を述べんに此等も英  
佛曼伊等國々に因て多少其趣を異にし居れり其一例を擧ぐれば巴里伯林  
等にての廣大にして高さ家多し故に家を借る者其一階くを借るとに  
て例せば一階にの甲某が住へば二階にの乙某の家族か住居し又三階にの  
丙某の家族か住居すると云ふの有様にて大なる家を横に幾段にも切り多  
敷の家族が其一階くを一軒の家となして借り込むとなり又家主も其爲



めに工夫して建築せることなれば一階を借り受る時の客間勝手臺所等夫々に備はり居ることなり早く云へば日本風の平家を五箇も六箇も積み重ねて其一層くを貸家となすが如し故に此大なる家の隅より頂上に達す不知商る階子段の恰も裏長家の小路の如く五六軒の家族が共同に之を用ふると此處否云ふ有様なり此仕組の専ら巴里伯林羅馬杯も行のる、なり

然るに英國の又其休を異にし大なる家を堅に幾戸も仕切りて之を貸すの趣向なり故に例せば三間間口一軒を借り込む時の其一階二階三階とも渾て甲の一家族に属し又其合壁の次の三間間口の乙の一家族に属すると云ふ仕組なり左れば通例英國の下宿屋杯の一階より三階四階迄皆な一の家族に属し居れり

右の有様なるか故倫敦の貸家下宿屋の餘り大ならき又高からざるに巴里伯林等の貸家下宿屋の甚た高く又甚た大なることなり倫敦杯の下宿屋の一階二階三階と人を容る、に巴里伯林なれば一ト間二ト間と横に並ひて

客を容る、の譯なり尤も巴里伯林にても場所に因ての倫敦の如く横に仕切て住居する様に拵へたる家もあり又倫敦とても場所に依ての幾階にも家を貸す如く拵へたる建築もあり然れば一様に申し難けれども先づ重なる風俗の斯様なる相違あることに候

今倫敦の一家に在ての間取を畧説すべし尤も上等の生活に至れば家も宏大にして其間數も多く一様に云へぬことなり然れば此等を差置き世間普通中等以下の勝手向の間取を述べんに往來の道と天井と齊しく云ひ地底の一と間あり又往來と幾んど並びたる一と間あり又其上に一階あり三階ありと云ふを通例とす借其家の先づ日本よて見る所に西洋家の如く所々に四角なる窓ありて其家の入口に三四尺幅の開き戸あるを通例とす総て西洋の家の煉瓦にて三階四階五階と積み建つるが故に其重み強く餘程土臺を固めざれば忽ち壁もヒの割目を生ずるが故に地盤の堅き所を擇み地形を固むること大切なり左れば餘程深く地盤迄掘り付けて

我大坂  
地方沿  
河家屋  
有下屋  
者殆類  
之



然る後に石土杯にて敲き固め土臺を拵へることなり然るが故に最も低き一ト間の前記せる如く幾んど天井と往來の道と相齊しき程なれば此處に光線取りの途をつけざれば甚た闇き様に見ゆ此最低の一ト間の床より往來の道に向て斜めに土を剝り落し堤塘の形をなし町外れの繁華ならざる場所にて此處に菓木杯を植へ置くことなり故に光線の相應に此より取らる、なり(之をバ假りに下九間と名づくべし)臺所物洗場一寸したる物置勝手に使ふの部屋則ち此下九間の内にあるなり又此上の間の則ち往來の道と其床と等しきか然らざれば往來の道より四五段高く昇る程の小高さ位に床を据へたるものにて來客杯の往來より一二段石段を上りて此間の入口の戸を敲くことあり通例表向きの食堂に用ひ或の一寸せし來客を通すべき間杯の先つ此の第一階にあるなり又其上第二階の通例表向きの應接の間にして英人のドロイニングルームと名づけり客座敷を此處に取ること多し(ドロイニングルームとのウイツシドロイニングルーム

と云へる意味にて客を饗應し其饗膳終りたる時に此に引上げ導き休息せしむると云ふ意味なりしに追々略稱して今の唯たドロイニングルームと云ふこと、なれり)此のドロイニングルームの一家にて最も飾り付けの念を入る、部屋にて其家の珍重の額面飾物等、総て此間にあることあり又此間への通例安椅子一脚二ソーフ、一脚と通例の椅子四脚とを併せて六脚を置くを通例とす(尤も上等の分の此限りに非せと知るべし)又此上の一階なる三階の通例家族の寢室にして五人なり六人も皆夫れ、廣き部屋に小き寢床の二つ三つも入れ狭き部屋には二人前の寢床一脚を置く等見計ひ次第なり又家根の頂上に隣りせる最も高さ場所の諸間の中に最も下等に見下すものにて通例の下女下男の部屋を此に取ることなり日本にては高さ所程脱び下き間程何か卑き様に思ひ居れども彼地の風俗に慣るれば賈る低き所程貴く高さ所程何事にも不便にて一寸昇り降りをなすにも息の切れる程に段數の多きことおれば勢ひ頂上の部屋を最



下等とし下の部屋程を上等とあさねばならぬ様ある譯に候

○問 西洋諸國の屋根の瓦の日本と同様ありや

○答 概して謂へば西洋の屋根の瓦には二種の區別あり其一の日本の如き焼瓦なり他の一種の日本にて學校生徒の用ふる石盤と同様なる薄き石片を用ゆる事なり第一種の焼瓦の方の古くより西洋に行われし者と見へ佛曼伊等の古き田舎の小都府に至り見れば多く皆な是の焼瓦の方を用る居れり而して諸國の繁華なる大都府などにて稍や新らしき建築及び相應ある家屋を見れば通例皆石瓦の方を用ることなり

英國ロンドンなどにて一寸見たる節の屋根の瓦の皆鐵或は銅にて張たる者と思ひ居たりしに何様余等の見聞せる所の成る可く精しく之を我國人に報道せんと心懸け綿密に之を調べ見るに至りて始て今迄金屬の薄板張りと思ひし屋根の左にあらざして多くの皆石盤瓦なる事を見出せりロンドンなどにて用る者は先づ其幅一尺或は一尺五寸四方の者にて其半面の

石片能  
反照日  
光見之  
誤金屬  
亦非無  
理

甚だしき凸凹なく先づ滑かに平たき方なれども左ればとて尋常の學校石盤杯程に滑かに磨きたる者へのあらき此の薄き石片を以て一面に葺きたる事にて其合せ目く少し石片を薄く削り雙方の端を重ね合せたる者なれば一寸遠方より眺むれば恰も金屬にて薄く張たる屋根の如く見ゆることなり故に等閑に見過す者への之を金屬の瓦なりと思ひ誤る者も有りしならんと思像する程の事なり

又此石盤瓦も國々に由て其形種々の相違あり佛國などの相應なる建築にハ一尺ばかりの鱗形に切りたる者を恰も鱗の如く重ね上げて疊みたる屋根もあり又曼國のライン河の上流に沿ふたる都府及びフランクフォート近傍の田舎に至れば此鱗形の石片の大き僅に三四寸にて而かも其丸き形の種々の不規則たる者を鱗の如く重ねて屋根を葺きたる者多し又家に因りては其屋根のみならず前面側面の壁をも一面に此石片にて重ねたる者あり其狀の恰も日本にて板疊を用ふる場所に板の換りに此石片を以て疊



我優於  
彼唯瓦  
有焉

地に重ねつけたる者なり然れば日本の家などに比すれば屋根と云ひ家の  
前面側面と云ひ此石片の重量丈幾許か餘分の重量を擔ひ居ることなりと  
見ゆ斯く石片を以て屋根のみならず四面まで掩ひたる事なれば日本など  
の如く大なる地震ある日よの必き其度毎に多少の損處あることならんと  
思ひる、なり扱て斯く一面に石片を以て之を掩ふたるが故に遠くより眺  
むれば恰も猶ほ灰色のセメントを以て葺きたるが如く見ゆることなり  
又其燒瓦を見るに不手際にして葺方の不規則なる事も甚だ日本に劣れり  
日本の事物を西洋諸國に比較すれば何事も何物も唯た我れの劣れるを見  
るのみにて残念に覺ゆる事多きに只燒瓦の一事に於ては日本の方大に優  
れるが如し第一先づ瓦の形の正しき事も彼地の者の日本に及むを  
て甚だ麤粗なり又其色合も素燒の如く赤色を斑に帯びて日本の如く定り  
たる色なし左れば色と云ひ形と云ひ是の二點にかけては日本の方甚だ立  
優りたる者なり斯かる麤粗の瓦を以て葺きたる事なれば彼地の屋根の赤

色に見へ又日本の如く一行くには整然と條目正しく並び居らむ左折右曲  
て見ゆるなり万事何事も正しきを好む國柄にありて何故に獨り屋根瓦の  
一事のみ此如く見苦しきやと考ふるに蓋し彼地の家屋の總体に高くして  
往來人の目には只三階四階の軒端を見るのみて其屋根を近く見ること能  
ひぞ只遠方より之を眺ることの出来るまでなり左れば通例市街の家は尙  
更の事少し高さ家ならんに屋根の先づ其家の化粧の中に入らぬと云  
ふの有様なり然る故に自然と其瓦などに注意すること薄きものと見ゆ  
左り乍ら公會の家屋或は寺院其他有名なる建築の如きは屋根より土臺に  
至るまで念に念を入る、事なるが故に其屋根も亦尋常の赤瓦などを不用  
むを頗る注意する事なれば此類の建築の取除けての論と知るべし、然る  
よ日本の家の甚だ低くして皆な其屋根を望み見らる、か故に屋根及び瓦  
などの其家の裝飾の部類に加ふる事なれば自然と屋根瓦にも心を用ゐる如  
く西洋諸國に優るに至りし事なるへし尋常の家屋の瓦は日本の方が遙か



に西洋家屋の焼瓦に優り居ることの余等の保証する所なり

近來日本へ行ける、亞米利加瓦とか云へる一種の瓦あり右の歐洲諸國にては餘り見懸けざる様に覺ゆ唯亞米利加に於ては處處にて見受けたり然れば此瓦の型の近來の發明にて亞米利加より始まりしものにあらざるかと思へる然れども余等の耳目の及ばざる所に西洋諸國の中にて稀にて之を用ゐる者あるやも知れず

○問 道路の有様は如何

○答 西洋の道路の概して四種ありと云ふ可なり先づ第一に日本の銀座通り杯の如く通例赤土様のもの、其儘に固りたるものあり又第二に石疊なり其仕方日本にて眞石と稱ふる堅き石を煉瓦の如く割りたるもの（勿論四面共に煉瓦の如くスベ）と磨きたるものに非ず形ちの煉瓦の通り乍ら其面の粗くして所々に少々づゝの高低ありと知るべしを以て銀座の人道を煉瓦にて疊みし同様に一面に敷き詰めたるものなり此石

一得一  
失數之  
所不免

鑿道の舊來より諸國に行かれ來りしものにて少し都府らしき處に至れば其町々の如何に道幅の狭くも必き石疊ならざるのなし此方法なれば雨水の爲めに通例の土道の如く所々を洗ひ流されて高低を現しす如き患もななく萬端都合好く丈夫至極のものなれども余等の如き旅行者杯の爲めに甚た好ましからぬ道なり如何となれば馬車杯にて此上を通行すれば其ガタ／＼と揺れて頭腦に響くこと實に甚し銀座通りの如き土道を車にて驅ると此石道を驅るとの實に乘客に非ざる苦樂の差あり此道を驅り行くとき、の辻馬車にてても其揺れ甚だしきことなれば况してや乗合馬車杯にて斯る道を通ずる時、頭痛を惹き起すかと覺ゆる程に動揺し且其ガタ／＼と軋る音も亦た甚た不愉快千萬なり此一事の蓋し日本の車に未だ曾て経験あらざることなるべし又第三に煉瓦の形ちの如くせる木の木口を道一杯に敷き詰めたる物にて木道と云べきものなり木道の普請杯をなすを立寄て見るに其方法の先づ初め道の地盤を敲き固め然る後に煉瓦



形の木の木口をヒシと敷き詰め其間に何か流し込みて空隙を防ぎ然る後に極細かなる泥を薄く散しあるが如し然れども諸車が其の上を軋るが故に此木口の自から現れ居る場所も多し又此木口の悉く皆なナヤンを塗りある故に往來を始む前るに道の色の黒く見へ居れり此木道の廿年來諸國にて造り始めたることにて追々に用ひらる、有様なり又第四の日本にてマ、キと唱ふる如き種類の道にて一種のセメントにて道一杯を塗り詰めることなるが其燥く迄よの時間を費やし又其間に雨天もありて道を損ふの懼れあれバ甚た此道の難澁の如く思ひたるに其修覆を爲し居るを見れば大なる熨器にて其道の上を燥かせ居ることあり熨器の形ちの恰も彼の御影石の圓き道ナヤン機械の如く鐵にて圓く出來居る其中に火を入れありと見へて此圓熨器を徐々と一方より當れのセメントの道の漸々に燥固まる事なり左れば初め余等が難澁なるものなるべしと思ひしは甚だ迂濶なりしを悟りたり此第四に擧げたるマ、キ道の諸種の中にて蓋し第

比之東  
洋道路  
雲泥不  
啻

一等のものなるべし大道をマ、キよしたることなれば徒歩するに必心地好く又如何なる種類の車にあれば此道を驅る時のガタ／＼と音もせざれば些かの動揺もなく車の澄みかえりて進むことなり

右四種の中にて英佛曼伊米の諸國に最も多き石道なり其次に木道なりマ、キ道は最も少きものなり之を用ふるの先づ佛都巴里の目貫きとも云ふべきプールパードの諸街ぐらいのとなり又英國にては中央市區（シチーと唱ふる部分）に限ることにて適宜に木道をマ、キ道に改ため居れども尙は未だ十分に之を用ふるに至らば又石道の所の佛にては英にては漸々と木道に改まり行くの傾きあり然れば西洋道路の後來の運命を豫言すれば今日石道の所の木道に變じ木道の又次第にマ、キ道に變じ行くべきなり

又英佛の重なる都府の中にて通例の場所の皆な馬車道と人道との二つに分かれ中央の廣き所の馬車道にて兩側の狭き所の人道なること我銀座



通りと同様なり此人道の巴里の中央にての専らマ、キ道となしあり倫敦にても同様にて重なる場所の人道の率ねマ、キ道なり又中央より少しく隔りたる町々の人道の英國にての人造石を以て疊みあり此人造石とは粘土を集め人造の石を拵へたるものにて其幅さの通例三尺四尺位のもの多し倫敦杯にての場末の町々迄も人道にの皆な之を用ふることなり此石は人造乍ら意外に堅きものにて一寸碎けべくも見へぬ程のものなり去り乍ら人の出入の繋ぎ所の靴にて踏み銷らされ居る所も多し之を以て考ふれば日本にて眞石と唱ふる程の堅さは決して之なきものなり又見たる所の通例日本で砥石色と名付る黄茶色をなし居れり右の英國に限る事にや巴里杯の町々の人道にの餘り之を見受けざる様に覺ゆ日本杯にても銀座の人道をマ、キ道になすこと出来難くんば此人造石を造りて用ひたらば便利なるべしと思はる

伊佛曼杯の小都府を旅行し終日瀟車にて揺られたる上停車場に到着し疲

かれたる身軀を以て宿屋の手馬車に乗せられ行くに當り前述せる石道の上をかマ、キ道と揺られ行くの一事の旅行者の爲めに難儀なる一事なりしなり大陸の古き小都府にの別して此石道多く車にて之を乗り行くにの實に難澁至極せり

○問 通例の家屋にて家の規模及び窓の有様の日本の西洋家或の横濱神戸などの居留地の西洋館と左までの相違なきや

○答 横濱神戸の西洋館を以て、差したる相違のなけれども稍や其趣の異なる箇條なきにもあらざ先づ倫敦などの中以下の家の有様を謂へば奥行五六間を通例とし間口の十間より二十間迄の者を一棟とし此一棟を三四間間口に仕切りて一軒の住居とあす事なれば三四軒を合して一棟の家となり居るなり扱家の四面の総て煉瓦の上をセメント壁にて塗り色は其儘セメントの灰色の者多し而して前述せる如く通例三四階或の五六階までありて其一階毎に居留地西洋館の窓の如く細長き角なる窓を二つは



至中等以下則開家之  
前而嗟乎  
其有害  
實可想

かり宛あけあるを常とぞ最も間口の廣狭に由て或の大なる窓一をわけたる者もあり又小さき窓三ツを設けたる者もあり  
往來より一段低き下間の夜中杯の不用心なるが故に窓の外に鐵格子を設けあるか又の雨戸を閉つる様になしある者も毬からぞ又往來と等しき平間の窓も往來に近くして不用心なるが故に家に因ての扇の雨戸を閉る様になしたるあり然れども一階二階三階四階に至ては大抵雨戸を用ぬが通例なり右の家甚だ高くして盜難も亦少なきが故なるべし而して右の窓々にハガラス戸を嵌めたり是れも倫敦にてハ通例窓一面の大ガラスを用ふるなり又其厚さも日本にて用ふる尋常のガラスの三四倍もあるべしと思ふ程に厚し日本にハ厚ガラス少なきが故にガラスと聞けば毎も脆き者の様に考れど通常ロンドンの家の窓などに用ひある者の實に厚くして丈夫なることなり近來建築せる住居家の大窓の戸を上下二枚に分ち外面より之を見れば窓にハ其中位に一の字の仕切ありて下のガラス戸を上

あぐるか又の上のガラスを下よおろそかのみなす様に工夫せり故に窓のガラス戸全部を一時に開くことハ出來がたき者なり

○問 往來の人より家内を見徹され或ハ日光の室内に差込を防ぐ等ハ雨戸なくてハ不都合の如く思はる又雨戸ありども此を閉むれば室内甚だ暗くなるの恐れあり其邊ハ如何

○答 外面より見徹されぬ爲めにハ窓飾に室内に薄き紗の如き者(非常に高價なるもあり又粗末にして非常に廉なるもあり)を設ありて此薄き布を垂るときハ外貌より見徹さる、恐れもなく明光も十分に取る、事あり又夜分など家内の者の寢床に入る時或ハ日光の差込を防がんとする時ハブラインドと名くる木簾を下ろそことあり此木簾ハ通例窓の内部に設けある者にて幅三四寸と覺しき薄板を綴りて簾の如く拵へたる者なり是を卷上ぐるときハ疊まりて四五寸ばかりに縮まり是を下ぐれば窓一面を塞ぐ様になり居れり而して此の薄板の木簾ハ羽重ねになりて下にも向ハ



しめられ上にも向のしめられ隨意に其の重なり方を變ざる様に出來居れ  
 簡且便り横濱の停車場トウキョウにて先年之を用ゐるありしを見掛けたり此木簾キダレの雜作も  
 なく出來る者にて甚だ便利ある工夫なり倫敦の住居家にての通例何れに  
 も之を用ゐる事多し然れども又此木簾の外に唯厚き布を垂れて窓の日光  
 を防ぐ様になしたる者も少なからざる是の濃赤色又の濃綠色杯の布を以て  
 之を造り紐にて之を巻き上げ或の引下げる様になすこと通例なり前記せ  
 る木簾の如何に手際に拵へるも十分ならぬ譯にや廣大なる建築美事なる  
 住居家あてにての此布簾を用ゐる者の方稍や多きが如し序なれば爰に記  
 載すべし中人の通例の座敷にの皆其窓に一種の窓飾の長幕ありて絨織の  
 切地と以て之を造るの是の長幕の實際之を開閉に用ゐる事に至て少なく  
 通例の單に其窓内の趣を添ゆるが爲めにするものなり其形は先づ窓の中  
 央より右よ一つ左に一つあり二つを以て窓の上より下まで掩ふ様になす  
 之を右と左の左右に絞らりあけ種々の飾りを其絞る所の紐につけあり是の

通例の部屋にの無くてならぬ飾にて窓内大切ある一部分となり居る事な  
 り

又窓ガラスも少し宛其趣きを異にすることなり佛國の都府に至り見れば  
 其窓ガラスの多く兩方に開く様になしたる開戸アキドにて英國の如くに上にあ  
 ぐるか下よさぐるかの外の前面に開く事の出來ざる様なり居る者の甚だ  
 稀なるやうに見受けたり而して又佛國よての通例其ガラス戸をバ三四の  
 格子にて仕切り其一格毎に別々の一枚ガラスを嵌め四五枚のガラスを以  
 て一枚戸となしある者多く英國の如く一面の厚ガラスを以て一枚の窓と  
 なせるの稀なる様に覺ゆ此れ兩國の風俗の同しからざる一なり而して又  
 全体に英國の方の不細工なる程其ガラス厚く佛國の方の稍や薄き方に見  
 へたり又伯林の如きの通例の住居家はガラス窓の佛國と其趣を同らし開  
 戸の方少なからざる又一種の便利なるの通例其窓の上段をば蒲鉾形に割  
 て此處より一尺内外の處よ一の仕切をなし此仕切より下をバ例のガラス

西洋人之用  
 於諸事  
 尤周到



尤親密  
如斯乃  
一例

戸の左右開きとなり居れり而して是の左右開きの上即ち其浦鉾形と仕切  
 どの間には亦たガラス戸の小開きを設けありて其下なる大ガラス戸の開  
 閉に關せ此上段の浦鉾形の處を開閉し得る様に工夫しおれり故に若し  
 風の入り過ると覺ゆる時の下なる大ガラス戸を閉め其上なる一尺内外の  
 小開きを開いて少しく空氣を通る事も自由なるべし此等の英國などに  
 餘り多く見掛けざる工夫にて至極都合宜しき譯なり

左りながら英國とても少し田舎に往き觀ればガラス戸の厚みも随分薄き  
 者尠からせ先づ都會の尋常の住居家の上に就て斯く國々を比較したる事  
 なり一寸考へればガラスは破れ易く往來に窓々が立並び居ることなれば  
 瓦礫などを擲ちて容易に傷けられべき譯なるに斯る惡戯をなす者なきの  
 感心の國柄なりと思ひ居りしに少しく倫敦の場末の市街に至り見れば其  
 空屋に限りて窓のガラスの散々に破れ居る者多し蓋し惡戯の子供が人の  
 在らざるを窺ひ喜んで瓦礫を擲ち之を破る者なりと見ゆ家に因れば其か

ラス窓の一階より三階に至る迄美事に打破られたる者多し然れば随分惡  
 戯兒童の多き何處も同様の事なるべし

○問 西洋家の其壁も厚く扉も堅固にして締りよしとの事なるが若し他  
 人の宅を訪ふ時に於て取次を請ふに鈴にて鳴らす様な仕掛になり居  
 るや如何日本の如く頼むと云ふも不似合なるべし

○答 如何にも鈴を鳴らす様になし居る家もあり先づ英國の事を以て申  
 さば同國人の何事も不便利なき以上の古風を存するを好者にや茲に一種  
 の工合あり先づ中以下の通例の家に其入口の扉の前面に丁度手の届く  
 べき高さの處に手ごろなる相應の引出しの環の如き金屬垂下り居れり英  
 國にて之を戸敲(ドノアノツカー)と名く來訪する人の先づ此の環をカ  
 ヲくと鳴らして戸を敲くことなり然るときに取次人出で來るを通例  
 とす又此戸敲き方にて此の電信とか郵便とか是の來客とか區別自然に出  
 來居れり其譯稱を謂へば先づ電信ならバカチと高く一と聲敲くことなり



叩扉一  
誰可其  
便矣

又郵便ならばカマ〜と二た聲敲くことなり又通例の來客ならばカ、  
ツカツと初めを刻んで後に大きく一二遍敲くことなり右は甚だ便利なる  
區別にて何時の頃より斯る事の生せしにや先づ電信なれば下婢も急いで  
之を取りに飛び出さべく又郵便なれば左程急ぐにも及ばず又來客あらば  
取次人も餘り見苦るしき姿にての出でせ一寸前垂にて手よても拭き取次  
に出るの便利あり右の敲き方の規則の他の諸國に嘗て是なき様に存せ  
られ英國に限る様に見ゆ先づ何れの家も通例の右の戸敲の外に畧入口の  
横の處に鈴紐あり臺處向の小商人の來る時に之を曳き鳴すことなり例  
せば石炭屋青物屋牛肉屋杯が毎朝用を聞きに來るときは毎も此曳鈴を曳  
き知らずる事なり

右の曳鈴の近來にて稀に電氣仕掛を用ゐる者もあれども先づ通例の鉄  
線を延き其先に能く鳴る鈴を付けあるを通例とす斯る曳鈴の便利もある  
者を英人が古風に戸の前に戸敲き環を付けるも畢竟の不便利を感せざる  
限りの從來の古風をバ其儘に存するの氣象を察するに足れり又右の戸敲  
き環の素と外より戸を開閉する時又取手に用ゐたる者を戸敲きにも兼帶  
し居りしが次第に世と共に推移りて今の戸敲きとのみ變じて外面より戸  
を開閉する爲の取手の別に生じたるなるべし初めて英國に遊びし人の其  
當座右の戸敲の譜調を知らせして甚だ困却することあるあり何にとあれ  
バ其鈴の家因れば鳥渡目立たざる處に在りて之を見出すこと難く左れ  
バとて外面より頼むと聲をかける譯にも行かざればなり  
佛曼伊等の國々にて前記せる如く戸に戸敲の環あるの殆んど見當らざ  
る程の事にて此等の諸國にて通例曳鈴の設ありて之を曳き鳴らして取  
次を頼む事なり又前記せる如く英國にて一軒〜に往來に向つて入口  
を所持し居るが故に差支なければ大陸の諸國にて一階一階を一家族  
にて取切り居ることなれば先づ其家に至れば諸家族の共同に用ふる一の  
大門ありて往來に面し居ることなり然れば一先此大門を開け貫ひて然る



後に一階なり二階なり其訪のんと欲する所の家族の人口を又音のふこと  
 なり右の大門を開閉するにの一々門番が出で来るの勞を除き來客が門前  
 より取次を頼む曳鈴を引く時の與なる門番處より人の出で來らずして  
 便利更く門の戸を開閉する様に仕掛なしあり然れば外面より鈴を引き取次を頼  
 めば人の無きに其戸の自からバツリと開くことなり

○問 日本にて居酒屋と唱ふる如き酒店様のもも彼の地への之あるや  
 ○答 然り先づ倫敦を以て申さば丁度日本の居酒屋とも云ふべき場合に  
 居る酒店澤山之あり彼の地にて「バー」と唱ふることなり先づ酒店に至る  
 と假定め其往來に面したる店の一面の障てガラス張りにて外より見透さ  
 れざる様に艶消しガラス杯を人の丈の高さ位の所に用ひあり窓の上への  
 葡萄酒ビールアホイスキー杯の如き酒の名を一つ二つ横長く窓に張り付け  
 あり借戸を開いて内部に入れバ酒賣りの手代と客との間に机の如に仕切  
 りありて此の仕切りの卓子の丁度腰胸の間位の高さなり此卓子の上への

英人有  
 酒癖者  
 多矣雖  
 彼有耶  
 蘇聖教  
 不能防  
 之手

七八寸一尺計りの小き欄干のギボシの如き棒並立てり手代の客の需め  
 に應し此の棒を抑ゆれば卓子の内部にて夫れくの酒出る様になしあり  
 て之を盃と盛り卓子の上に載せ客に與ふ然る時の客の通例立飲をなし出  
 行くことなり故に酒店に至るとも徳利の如き物もなく又樽の如き物も見  
 へず唯仕切りをなせる狭き卓子の上に短き棒の並立つと見るのみなり故  
 に甚だ手綺麗に見ゆ其酒の種類程卓子の上の棒の立並び居る譯ありバー  
 と唱ふる居酒屋にての通例立飲みをなすことなるが又間への粗末なる椅  
 子を列べあるものあり夫れすらもベンチと唱ふる造り付けの長き椅子多  
 し一箇づ、別々に椅子を置くもの甚だ稀なり又酒屋の内にパブリック  
 とプライベートの二つに別ちたるもありプライベートの少し休其客の  
 入込みの立飲を厭ふ人々の這入る所よて鳥渡仕切りありて別構へをなし  
 又パブリックと云つる方の則ち手代の見る所にて立飲みをなす場所を指  
 すことなり



英國倫敦に於て此居酒屋の夥しきこと實に非常にて少し中央繁華の盛場に隔たれば到る所の町角の大なる店の通例酒屋ならざるもの稀なり人目立つ便利を計りしにや不思議に酒屋の町々の角にあることなり借一杯立飲みをなすも勝手なることなれば鳥渡氣注けをなさんとする者直ぐに立寄り一杯飲んで出来ることも自由なり去り乍ら先づ通例の酒屋に身元ある人の餘り立寄りざる方にて少し場末の町々に至れば中等以下の貧民の集會所の酒屋たるの有様にて甚だしきに至ては男女打交り土曜日の夜杯に於て押し合ふ程に此居酒屋の繁昌せざるものなし大醉の上クダを巻く唄もあり買物を片手に提げ乍ら眞赤なる顔色にて出来る娘もあり下等の人民に至ては此酒屋を以て已れ等の俱樂部ハウスとし集會所とし愉快を買ふの場所となし居る如く見ゆ

我國雖  
下等婦  
女入酒  
店飲之  
者極少  
德教之  
所使然  
一有可  
稱焉

右の酒屋にては「ビール」葡萄酒の勿論「ブランド」ビスキー」等渾ての酒類を賣が上に又た「ラム」チ「モン」ペア」等をも併せて賣るもの多

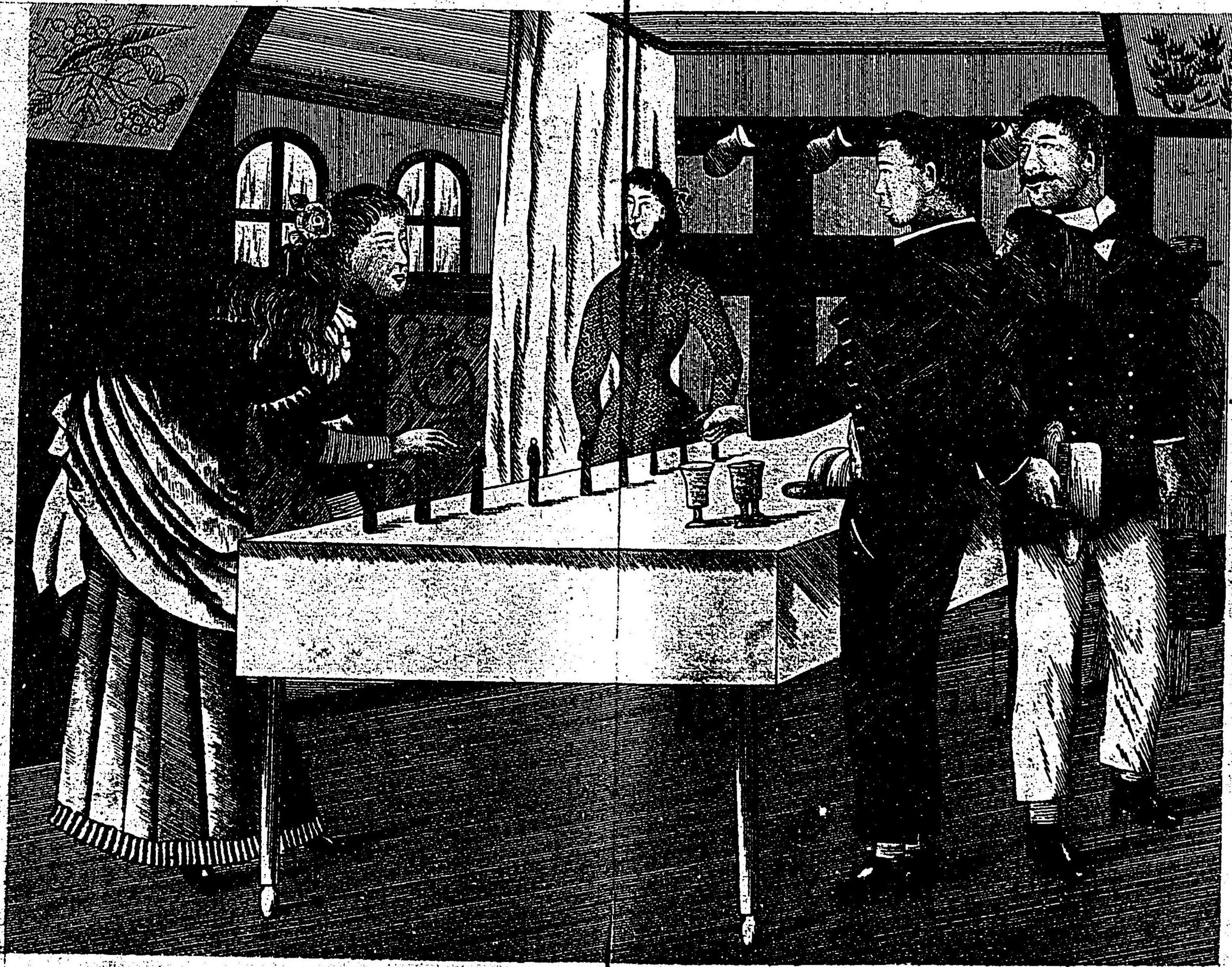


英國倫敦に於て此居酒屋の夥しきこと實に非常にて少し中央繁華の盛場に隔たれば到る所の町角の大なる店の通例酒屋ならざるもの稀なり人目立つ便利を計りしにや不思議に酒屋の町々の角にあることなり借一杯立飲みをなすも勝手なることなれば鳥渡氣注けをなさんとする者の直ぐに立寄り一杯飲んで出来ることも自由なり去り乍ら先づ通例の酒屋に身元ある人の餘り立寄り立寄らざる方にて少し場末の町々に至れば中等以下の貧民の集會所の酒屋たるの有様にて甚だしきに至ては男女打交り土曜日の夜杯に於て押し合ふ程に此居酒屋の繁昌せざるものなし大醉の上クダを巻く唄あり買物を片手に提げ乍ら眞赤なる顔色にて出来る娘もあり下等の人民に至ては此酒屋を以て已れ等の俱樂部ハウスとし集會所とし愉快を買ふの場所となし居る如く見ゆ

我國下等婦女店者德一所一稱  
 雖婦酒之少然有可焉

右の酒屋にては「ビール」「葡萄酒」「勿論」「ブランデー」「ビスキー」等渾ての酒類を賣が上に又た「ラム」「ウイスキー」「ジン」「ピエ」等をも併せて賣るもの多





圖之屋酒居敦倫



し故に夏分市中を散歩し咽の濁く節の之に立寄るも隨意なり  
酒屋のことを記する序に記し置べきの西洋諸國と云へる内にも羅甸人種  
と「トイトニツク」人種の國の其酒の好みも自から諸國押し均して相違あ  
るの不思議なることなり先づ佛蘭西、伊太利等の如き羅甸人種の國々の先  
づ第一に出来る酒の葡萄酒に定り居ることなり然るに「トイトニツク」人  
種ある英、曼等の國々に至れば先づ第一に出る物の「ビール」なり一方の重  
もなる飲物の「ビール」にて一方の重なる飲物の葡萄酒なり是れの著し  
き相違なり故に巴里杯にても良き店にて注文あれば如何なる結構の「ビ  
ール」も持ち來れども先づ通例の料理屋割烹店杯にて注文あれば「ビ  
ール」の甚だ下等なる物を出すこと通例なり又葡萄酒を攪き「ビール」杯  
注文すれば甚だ下品ある客人の如く思われ少しく差扣ゆると云ふ趣なき  
に非ぞ然るに「トイトニツク」人種の國々にては酒と云へば先づ「ビ  
ール」に取て掛るを通例とす葡萄酒杯の女より外先づ飲む者おしと云ふ顔



答者之  
言恐的  
中

付きをなし居ることなり後來日本の「ビール」國となるべきや將た葡萄  
酒國となるべきや今日にての些と「トイトニツク」人種の「ビール」國と  
なるべき様見ゆるが如何

前に記したる酒屋の景況の専ら英に限りたることにて佛蘭西日耳曼伊太  
利等にての別に斯る居酒屋様のものなし夫の珈琲ハウス（則ち茶屋と譯  
して可なるべきか）が此酒屋の役目を勤むることにて此點に至れば佛曼  
諸國の大に英よりも都合好きことなり如何となれば佛曼の珈琲ハウスに  
ての通例椅子卓子等それ／＼備はり居りて如何なる田舎と雖も之に立寄  
る時の緩りと休息も出來カルヤもひき將基もさし新聞をも讀み談話をも  
なし得らる、様は拵へあり故に一つの珈琲を注文するのみならず如何な  
る酒をも通例注文し得らる、ことなればなり然るに前記せる如く英國の  
酒屋の唯立飲みをなすを専らと拵へたるものにて佛曼の珈琲ハウスの如  
く緩りと寛いで休息するの仕組なければあり

特甚是  
以有如  
不嗜之  
觀

尤も英國にては珈琲ハウスなきにのあらねども佛曼の如き到る所に之を  
見ると云ふ譯にの行か極繁昌せる町々に於ては佛蘭西の珈琲ハウスを  
其儘に寫すも鮮からず其体裁の甚だ相似たるものあり總て是等の事物に  
付ては英國の佛國の仕組を學ぶこと少からず然れども尋常の町々にては  
最早固有の國風に從ひ無闇になし置くことなり

英曼佛共に珈琲ハウスにての料理をも兼るもの多し料理屋ならば通例一  
方を珈琲ハウスになしあると通例とす

○問 酒屋の手代は男子なりや女子なりや

○答 双方共に之あるやうに見ゆ尤も酒屋に限らば近年英國にては女子  
に出來る仕事なれば通例多く女子を用ふるものなり右の女子の天性物事  
に綿密なると又一つに其給金の賤きと由るものなるべし前に記した  
る酒屋の如きの幾んど皆な其手代の女子と云ふ可なる程あり尤も唯酒を  
局早晩注ぐのみのことにて別に休力を要する程の業にもあらねば給金の賤き婦  
聞於我  
國電信  
局早晩



募婦人  
技手又  
法英國  
者乎

人を用ふる方便なるべく又一つに婦人に對して萬事丁寧にして愛嬌  
深きにも由るものなるべく其邊にの定めて種々の意味もあることなるべ  
し斯く酒屋の手代の通例皆な女子なるのみならず町々の郵便局の如きの  
幾んど皆な女子のみと云ふも可なる程なり又た電信の取扱ひも同様なり  
右の故さらに斯く爲せしものにや詳らかならざれども兎に角其婦人の一  
ト手持と云ふの如き姿なるの目に留ることなり但し海外との往復を掌ど  
る中央大電信局或の倫敦市中七八ヶ所に設けある重立ちたる電信局等に  
ての女子を使ひ居らざる者もあり然れば總休に婦人のみとの云ひ難けれ  
ども先づ町々の電信局丈にての婦人多しと云て可なり

○問 彼地にも日本の如き菓子屋あることにや

彼多以  
滋養物  
製之我  
多以不  
消化物

○答 然り随分菓子屋も多きことにて何處も同じ菓子屋の重みに子供を  
其花主となし居る様子なり先づ菓子屋にて賣る品物の種類を擧ぐれば第  
一にビスケット(ミルク入り或の生姜入り)厚焼薄焼幾種類もあり又のナ

製之由  
是觀之  
日本人  
身體之  
虛弱豈  
非偶然  
也

コレートを以て製したる者又ミルクを交へ子供に宜しき様に彩色したる  
生姜等の類あり是等の日本にて云へば都べて先づ干菓子の部類に属する  
ものなりチョコレイト珈琲ミルク入りの菓子の形の日本の金米糖より少  
し大なる程の粒にて種々の形ちに爲せしもの多し又此外に日本にて蒸菓  
子とも云ふべき種類の者あり去り乍ら日本の蒸菓子の如く小豆と云へる  
ものを一切用ひざることなれば其蒸菓子と云ふも玉子小麥クリームを材  
料とし軟かに之を拵へたる物にて先づ風月堂にて製したる軟かなる西洋  
菓子と相似たる者なり

去り乍ら菓子屋の最も得意なる商賣の婚禮の節に用ふる一種の婚禮菓子  
と名づくるものなり嘗て一とたび記載したる如く英佛よて婚禮の節に  
必らば婚禮菓子と名づくる一種の菓子を飾り付ることにて其必要なる事  
恰も日本の儀式に島臺の少く可らざるが如きあり右の菓子の其價次第に  
て如何様にも大小あることながら先づ通例の日本のカステールと生姜入



寡婦人  
技手又  
法英國  
者手

人を用ふる方便利なるべく又一つに婦人に對して萬事丁寧にして愛嬌深きにも由るものなるべく其邊にの定めて種々の意味もあることなるべし斯く酒屋の手代の通例皆な女子なるのみならず町々の郵便局の如きも幾んど皆な女子のみと云ふも可なる程なり又た電信の取扱ひも同様なり右の故さらに斯く爲せしものにや詳らかならざれども兎に角其婦人の一ト手持と云ふが如き姿なるの目に留ることなり但し海外との往復を掌とる中央大電信局或の倫敦市中七八ヶ所に設けある重立ちたる電信局等にての女子を使ひ居らざる者もあり然れば總休に婦人のみとの云ひ難けれども先づ町々の電信局丈にての婦人多しと云て可なり

○問 彼地にも日本の如き菓子屋あることにや

彼多以  
滋養物  
製之我  
多以不  
消化物

○答 然り随分菓子屋も多きことにて何處も同じ菓子屋の重みに子供を其花主となし居る様子なり先づ菓子屋にて賣る品物の種類を擧ぐれば第一にビスケット(ミルク入り或の生姜入り)厚焼薄焼幾種類もあり又のナ

製之由  
是觀之  
日本人  
身休之  
虛弱豈  
非偶然  
也

コレトを以て製したる者又ミルクを交へ子供に宜しき様に彩色したる生姜等の類あり是等の日本にて云へば都て先づ干菓子の部類に属するものなりナユコレト珈琲ミルク入りの菓子の形の日本の金米糖より少し大なる程の粒にて種々の形ちに爲せしもの多し又此外に日本にて蒸菓子とも云ふべき種類の者あり去り乍ら日本の蒸菓子の如く小豆と云へるものを一切用ひざることなれば其蒸菓子と云ふも玉子小麥クリームを材料とし軟かに之を拵へたる物にて先づ風月堂にて製したる軟かなる西洋菓子と相似たる者なり

去り乍ら菓子屋の最も得意なる商賣の婚禮の節に用ふる一種の婚禮菓子と名づくるものなり嘗て一たび記載したる如く英佛よて婚禮の節に必ず婚禮菓子と名づくる一種の菓子を飾り付ることにて其必要なる事恰も日本の儀式に島臺の少く可らざるが如きあり右の菓子の其價次第にて如何様にも大小あることながら先づ通例の日本のカステラと生姜入



我以棘  
祝魚為  
以菓子  
為祝品  
品雖異  
其意同

りのビスケットを混濁せる如き物質にて其表面の一面に白くミルク交りの砂糖を塗りて拵へるが多し中等士君子の家ならん此の婚禮菓手に五拾圓も百圓も費すこと珍しからぬ事なり而して婚禮の濟し翌朝花嫁が手から此の菓子を裂き親類朋友に夫れく進物とあすなり右は縁起を祝ふ菓子にて貰ひ受たる方にて之を珍重し賞玩することなるが多數の人々に分ち遣すことなれば其一個宛の切れの誠に小さなるものなり時に因りては幅一寸長さ三四寸位なるものを分配せらるゝことも珍しからず斯く儀式に大切の菓子なれば菓子屋の重なる當込みの則ち此の菓子もあることにて通例相應の菓子屋の店頭には必らば美事よ造りたる婚禮菓子の二つ三つも並べあるを見るなり

通例の家にては晝飯或は夕飯菓子を食することあり是等の菓子に通例自分の臺處にて造る者多きことなるが又時としてはカステール様のものを菓子屋より買入るゝこともあり去り乍ら菓子屋の得意の先づ第一に婚禮



欠

MISSING



○問 彼地にてホテルと稱ふる旅舎の有様の如何諸國共に其体裁の同様なりや

○答 通例ホテルと稱ふる旅舎の諸國とも其体裁先づ同様と云て可なり是に上中下幾等も階級あり上等の分の非常に高價にて下等の分の又た非常に廉價なるもあり今ま世界第一繁華の地たる巴里にて最上と稱するグランド、ホテルの有様を畧記せば其他の推て知るべし右の大ホテルの五六階の高さにて其間敷の三四百の間なるべし食堂の第一階即ち尋常の平地に並べる間にありて食事の時刻に客人皆な其所に打揃ひて食事を爲すものとそ又低き程部屋も上等にて二階三階と高くなる程其價も廉なり又低き部屋程其天井高く位置の高くなるに従ひ部屋くの天井も亦た低く屋根に密接する最高頂上の部屋杯の日本家の低き天井と殆んど同様なるものあり左れば大ホテルにても其部屋次第にて直段の種々様々なり先づ四階位の處にて十五層内外の一十間にて一日廿フラン(四圓許り食事の



無論一切別なりなれば其の低き三階二階の部屋く、此より次第に高價となり又天井の方に近づく程從て廉價となる

ホテルの先づ部屋代丈を拂ふを通例とし食事の爲すも爲さざるも客人の自由なり食事の附きたる部屋とて別段に之れなし右の大ホテルにて夕飯一食の價の八フラン(一圓六十錢許り)なりさと覺ゆ晝飯は此の半價内外にて朝飯の又之れより廉なり然れども若し三度の食事を悉く食堂にて爲さば多分十一ニフラン(三圓三四十錢許り)にて済むべし尤も右の無論食事代のみなり又此のホテルの食堂なる者の料理屋と同然なる有様にてホテルに止宿せざる人にて此食堂にて食事を爲し得ること恰も料理屋に行が如し又食堂には各種の酒ありて其の註文に従ひ之を持來る尤も酒代の食事の外に之を拂ふなり食事の後、付の給仕に通例廿錢許りの心付を與ふ是等の給仕の總て黒の禮服に白襟を附け一同に立派に装はひ居れり食堂の最も見事にて身元善き客人なれば夕飯の時の通例黒の禮服(燕尾

服)を着けたるもの多し食堂の内に五行或は六行に長さ大食卓ありて銘々此に就くとなるが客人一名食堂に入り來る毎に禮服用の給仕直ちに之を案内して其の着く可き席に着かしめ客人の食卓に密着して眞直に立ち居れば彼の案内せる給仕と後方より椅子をあてがひ客人の悠然と尻を据れば丁度好き工合に自然と腰掛らる、なり然れども未だ是等の事に經驗あらざる時の茲等の躰のユナシ甚だ不落着にて直に田舎者と見て取らる、なり

又た百名前後の諸國入りまじりの客人が思ひく、に食卓に列し居るも其行儀肅然として妄暗に高聲を放ち調子外れの談話を爲す者も無く同行の客人同志互ひに談話を爲そさへ極靜かなる調子にて満堂何となく物柔らかに品よく打上がりて見ゆる程誰れ令するとも無く一同の作法行届き居るに余等の驚き入りたる所なり又た其の料理の風味も甚だ好きとなるが献立よの季節に因りて相違もあり繁煩しければ畧すること然るべし但



し朝飯晝飯杯の時ハ男女の客人共に夕飯の時程食堂に列そる事に意を用ゐざるなり

去りなから食堂に赴かせして自分の部屋に食事を取り寄するとも勝手次第なり然れども部屋に取り寄する時の其代を一割以上高く取らるゝことなり是の部屋は持運ぶ面倒の賃錢を拂ふ譯あるべし又一ト品ニタ品を擇びて註文をするも客人の自由なり

○問 其外ホテルの有様の如何

○答 是迄述べたるハ何れも巴里のグランドホテルと云へる客舎の例を擧たるとあるが英曼伊諸國のホテル共に先づ大休は斯の如し極上等と極下等とを格別とし先づ通例八疊或ハ十疊許りの三階若くハ四階にある部屋にて寢臺附の者なれば五フラン又ハ四シリング(一圓内外)を通例とし又たヨーフルドと稱する夕飯一ト揃の食事にて一圓内外の價格を通例とす去りながら場所柄次第にてハ非常に何事も高價なるあり又非常に廉

愛自國之情彼我相同

價なるもあり又た處によりてハ部屋の蠟燭代を別に取るものあり給仕の召使代を別取るものありて甚しきハ一本の蠟燭は一フラン(廿錢許り)を取るものあり余等嘗て英人佛人と路伴となり共に客舎に投じたる事ありしが其夜種々の物語の序に英人が例のお箱なる國自慢にて英國程客舎の便なる國ハ無しと言ひしに佛人の大よ之を笑ひ余ハ英國のチャーリントンコースなる停車場附のホテルに投宿せし時所用ありて小使に一封の書翰を帳場迄持行しめしに翌日の勘定書を見れば是が爲め廿五錢取られたることあり實に驚く可き高價なり佛國には決して彼様なる事なしと言ひしかバ英人の負けぬ氣になり頻に佛國のホテルの高價なる例を擧て口論し大笑となりしとあり又た或人が米國のホテルにて明日の天氣を氣遣ひ今夜の霽れ居るや否やを小使に見來らしめたるにアトにて其代を三十錢取られたりと言へる笑話ある程なり實に何事もウカとい命せられ余等か紐育にて食指許りなる大さの細細二三丈を買ひ來れと命じたりしに二



洵是經驗之賜

圓以上を食られたる事あり然れば通常の物品の外先づ容易に用る難き方なりと知るべし又英國の大陸案内書中に旅客の石鹼を必らも用意す可き旨を載せ一ト切の石鹼にて二三十銀以上を食らるゝの珍しからむとの注意を爲しありしが如何にも右様の事甚だ多し注意すべきとなり世事の經驗を積み積む程工者に成り行く者にて余等の如き氣の利かぬ者迄も國々を經廻り旅慣るゝに從て自然何事も狡猾に立ち働く傾きとなれり然れば我が懷中の温度により懷の暖かなる時に大盡顔を爲して最上のホテルに泊り込み少しく其冷かなる時の面目に關せぬ迄を界として成る可く廉價のホテルに投宿せり今更後來の旅行者の爲に一二の傳授を畧記し置くべし

外見の体裁好くして實際の經濟なるの上等のホテルも止宿して珈琲店の食事を食ふを第一とす珈琲店其他料理屋に至れば通例一ト品にても二ト品にても已れ好み品の品を擇み多量にも自分の欲する丈注文を爲すとを得然

余欲早晩施此傳授於實地

れバホテルの食堂にて滋味厚味に任せよ其時左程欲しからぬ料理を數多く是非共あてがはれ是に高價の代を拂はんより自分料理店に往きて己れの腹加減に合はし隨意の品を食することを便利なれ料理店なれば注文次第にて我が欲しき品を一品なり二品あり擇て食するとも出來從て其の甚だ廉なり又外國人同國人に對して己の宿所を名のり或は來客杯ある節も上等のホテルなれば面目も甚だ宜く萬事に都合なり故に好きホテルの相應の部屋に投じて料理屋の食事を爲すの甚だ便利なる不案内の人は之に反し食事をバ其ホテルにて爲し却て部屋をバ頂上に近き極廉ある所に定むる者も尠からむ是の餘り感心せぬ仕方なり

○問 然れば先づ經濟上より云ハホテルの食堂にハ出てぬ方なりや

○答 然り然れども言語も全く通せざる國に至りし時杯ハホテルの食堂なれば黙し居りても出す丈の物の持來るが故無造作なり左るに若し料理屋杯ハ行きしとて運來る料理の名もコッハ分らむ勘定すら頼すくの出來



難ければ斯る場合及び婦人連の旅客杯の餘義無くもホテルにて食事を爲さねばならん然りながら余等とても英語の外佛語なり伊語なり曼語なり僅かに十五か二十位の外の解し得ざる身なりしかども猶は大膽にエマカして時々は料理店にマダレ込み食事を爲したるにあり萬事に敏捷ある歐洲人の事ゆゑ先づ大抵の手具似にても此方の意味を悟り呉るゝとなり況んや此方も知た振を爲しウ井とかヤアとか生意氣に其の國語を吐き乍ら料理屋の料理の表(日本なれば「板」と云ふ處なり)を大抵に指す時の給仕等心得て持來るとなり又各品の直段の數字にて記しあるが故に別に欺るゝの憂も無し唯だ其國々のマアソとかフアンとかの價格と數字とを知り居れば例の表と見合せて充分悟り得べし又料理の名の國々にて無論一樣にのあらねども諸國共に多くの都びたる佛語を用ゐ居るとなれば先づ幾分の悟り得可きなり又英語と曼語との如きの甚だ相似たる者多きが上に其間に交じり居る外國出の詞とての亦た多く佛語なれば日耳曼にての余

等も料理の献立の大抵間違のぬ方なりしが唯だ一度可笑しかりしハケトスと書きしものありしを是の英語のケースに似つかのしければ多分菓子なるべしとて誂へたるに彼のチース出て來りしに閉口したるとあり然れば折々の斯る間違の出來するを免れせ  
 開け切りたる故き國々のとなれば歐洲の旅行の何事も痒き所に手の届く如くに順序整ひ居り此上も無氣樂なるにして亞米利加杯と比すれば雲泥萬里の相違ありし如し余等が歐洲旅行中に常に毛布包と手カバン杯貨幣之の類兩三個を携へ居りしが別に荷と云程にもあらねど若し己れ持運ぶと力無脚而能走すれば随分厄介なるとあり左れども旅行中余等の曾て此の厄介を感じた萬里鳴呼貴哉るとなく先づホテルを出立する時の小使が之れをホテル持の馬車に載せ

客人と共に停車場迄送り來り停車場に着すれば停車場附の荷持人足出て來りて之を受取り客人の乗込む瀟車の處迄運び呉れ又の荷車にも載せ呉れるなり又ライオン河の如く風景を旅客の眺むる地方にては少し心付を澤



山遣のせべ彼の荷持人足の此方の窓が景色を見るに宜しとか彼方の窓が宜しとか教へ呉れて其處に座を定め占むる世話をさへ爲そ者あり扱瀛車留まる所に至れば又其停車場の人足出來りて此方の指圖に従ひ之を其の停車場に客待を爲し居るホテルの車に運び載せ此方の唯アレコレ指圖するのみにて空手を振りつゝ、此に乗込むなり又船に乗込むる船より下るも皆な同様の手續にて自身に荷物を扱ふの面倒の曾て之れ無く幾百里の長程を旅行するにも實に自由自在にて何の不便もあらねば又た遠方の旅客と見て覗ぎ取る如き無作法を働く徒も少く(決して其徒無きには非ぞ)流石の故國の故國なりと其萬端の順序の行届きたるを稱したるとなり

○問 有名なるアルプス山の景色の如何

○答 世人の知る如く此の山の佛伊兩國の境に起伏して北のかた澳地利に奔り又茲に澳伊二國の境を爲し居るなり古代に於て良將ハンニバルが兵を援きて羅馬を掩撃し來りし時此の山脈を越え又た那翁一世が伊太

利を侵す時も間行此を越えて不意に敵の背後を搦きたる等よて歴史に有名なる故跡となり居るとなり人力能く天工を制する第十九世紀の今日に生れたる我々の左したる苦勞も無く安々と此の巍峨たる山脈を越すとながら以前の定めて一の大難所たりしに相違なしと思はる余の佛境より瀛車に乗り夜を冒して此を越え翌朝伊國のトリノと云へる地に着したり佛境の方なる山麓にかゝりし夜八九時の頃なりしが伊境よて平野に降りし排曉なりし最も瀛車の此の山脈の低き所を彼方此方と辿り廻りて行く上よ此の山脈の厚さの非常に厚さが故にもあれと兎に角斯く時間を費その以て此の山の大きさを察するに足るべし山嶺なる伊、佛、兩國の税關にて荷物を改めし夜半十二時の頃なりと覺ゆ時方さに四月の初めなりしが山上よての處々に積雪の皚々と積り居るを見たり昔しハンニバルが亞非利加より數多の戦象を率ゐ來りしに此を越る時寒氣に堪へせし象の多く斃れたりしと云へるも虚説よのあらざと思ひたり日本の帆船の



如我國  
山岳峻  
峻焉得  
瀛車上  
之其不  
甚峻絕  
也可知  
矣

胡にや國內の山脈は大抵馬の脊を立てたる如く上り下りの急なるも山脈の厚さの甚だ薄し左れば日本の諸山脈より推想せる考へにてアルプスの高山の其の斜面も定めて急ならんと思ひ居たりしに左の無くて山腹の非常に厚く山巔に至る迄左程険しとも思ひぬ程に其勾排甚だ緩かなり又谷々の勾排も頗る緩にして饅頭の如き圓山を上りて下り下りての上りする内に最高の巔に達する如く覺ゆ左れば谷と云ふも日本の如く狹隘峻削なる者には非らずして實に陵夷なるものなり成程流石に大陸の山脈の氣象の斯る者なるべしと始めて思ひ當れり同じ高山大嶺と云ふも大陸の者の薄べらの急なる者に非ざるなり  
扱山嶺より山麓に至る迄に處處に陵夷なる地面あり概して森林少く諸山と云ふも可なり民家も其間に散點せるか何れも山中の事なれば二階家の少くなく恰も日本の一軒立の平屋の百姓家に髣髴たりき唯だ旅客の眼に異体を見ゆるの民家の屋根瓦なり此邊の一体に煉瓦杯を用ゐるを謂ふ石片

隧道之  
多知丘  
陵之多

を以て不規則に屋根の上に積み重ね居れり其の石片の薄くへがたる三四尺許りの色々の形の者あり此邊の山中に斯る石片多しと見ゆ此の瓦の外に都べて伊佛の民家に異なる箇條なし  
佛境より山巔迄も随分洞道多しと思しが山巔より伊國の山麓迄の又一層洞道のみにて忽ち明忽ち暗出しかと思へば入り入りしかと思へば出て幾の方七八合迄の處に幾と唯だ洞道續きなる心地せり  
既にして瀛車山下に來り瀛望空濶の郊野に出でたり地圖を案せれば伊國の西北境の都て此アルプスの山脈に抱擁され又少く西南の方に至れば直ちにヘラノスの山脈あり此兩山脈の間に左程の餘地あり其思ひざりしに實際此に來り見れば平原蒼々沃野千里とも云ふ可き地形にて畎畝相接し原野相聯り處々に桑樹多く村落所在に散點せり斯の如く空濶坦遠なる地形の恐くは日本に會て見ると能はざるべし流石に舊國程ありて原野杯の開け盡たる有様入力の加はり居る有様の又た一ト入に眺めらる伊國



が二三十年を出でせして早く強國の間に列するに至りしも決して偶然に  
の非ず亦其國本の在る所を想ふべし

○問 倫敦の氣候の如何

○答 倫敦の位置の日本の函館札幌よりも尙一層北の方角にあるとなれ  
ば其寒氣も亦非常な強かるべき筈なり然るに其寒氣の東京より稍々少し  
く寒しと云ふ位のとにて別に甚しき相違ありとも思ひませ昨冬の如きの五  
十年來未曾有の寒氣なりしと彼地の人は云ひしなれども左まで堪へ難き  
程との思ひざりし又一昨年冬の寒氣の東京よりも稍々輕き方に覺えた  
り去れば其地の北に寄りたる割合に同地の寒氣の輕きと明かなり一説  
にて大西洋の熱帯にて炎日に照り込められたる潮流が其温氣を靡らして  
英國の西岸一帯に衝き當ると恰も大平洋熱帯の潮流が日本に於けると同  
じく爲めに斯く緯度の割合より温き氣候を生むるなりとも謂ひ又或の同  
地への霧多く冬分の常に霧を以て同地を覆ひ包むが故に其寒氣割合に輕

常青郷  
之名實  
不嘘

きなりとの説もあり又英國を指して(常青郷)と名けし人もありしと聞く  
是れ場所に因りての冬分も草色蒼々として日本おとの如く黄ばみ枯る、  
このなき者多きが故に斯く呼べるありとも云へり如何にも處々の公園な  
どを散歩し見るに日本の芝に似たる秋草の一面に青色を帯びて其儘に年  
を越す者比々皆是なり尤も其中に少しの赤バみたる枯葉も見ゆるとに  
て固より春夏の初めの如くに色合勻なふて好くあらざるなり然れども  
之を日本の芝原其他の草叢が秋冬の際に全く黄色に變じ盡す者に比そ  
れば甚しき相違あり斯く草の枯れざるも一の寒氣の甚しからざるに因る  
者にや

因に云ふ右の日本の芝に似たる秋草の芝より一層愛すべき者にて芝の其  
葉硬く尖り居るに此草の其葉柔やかなる事恰も俗間にて稱ふる離草の種  
類に似たり此草を日本の庭園或の公園杯に移し種なば如何と思ひし事も  
ありしが或人の話に嘗て之れを日本に移したるとありしに氣候の温かに



秋草之  
成長恐  
非氣候  
之溫而  
因土地  
之膏腴

過ぐる故にや非常に長く生延びて茫々たる草原と變じ英國の如く短く細  
やかに愛らしき芝生の用をばなまざりしと云へり或の左もあるべき乎  
此の如く寒氣の思の外に輕けれども唯だ其寒き時節の永く續くに驚く  
べし嘗て記載したる如く先づ概して言へば一年十二ヶ月を冬とし残り七  
ヶ月を春夏秋に分つも可なり斯く冬の長さ處なるが故に又其の手當も殊  
の外宜しく家、座敷、窓等の造作も又馬車、乗合馬車等の造作も皆多くの冬  
期に對して其の禦ぎと専らに工夫せるが如く見ゆ始めて彼地に着せし時の  
夏の初なりしかば是等の造作向都べて如何にも不細工に見え何とか今少  
し空氣を發散流通する趣向のなきやと私かに笑ひ居たりしに追々寒に向  
ふに至り始めて扱ひと思ひあたりしなり窓戸の締り都べてキチ／＼と行  
届き室外と室内との恰も別世界の如く爲しある風の最も冬向に適當せる  
者なり斯く織りよき家に在て煖爐を焚き家内打寄りて冬籠りをなすの又  
た一種の趣きある様に見受けたり斯くて歳の初め四月頃より漸々と温氣

我所謂  
春宵一  
刻價千  
金者彼  
當謂夏  
曉一秒  
價千弗

霧多空  
氣亦當  
多含濕  
氣然不  
生鬱何  
其異邪

を生じ是より世間も次第に春めき六七月より八九月にかけての人皆之を  
遊觀の好時節とし或の諸國に旅行し或の海邊に遊び杯して娛しむことな  
り余等の常に日本の氣候の寒温、中を得たる時節多く又た晴天多く最も人  
体に適當せる好土なるを誇り居るとながら彼地の人の亦た英國の世界第  
一の氣候たるを誇り居れり是も亦た銘々國自慢の一証なり日本に來り  
し英人杯の倫敦を優れりとする口實を聞くに曰く日本の國にの常に濕氣  
多し其證據の品物に黴を生じ從て腐朽するを速かなり左れば金屬なども  
錆を生ぜると甚だ多しと此點の如何にも一理なきにあらむ倫敦にては如  
何なる時節と雖も曾て黴を生ぜざりしなり理髮道具の如きも日本に持ち  
歸れば其の一面に黴を生ぜると二三ヶ月の内に幾度あるを知らせ始めて日  
本の空氣に濕氣多しと云へる語も謬りならぬに思ひ當れり如何にも彼國  
の空氣の寒き時多きが故に熱氣に蒸されて濕りを含むと少なく一体に乾  
燥ある如き心地せり斯れば其邊の彼地の空氣が優り居るやも知るべから



老然れども唯だ倫敦にての快晴の天氣殊に少なく早朝より晩方まで蒼々たる碧空を見るを得る日一年の中幾ばくもなかるべしと思へる、程に曇り勝ちにて又た其陰晴の變化の劇しき事の言語同斷なり

○問 倫敦邊にて春花の景色等の如何

○答 六七ヶ月の間花の勿論木の葉さへ見となき世界より自然に暖かなる春期に向ひて彼處此處に種々の新芽を吹出し花さへ色々に咲はじむるを見る時の坐るに故園の情を生むるなり余等の如きは是迄外國に留學したるとも少く稀に旅行すればとて廣くもあらぬ日本内地を東西に奔走するのみにて瀛車瀛船の便ある今日にての左程に懷郷の感の出たるとあかりしに其身を萬里の外に置き親戚朋友等も少き有様にて節物の移り代りるを見るときに實に一種の感を生むる者にて支那の詩人杯が懷郷の情を述べたる境界に思ひ當れり左れば一日ハイパークを散歩せる折不圖下の如き拙作をも得たることなり 槐園日暖百花明 綠葉深邊有鳥聲 萬里假冷

後一聯 春相似、滿降草木不知名

彼地の人の全体に草花を愛して木の花を愛せむ彼地の人が歌或の詩に述ぶるの多く皆な草花にて木の花の誠に稀なり斯る好尚より生せしによる者か木に咲く花よして麗しき者の甚だ多から老然れども日本同様の花の絶て無にもあらざるなり先づ春頃に開く桃の花杯の全く日本と相違なし又同じ頃、櫻の花も開けども日本の如く美事なる者にはあらむ元來彼地の人の櫻に對するの唯だ其實を珍重するに在る者なれば其種類の擇む從て日本とは趣を異に故も同じ櫻の花にありながら日本の美事なるに比較すべくもあらむ去りあがらんとて其満開の頃の猶は觀處あり此に對それバ何となく故郷なつかしく眺めたるとなり又梨の花の畧は日本と同様に遠く望めの皎然雪の如く見ゆる程堆かく植付けたるも少からむ余等が春晩に佛國の南境より白耳義に旅せし時の方さに花時よして櫻花梨花枝を交じへ村落の間に散點せる景色の日本の田家に異ならざ



るの心地したりき

余也丹 波人遊 東都一 日見乾 栗於市 半發懷 鄉之情 今西游 身在萬 里天涯 之地而 見故鄉 之物其 感情果 幾許邪

此の如く櫻花、桃花、梨花の類の先づ日本と稍や同様の者を観得るとなれども獨り梅花に至ては曾て其似寄りの者さへ見懸けたるとあらざりき梅の元と寒さに耐ゆる木の如く思はるれども彼地の氣候にては尙ほ適せざる譯にや但た春晚に伊太利に遊びし折一夕客舎にて食堂に入りし時卓上の花瓶に種々の花を雜じへ挿みある中に料らむも忽ち一枝の梅花の款歪として奔出し居るを見たりしが如何にも久しふりにて朋友に面會せし心地せるか上獨旅の事にしあれば分けて懷郷の情に堪へざりしなり左れば同國にハ必き梅花あるべしと思はる當時看出したるハ確かに梅花に違なし  
倫敦ハ暴風雨も少あからぬ事なるが平生の風力も亦た随分劇しき事多く東京杯に比すれば悪き天氣がちの方あり去り乍ら人智の進むに従ひ諸般の理化學益々開け爲めに社會に受くる所の助けの大あるとハ毎々驚くと

なるが英國の新聞紙にハ大概例刻に氣象臺よりの通報ありて數日サキの暴風雨の調査を前以て預記するなり亞米利加の大西洋海岸より今ハ愛蘭の何の地方に吹廻り居り何日頃ハ英蘭の海岸に來るべし等一々測量屆き之を新聞紙上に掲ぐるなり尤も此の通報通りに行かせし意外に荒れの少なき事もあれども亦通例幾分か其驗ハあるなり左れば余等が旅行するにも西の方よりの天氣ハ多く此通報を目當てに晴曇を計りし程なりし又明日の天氣の有様を今日より世間に豫報するもの諸國に其例少からせ大陸の諸都府の中にては氣象臺より翌日の天氣の概略を日々掲げ示めすための懸板を懸け居たるをも見し事もあり  
○問 人家に近き鳥類即ち鳶、鳥、雀杯ハ英國も日本と同様に多き事なるや

○答 如何にも雀の如きの其澤山なる事日本と同様あり又其毛彩杯も一見して同種類の者たるを知るべし但た例の烟の爲めにや倫敦の雀ハ黒く



燻ばり居れり日本人打寄りて言語容貌等の事に及ぶ時に毎ねに鳥類就  
 中雀などの日本も英吉利も其語格は同様と見へ少しも啼聲の變らぬ不  
 思議なり雀杯こそ日本の者を倫敦に持行きて其仲間に入る、も言語容貌  
 すべて他國の者との思われざるならんとて打笑ふたる事なりき鳥、鳥の  
 倫敦市中にの殆ど見懸けを云ふも可ある程なり是の倫敦のみならず巴  
 里、柏林、も同様なりしと覺ゆ但し倫敦より少しく郊外に出れば鳥の體分  
 澤山にて其の聲、形、ともに総て日本の者に異なるとなし然れども鳥の方  
 の英國にての不思議にも見當りたるをあらま邊鄙の小都回などに至らば  
 時として見懸ることあるべきやも知らざれども先づ倫敦近傍の都府にて  
 の注意したるに曾て見當りたると無かりしなり察する所市中に不潔物多  
 く或の空地などありて鴛、鳥、の食物となるべき者或の其家となるべき場  
 所の多き都府にあらざれば鴛、鳥、も自然栖まる難き者と見ゆ若し東京の  
 市中が倫敦、巴里、杯のごとく掃除行届きて不潔物少なく鴛、鳥、の食料絶  
 知也  
 市街之  
 清潔可

無とならんには是等の鳥類の強て竿を以て逐ひ廻らせども必を都府よ  
 り以外の地に移り去るとなるべし又今日の如く市中一面不潔物多き時  
 代に在りての鴛鳥の無數に栖遊して是等の汚穢を掃除し異るも亦た必要  
 とこそ云ふべけれ  
 鳩の之を飼居る者處々に少らま就中寺院にの多く之を飼置ける様見受け  
 たり又尋常の家への唯だ樂みにする譯にや又の何等かの必要あるにや兎  
 に角市中に飼居る者を段々見かけしあり  
 ○問 倫敦の雪景色の如何  
 ○答 函館、札幌、よりも北の地位なるが故に倫敦の雪も多かるべき等の  
 處甚だ少あし如何にも冬に至れば兩三度の雪の降るとのなきにもあらね  
 ど先づ東京位の者にて非常に深く積りしとて同緯度の北米加拿多或の歐  
 洲大陸日耳曼境杯との勿論比較にならぬ由なり一二尺以上積れば珍しき  
 者と見へ場末にての小供若者などが相集りて雪抛をなし樂しみ居れり又



此若者共が輿に乗じて往來の人に雪丸を抛つけて其れが爲め警察署に喚出され罰金を課せられるなどの話随分新聞紙上に少からず又たイツでも雪が屋根に積りありては其融け汁始終シタ、リ落ちて敷石杯を汚すが故其の不都合を避くるため家々にて多く屋根敷石等の雪掻をなすなり左れば少雪降りの後の貧民が雪掻の道具を擔ひ家毎に御用のなきやと尋ね歩るく人手少なき家の之を呼び入れて庭前又ハ屋根杯の積雪を取除かしむるなり

○問 自轉車にて世界を一周すると云へる名高き旅客ステーション氏の不日東京に來着すべき筈なりと云ひ又た第二の自轉車一周客マルトビー氏も既に此程印度コロムボ迄到着したりと云ひ亞非利加のモロツユ國王迄宮中に自轉車と斷ふに至れる由續々貴社の紙上にて拜見せり左すれば自轉車の今日西洋一般の流行物と相見ゆ彼地にて自轉車の有様の如何なりや

○答 倫敦杯にて市中を乗り廻りし居る者の有様より記さんに彼の肩の

摩れ合ひ轂の響ち合ふと云へる中央盛り場なる市區内の通りに素より斯る慰み半分の者の横行すべき餘裕も少なければ市區内の通りにて之を見掛るを甚だ稀れなる方なれども少しく往來の疎らなる場末又ハ公園空地、などにてハ随分自轉車を馳せて乗り廻り居る者をも多く見掛るなり自轉車にハ上中下色々の種類あれ共概するに日本杯にて見掛るものどの其の精粗好悪甚だしく相違せる様なり第一ハ其輪の幅極めて細くして一寸見たる所電信線の針金位の太さあるか無きが程にて又た其の輪齒と名づくべき輪の外邊を成せる圈金も甚だ薄く唯だ之を一目したるのみにて既に左も輕快らしく見ゆるなり加ふるに車輪の外邊ハ大抵皆な厚さ我國未エムを以て縁とりわれバ其の彈力にて車輪と地面との激觸を柔かにし乗多見双手にハ至て安易なる趣向なり又た其制も種々あり日本に在り來れる如く車座自轉

後ろに小輪二個前に大輪一個の三輪車又ハ前後に小輪と大輪と各々一個宛ある二輪車等の勿論又た兩人相乗の双坐車あり此の双坐車ハ大抵三輪



付にして前に一人後に一人乗る可き形の者あり又右に一人左に一人乗る可き形の者あり午後より夕方にかけて公園杯に至り見れば彼の双坐車に朋友にや或の將來の婚約ある仲間にや年若き男女相並びて打乗りつ、平坦の如き廣き路を輕快なる輪にて音をもさ、モアチヲユチヲと乗り廻り居るもの多くを見受けるなり尤も是等の都べて中等以下の者共にて無論上等の人々にあらず又相乗車にて其輪を踏み廻すの勞を取り居るもの皆な男子にして女子の唯だ左右前後四方の景色を打眺めながら少しも手足を動かさずして平然と驅り居るなり

此度ステーション氏が乗りて世界を一周し居る自轉車の直徑四尺許の輪なりと云へば先づ余等が彼地にて通例見掛けたる尋常の大きさのものなりと思へる先般以來屢々我社の紙上にも譯載せるが如く日耳曼にて既に之れを軍陣傳令の事に試用し佛國にて之れを郵便送の事に試用し何れも好結果を見たりとのとあるが斯くまでに至りたるは決して一朝の故に

あらず西洋にての夙より自轉車の流行甚だ盛んにして倫敦などよの現に自轉車雜誌と稱へ自轉車に關する丈けの有らゆる事柄を記して定時刊行する専門の雜誌も之れある程なり亦た以て其流行の久しく且つ盛んなることを知るべし

又た西洋にての寄席などの如き場所にて一寸前藝として此の自轉車の曲乗りをなすも往々少ながら其の乗方の色々あれども先づ其の一例を擧げんに彼の曲乗の藝人の左も輕快に見ゆる直徑四五尺許りの大輪付きたる二輪自轉車を舞臺の中央に持出だし最初の之れに打乗りて廣しと云へど限りある舞臺の上を縦横十字に或は斜めに或は直ぐに自由自在に乗り廻りし又た勢ひ込て走り居る車を腰を捻りて忽ち中止し瞬息五ツ六ツする間云へる者の恰かも二本足にて屹立せるが如くぞみたるま、少しも動かさず此外或の車は停め片足を車上に掛けたるのみにて半身の落ち掛りながら宙に留まり居り或の枕の如き小さき箱を幾個もく、高



身軀之  
輕捷廻  
轉之妙  
目前如  
見

く積立てたる上に彼の自轉車を置きて身軀をバ車上に安じヤツとメメ居  
 る等種々の技を演せるすえ終は彼の自轉車は次第く解きて仕舞には  
 執手も踏處もなき大輪のみを裸よて殘し之れを子供が輪を廻す如く二  
 三尺向ふに轉がし置きてアトより之れに飛乗り手に執るべき所も無けれ  
 ば足に踏むべき所も無きに唯だ輪の中央なる心棒の嵌る可き穴の周圍の  
 少し高くなり居るを足掛りに突立ちて足の方にては左足右足更るく下  
 を蹴廻のしつ、手にては又た圈金を手繰り手足相須ちて其の勢を助けな  
 がら馳せ廻ぐる中に遂に非常の速力を生じ全然尋常の自轉車と其の早  
 さを同ふするに至る杯は最も熟練を見るなり然れども更に一とキツ目覺  
 しきの自轉車の曲乗濟みたる處にて餘興として大八車の隻輪を外し來り  
 前の自轉車の裸輪同様に之れに打ち乗りて自在に馳せ廻ぐる様前の自轉  
 車の輪との事違ひ不細工に重もく大きなものなれば之れを乗りこなす  
 手際ハ又一ト入の熟練と感心せり此程コロムホにてマールトゼー氏が種々

の伎倆を乘人に示したりと云ふも彼地にてコクある所の曲乗と見合せな  
 ば餘り異なりたる事もあらざるべきやに想像せらるゝなり

○問 米國にて名高きモルモン宗徒の開拓地なるソート、ソーキ、シテールに  
 御立寄成し由其の有様の如何

○答 余等の乗りたる瀟車ハユニオン、パシフィック、會社の線路にしてユ  
 ータ州のオグデンにて瀟車を繼ぎ代へる趣向なりしオグデンよりソート、  
 ソーキ、シテール迄少し寄り途にのなれども僅かに一二時間にて往かる、處  
 なれば見物の爲め悠々寄り途をなす人も多きなり御承知の如く右の都府  
 の名高きソート、ソーキ、シテール(湖湖)なる大湖に沿ひたる者よて余等がオグデン  
 を發して最早や二三分にて彼の都府に到着すべき筈なりし途中より途  
 に一曲の灣水に多少映影を深べたる者の徐々として窓前に現われ出でし  
 を見たる然れども愈々都府に近づくに及ては復た見へきありき

此都府は今を去る四十年許即ち千八百四十七年の七月中モルモン宗徒の



文明國  
市街固  
不可不  
如此

二組百四十三人が始めて開拓したる所にして最初より町の割方杯に大に意を用ひ十エール(凡そ四町餘宛を仕切りて一區畫なし此の區畫の四面に外に向けて家を建て列らね此乃區畫を幾個もく井然と相對し合せて遂に全都府を組み立てたるものなり而して是等此區畫同士の間隙即ち町幅の百二十八英尺(凡そ二十一間半)と定め又た町の兩側の家をして門口を互ひナカヒにして向ふ同士迭みに店を眺め合ふとのなき様にしたる杯の殊に意を用ひたる處なる由余等の素てより斯る話を聞き居たれば如何にやと觀るを樂み居たり漁車の到着せるの恰も夕方にて晚餐を終ると其儘杖を提げて直ぐ様市中を散歩し視たるに成程町の區畫の井然となし居る有様往來の幅廣く直ぐにして所謂大道髮比如しとも稱すべき程に整のひ居る有様皆を素て聞けるに違ひせ又た家の檐下より二間許り出でたる兩側共三四尺許りの廣さの溝掘りありて是に絶えを浚々として水の流れ居るあり折しも夏分の事なれば此の溝を横ぎりて板を渡し其上に

椅子杯置きて納涼臺となしすいみ居る人々も多かりし元來此地の土質輕鬆にして少しく風吹けば土の皆な灰の如くに颯がり翻へるを見たり左れば是等の溝の土を潤はそにも必要なる事なる可しと想れたり又た町の兩側に植付けある樹の皆な大きく生長して割合に弱木の少かりし亦た以て最初より町の割方都べて成算ありて樹木植付けの事杯も既に夙より着手の整ひ居し者なるを推量すべし要するに市中區畫の井然として且つ町の組立の接排宜しさを得たる工合の歐洲大都府もまさしく及ばざる所あるべし舊國の都府の在り來りの家並をアトより取締ふに過ぎざれども此の都府の如きの最初より先づ圖引を定め置て後ら建てたるものなれば其の善く行届くも尤もなり

○問 引續てソート、レーキ、シテ一の有様並にモルモン宗の事を承り度し  
○答 先づモルモン宗の奇談より記さんに御承知の如くモルモン宗の今より五十年許前に米國の一賤民なるジョセーフ、スミス、の開創せる一派にし



東洋記  
豪傑之  
事蹟多  
其母感  
夢而孕  
彼豫言  
而生之  
其歷史  
叙事自  
異焉

て此のスキスなる者の別に著へられたる程の履歴もなき田舎百姓の息子な  
り左れど其の母の何か異常の處ありし婦人なりしと見へ平生より口癖の  
如くに己れと必き一人の豫言者を生むべしと云ひ居たり豫言者との將來  
の世事人事を豫言せるもの、義にて其豫言せる所の皆な神の感應より出  
づると稱するなり昔より西洋にて一宗を開創せる祖師又の之を承述して  
其道を弘めたる上人等の大抵斯の豫言者と名けらる、種類の人々なり此  
の婦人の腹にの彼のスキスの外に尙は幾個の子供を擧げたりしが母の亦  
た何か認る所やありけん他の兄をバ棄置さ彼のスキスのみをバ幼き時よ  
り斯の子こそ行くく豫言者となるべき者なりとて殊更に誇り居り然る  
に又た不思議と稱すべき此のスキス如何なる故にや生れ落ちて一向に  
笑ふと云ふとをなき尋常の子供あらんにの物心つき染むる頃より人の  
腕又の膝の上に在てもアナヲユナヲと打眺め看廻し或の嬉々ど笑ふと  
の多さが通例なるに此のスキスに限りての更に笑へるとなく唯だ恒に下

は俯ひき居るのみなりし又た少しく生長して遊び戯むる、よも他の兒童  
の如くよ子供らしき譯もなき事をバ爲さき仍復下俯いて唯だ何か思慮し  
居る様なりければ其の十二三歳は達せる頃は蚤くも近村の評判となりス  
スキスこそ凡物ならぞと云ひ離すまでよ至りたり孔子が子供の時よマ、事  
して遊ぶよも宗廟の祭の眞似をなしたる杯後來世の中よ立ちて多くにせ  
よ少くよせよ衆人を率ゐて一派の教をも建つる者の兒童の頃より既よ何  
か常よ異なりたる行状のあるものと見ゆ又た此よ非れば衆人を服するよ  
の至らざるものと見ゆ今の清朝の初めに支那の田舎よ或る子供ありて鴨  
を畜ふよ妙を得其の子供の聲さへか、れば數多の鴨のアナヲユナに散じ居  
るものも皆な一行よなりて列を正し揃ひ歩くとの事より其評判高くな  
り其子供の終に謀反人の首領と戴かれて一時地方を亂せる話あり是の其  
の異常を政治上よ利用したる者なれどもスキスの方へ素てより母の口癖  
よ言ひ居たるが如く之を宗教上よ利用して乃ち今のモルモン宗を組立つ



疑密緇納之  
密談可

るに至りしなりスミスが十五六歳の時井戸の中より一塊の怪石を掘り出  
 だしたるは此怪石の懸掛けすれば何か感應のある由を云ひ出したる事が  
 則ちスミスの始て宗教世界に一ト足を踏みかけたる初歩なりしと覺へら  
 る此頃の近村にてスミスの取沙汰既々喧すしくなり居たる時なりしかバ  
 扱こそとて之を信仰する者も希れならざりしものと察せらる然れどもス  
 ミスが眞に踏込て一宗の祖師となりし其の後ナカエより行脚し來れる  
 一僧がスミスの噂を聞傳へて一日突然其の居を訪ひ終日何か密談して別  
 れたる時を以て始めとなそ是より幾はともなくスミスハ神の告げにより  
 て或る山嶺より銅牌若干枚を掘り出だせり其牌面は鐫りあるハ皆なイス  
 レールの古語なりしをスミスが神の助けによりて讀み得たる所と據るは  
 是ハ所謂るイスレール十族の一ある猶太王レヒーの子エフヒーの記した  
 る者なりエフヒーハ國難を避けて其の一族と共に故郷なるイエルサレム  
 を迷ひ出で大洋を横ざりて此の米國に殖民したりしが其事を長なへ傳

創事者  
被殺者  
事者成  
世問比  
也創者  
之身豈  
不危殆  
手

へん爲め手づから其前後の顛末を録して茲に藏し置きたるなり因てスミ  
 スハ自から之を英文に譯して出版せり則ち今のモルモン宗の經典ブック、  
 オフ、モルモンと稱する者なり  
 スミスが其の經典を出版してモルモン宗を首唱し出だせるハ其の三十歳  
 許りの時なりしと覺ゆ今を去る僅かに五十年程の事なり然れどもスミス  
 ハモルモン宗を首唱し出だせる後幾はともなく地方を説法し廻られる中  
 に暗殺せられ其アトをハブリエカム、ヤングと云へるが襲ぎて七八年前其  
 の歿する日までの常にモルモン宗の管長となり居しなり  
 モルモン宗が米國人ハ本と神聖なりイスレールの古族の移住したる者な  
 りと言ひ出たるハ大に米國人の心に叶ひたる所なるべし又たモルモン宗  
 の他宗と特に目立ちて殊なりたる一點ハ御承知の如く一夫妻を正道とす  
 る一事なり余等が彼の前管長なるブリエカム、ヤングの墓を見物せる時モ  
 案内者の門前にて是がヤングと其の諸妻との墓にて候と案内せり成程ヤ



ソグの墓を中央に据へ其他彼の隅此の隅に都合三基の墓あり皆ヤングの妻を葬りたるものなりき西洋の墓にハ十字架を彫り付る杯色々の形ちにせる石を樹てし日本の如き風の者と又た之を平に地上に寝せたる者との二様ありヤング及び其諸妻の墓は即ち第二の地上に寝せたる方の者にして長方形なる大理石の上に其の姓名月日等を記したる質素のものなりし又た其の墓地も餘りに廣からぞ十間乃至二十間四方なりしと覺ゆ

○問 引續きてソート、レーキ、メンターの有様を承りたりし

○答 前記せる如くモルモン宗の創立以來僅かに五十年許にあるかならぬの間なれども之に歸依する者の中々に少からぬ有様なれば他の耶蘇教徒の者共ハ頗る心配なる趣よて種々の手を盡ま或ハ問者を縦ちてモルモン宗徒とならしめあるハハ尋常の旅客となりて彼都府に滞留し色々秘密なる内事をも聞き出し其の奇談も甚だ多きなり今ま其の秘密の一二を掲げん又故の世界の始めに當りエホバの神が創めてアマムなる男子一人を

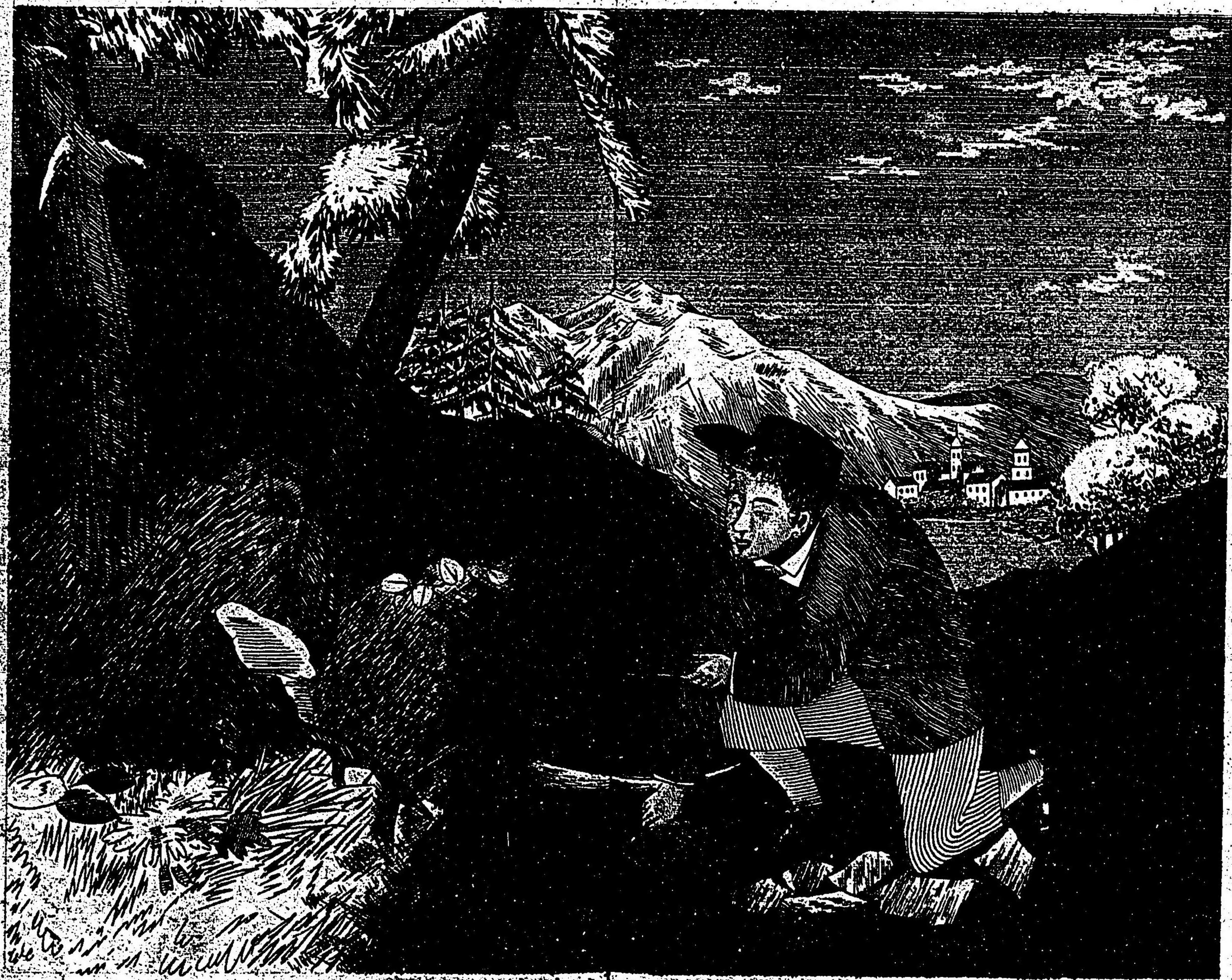
作り又た其の肋骨を抜き取りてイープなる女子一人を作り此の男女二人を花園に住らせ置しにアマム、イープの悪魔に惑はされエホバの神が豫ねて食ふべからぞと命じ置きたる木實を食ひたるより神ハ大に怒り始めて人類に死と云へる罰を與へ是よりして人類ハ蕃殖し乍らも死と云へる事必き之れ又伴ふ様なりしと云へる經典の本文に従ひモルモン宗又入る者にハ最初此の始末をバ見振芝居よて示す儀式ありたれば始めてモルモン宗又入りたしと申し出る信者をバ先づホノ暗らき風呂場に導き異様なる衣服着けたる婦人出で來りて身体を洗ふ是れ現世の塵濁を洗ふて尊とさ神の徒となるの印なり此の洗禮畢りたる處にて又々之れをホノ暗き一室よ導くなり信者の此處に待ち居る中忽ち隣室よて何か物語る聲漏れ聞ゆるなり是れ神が天上にて愈々下界に人類を作らんとの相談をなそ處なり此の相談終りたる處よて下界の花園に集どりたる前面の庭に下り來り此處よ色々の男女出で、前記のアマム、イープを作る事より悪魔に誘は



る、迄の始末を演ず殊に彼の兩人が神の誠を破て食ふと云へる木實杯は樹身のじめ一切其處の壁に畫がきあるなりと云ふ甚だ子供らしき事に似たれども其歸依の者共より觀れば轉だ信心を増さしむる者を見ゆ此事の近來米國の耶穌教徒が間者となりて入り込み自身現に目撃して探り出したる秘密なり

モルモン宗の本山の今日にての年々一百万圓の収入ある由にて此の一万圓の多く宣教師を派出し其宗旨を弘むる事に用ゆると云へり余等のバナクルと稱する彼宗の寺院を見物せるに全体の結構の先づ一寸舊の明治會堂の如きものにて只だ廣き會堂の左右及び後邊にかけ四角狀の二階を着けたるのみ極めて質素なる普請なりし壁上に彼の祖師エモスが神の告げにより銅牌を掘り出す處を齎さありしが是も餘り感服すべき程の手に非りし會堂の前面に例の如く説法壇ありて其壇上の模様杯の別に目立ちたる程變りし處もあらざりし此の會堂の都合二万人を坐せしむ





スミス銅牌ヲ出ルノ備



實用理  
學尤妙

る者の由にて殊<sup>こと</sup>意を用ひたるハ堂内音聲返響の趣向<sup>しゆきう</sup>なり番人が余等を導<sup>みちび</sup>きて會堂の後邊<sup>ちゆうがわ</sup>の壁際<sup>かべぎは</sup>に立たしめ己れハ其反對の端ある前面說法壇の上に立ち小さきベン先をボトリと机の上に落<sup>お</sup>したるに其響き明らかに三十間此方<sup>こなた</sup>に立ちたる余等の耳<sup>みみ</sup>に聞<sup>きこ</sup>えたり

右<sup>みぎ</sup>マパナツルの外觀の異様なるハ屋根の色尋常の瓦なると違ひ一寸日本の草葺<sup>くさぶき</sup>の如く見へし事なり又た此近邊<sup>きんぺん</sup>に新たに大なる寺院を建立<sup>けんりつ</sup>しかけ尙<sup>なほ</sup>は普請<sup>ふしん</sup>中なるを見しが前のマパナツルが堂内の柱<sup>はしら</sup>ハ悉く木の地を色とり大理石、蠟石、椽<sup>せん</sup>になしたる杯<sup>さか</sup>のエマカシとい大に違ひ皆な立派なる石材にて組立<sup>くみだて</sup>て居りたり

○問 一夫多妻<sup>いつふたさい</sup>の有様又ハモルモン宗と他宗とが關係<sup>くわんがい</sup>等に付き何か目立ちたる事ソート、レーキ、ジターに之れありや

一夫多妻<sup>いつふたさい</sup>の正道<sup>せうだう</sup>たる<sup>と</sup>否<sup>いな</sup>とい扱置<sup>さくぢ</sup>き一夫に事かふる多くの細君<sup>さいくん</sup>が皆<sup>みな</sup>な幸福<sup>こうふく</sup>なりや否<sup>いな</sup>といの一事<sup>いこと</sup>ハ頗<sup>おほ</sup>る話<sup>はなし</sup>の多<sup>おほ</sup>き所なり兩三年前の事と覺<sup>おぼ</sup>ゆ彼







る時より其旨を馬車の馭者に申付け置きしに市中の見物都べて畢りて旅舎に返着く迄彼の馭者の到頭彼の取扱所に立寄り老之を責むれば只だ何か口中にてグズグズ嘔吐くのみにて更に動かさ餘りに面倒なれば遂にツユより下りしがアトにて考へ合それば彼の取扱所は耶蘇教徒なる米國人の出張所なればモルモン宗徒たる彼の馭者の之れを仇とし悪くみて故さらしに立寄りざりし者なり

モルモン宗徒の内規の至極善く行届き五人組に伍長を置き伍長を都ぶるに百人長あり百人長を都ぶるに万人の頭ありと云へる如き仕組にて終りの之を本山の一ト手にて總管せる杯の趣の都合好く出来居る由なり他宗の者共の評判にての彼の宗徒の經畫の追々に米國の國會議員中に其の宗徒のものの幾名を出だし幾分か議場の勢力を占めたる所にて彼のユーマ州(ソートレーキンター)の即ちユーマ州の首府なり)をバ行くと獨立の一邦となし此にモルモン宗の本據を定めて是より次第に米國を蠶食して

是蒼蠅  
想冲天  
驚馬望  
千里手  
阿々

己れの宗旨に引き入れ米國を一統し了りたる處にて終りに全世界をして悉くモルモン宗國と變せしむべしとの企なりと云へり彼の宗徒の心持より云ハゞ其位の處まで勿論意氣込なくしてのならぬ筈にもならんか先づ實際に其の第一歩すら覺束なげなる有様なり

ソートレーキンターにのモルモン宗徒の専有の機關新聞もあるなり

○問 彼地にて歳暮年始の儀式の如何

○答 歳暮年始の儀式の佛國と英國との稍異なる所ある様に覺ゆ佛國にての専ら年始を祝する様なるが英國にての専らクリスマスとマスを祝するとなりクリスマスとマスの耶蘇基督の誕生日にて十二月廿五日の曉なり此日をクリスマスと稱へ是れより一月初めに掛けての先づ英國にて重なる商店は大休と云ふべき有様なり則ちクリスマスとマスの歳暮年始を兼ねたる一年中の大なる切れ目と云ふも可なるへし

親戚朋友知人に對し一年中の歳暮年始の折目切目の祝日なればクリスマス



興我臘  
月正月  
其趣相  
同

マスの騒ぎと云へば最早十二月の初めよりソロソロと騒ぎ掛ける譯にて店々の前に「クリスマス進物御用」杯と書つけ種々様々の物を列べて賣捌くなり又此の頃になれば一般の人氣も何となくソハソハとして恰も日本の正月前の如き心地せり最も得意なるハ子供にて祖父祖母或ハ叔父母兩親兄弟杯より其貧富相應の玩物手道具の類を澤山に貰ひ受るを心待ちに待受け樂み暮すなり又互ひに意を属し居る若き男女の如きハ此の機を幸ひに然るべき贈物を爲して情好を通さるもあるべし又日頃の無沙汰を此時の進物にて詫る朋友も多かるべく萬事一切の折目切目の十二月二十五日のクリスマスより大切なるものなしと考へ居る風習なり又通例の知人にて品物を贈答する程に至ぬ者も互ひにクリスマス、カート、と稱へる一種の名札様ものを贈答するなり此の札ハ大小精粗種々様々あれども先づ通例ハ四寸内外のものにて恰も西洋カルタの如く細長き格好なるが通例なり而して其表面にハ或は草花或ハ人物杯種々様々の面白

き洒落たる繪に彩色を加へて印刷しあり又其上に「汝の幸福を希ふ」とか或ハ「目出度今年」とか「嬉しき一年」とか種々の文句を記載しあり此のカルタの背面に兎方の名を書し又此方の名を書し互ひに贈答して懸意を表するなり然れば十二月廿五日前後は郵便夫ハ大困りにて平常の書面に比すれば幾十倍とも云ふべき状袋を運送するなり左れば配達するたび下女杯に向て其骨折を述べ立るも少なからせ又年中出入りの郵便配達人其他の者にハ此のクリスマスの際に少々の心付けを興ふる家も甚だ多し是等の有様ハ恰も日本の歳暮年始と同様なり  
 備てクリトスマスの前晩ハ子供の身に取てハ此上もなき樂みの夜にて何時の頃よりの言ひ習はせにや靴足袋を其の寝間の扉に釣り下げ置く時ハ天人が來りて種々様々の玩物を授くるとか云へるとにて此等を爲す童男童女も少なからせ就てハ其家の父母兄弟祖父祖母杯ハ豫て用意し置たる種々様々の玩物をクリスマス朝子供の未だ目を覺さざる内に其寢床



の近所に堆く積み置き子供の朝、目を開けば己れの周囲に人形其他種々様々の物あるを見て先づ第一に悦び居るなり斯の如き始末にてクリスマス・マスの先づ家内の祝ひ日にて他人雑らきの樂みを爲す日と視做する可なるべし

クリスマス・マスの前日よりの恰も日本の松飾を爲すが如く緑葉を以て種々の飾付を爲すなり英國にては右の飾りに用ゆる木に二種ありて其一は日本の柗の類にて赤き實の結り居る様に覺へたり又他の一は日本にもあれども稀に見掛る所のものにて先づ楓の如きものなり此の二種とも先づ常盤木の類にて其葉の十二月頃青々とし赤或は白の愛らしき實を其間に着け居るとなれば歳暮年始の飾りとして恰も申分なきものなり左れば此の二種の木の右祝日の十日前より處々方々にて日本の門松を售る如く售り行くなり因て之を買入て先づ通例天井より下がり居る瓦斯ランプに飾り付け或は室内に飾りある鏡の縁杯に飾り付るもあり又其邊の額杯の縁

に飾り付るもあり斯く此の緑葉の室内に飾り付けあるを見れば何となく人氣もサエぐどなる心地するなり異郷の者に在てすらも斯の如くなれば子供の時より是れに慣れ居る彼地の人々にては定めて我々が正月のお飾りを視る如き心地するとなるべし

○問 其他のクリスマス・マスの景況の如何

○答 扱十二月廿五日のクリスマス・マスの當日なれば其拂曉より寺々にては日曜安息日の如く鐘にナン／＼と鐘を鳴すと共に爺媪の如き老人を首め其他家内の然るべき者の先づ第一寺参りを爲すなり又寺々の方に在りては固より祖師降誕の日の事なれば無二の盛んなる儀式日にてソレ／＼飾りを爲し祭禮を執行ふ参詣人の寺の儀式濟みてソレより各々定まれる親戚の集會所に赴くなり此日の親戚朋友團集して樂みを爲すとなれば豫てより何れの家に打寄るべしとか誰の所を此の會に用ふべしとか父子兄弟祖父母杯の間にて定あるとなれば其處に一家族落ち合ふなり是れ彼地に



心中之快樂莫大於父子親戚團樂而相談笑

て父子兄弟別居する。と持前の風俗なれば一家族落ち合ふて歡を盡すに  
祖父の家とか親の家とか子の家とか兄弟の家とかと皆な落ち合はねばな  
らぬ都合なるが故なり  
晝飯を以て宴會の時と爲すもあり又晩飯を以て其時と爲すもあり炙りた  
る鵝鳥及びクリスマスプツタンクと稱る盛物菓子の如きの恰も日本の  
正月の雜煮同様是非此日に添はねばならぬ獻立なり鵝鳥の間に合はざ  
る所の牛肉にて其代りとなすも少なからず斯くして上等は上等、下等下  
等、夫れく打寄りて歡を盡し、此日を樂み暮すとなり  
左れば當日の都て店々の戸を閉め倫敦市中の外觀の恰も日曜日の淋しさ  
に尙は一層甚しきを加へたるものにて家内の樂みなき旅客杯の身に隨  
分因却する日柄なり偕てクリスマスの當日を遇れば其翌日より諸興行觀  
世物芝居の一年中の當て込み時にて何れの場所くも塞がり切る程の始  
末あり平常閑なき手代番頭職人其他仕事ある者共此の二三日の手足を

旅客固不能團樂無聊亦可想矣

伸バして氣樂は遊び得る時なれば中以下の遊び場の別して賑ひ榮ゆる  
なり

○問 英國杯にて通例品物を贈答するとの日本と同様な趣なるや如何  
○答 品物を贈るとの随分日本と同様な場合もある様に見掛たれども  
日本の如く頻繁にあらざるが如し先づ英國杯にて品物を贈るの第一婚  
禮の儀式の時なり此の時に或の座右に置くべき文房具又の花嫁の襟飾  
腕環其他茶道具の類を親戚朋友より祝ひとして贈り遣すと實は盛んなる  
風俗なり少し身元ある人なれば其親戚朋友も亦身元あるが故に其の贈り  
物のみにても中人以下の身代位の金高は積るなりと云へり右婚禮の外に  
の別に品物をヤリトリすべき定まれる節なし但だ田舎に旅行し或の遠國  
に旅行する時の其地方くの綺麗ある産物を歸還して贈る者の甚だ多  
似たり又其他地方より倫敦杯は用事ありて出京せる人々が一夜にても二  
夜にても其相知れる人の家に引止られて逗留杯する節は其宿料の返禮と



云へる意味にもあるべきか一寸したる小道具或ハ額面杯を其家の主人主婦娘杯よソソく贈るも少からせ又ママくハ面會する知人よハ一寸したる手綺麗なる其地方の産物杯を贈るともあり

使讀岐  
見此狀  
將亦何  
言

英國杯にてハ銘々の誕生日をバ其身に取りてハ非常なる一年の祝ひ日と爲すにて男女に限らせ己れの誕生日にハ其の身寄りの者を會し茶話會にても開くか或ハ少し身元好きとこ徳ハ小宴にても開くかする者少ならせ又誕生日にハ父母たるものハその子に一寸としたる品物にても必らせ之に贈り又子たる者ハ其父母に對してハ心計の贈物をも是非爲す杯賦に床しく優しき風俗なり又同居せる父子兄弟の間にて誕生日にハソソく贈物を爲す者通例なり就中子供の如きハ誕生日とさへ云へバ其父母兄弟より種々の玩物類を必らせ貰ふ可きの日なりと心得心待ちに樂み居る有様なり  
又たポアスデー、ブソソ(生日録と譯す可き歟)とて華視文房具を賣る店々に

此風俗  
誠可稱

三寸四方計りの手綺麗に拵へたる金縁の小冊子を賣り居れり是ハ銘々所持して己れの父母兄弟朋友知人の荷めにも誕生日の贈物を爲すべき人々の誕生日を忘れぬ様記るし置くべき爲の手扣にて一年中の月日をバ綺麗に印刷しあり英國の子女にして此の生日録を携へ居らざる者なし親戚知人にありながら其誕生日音信贈答を爲さざる時ハ甚だしき不愛想の人の如く思ひぬる、となり

右の誕生日を祝する風ハ至極宜しきものにて斯る折目切目あればこそ親戚朋友も互ひに其縁を厚くする機會を得るとなり如何に懐かしく思へばとて我心を表するの折目切目一年中に之れなき時ハ自然其情の薄らぐとも有り勝ちのものなればなり

英國有  
三奇盛  
冬見青  
草霧多  
而無濕

○問 倫敦邊にて氣候の異りたるよりして推及べる色々の風俗もあるべし如何  
○答 夏の外の春、秋、冬の三期異常に蝙蝠傘を携へ居らせしてハ不都合